東・西日本リアリズム演劇会議合同機関誌

演劇会議

■ 広島は雨後晴
＜第8回西リ演ゼミナール
の断片的報告＞ ……栗原 省……1
気魄にみちた壮大な挑戦・モデル上演月曜会の
＜ジョー・ヒル＞を観て ……猿渡公一……7
□ ブロック会議その他の旅から ……黒沢参吉……11
対談 熊本一・林田時夫
〝大阪春の演劇まつり〟を終えて ……司会 仲 武司……17
関西における戦前プロレタリア演劇の研究(4)
……大岡欽治……21
■ 劇団通信 ……29
「熱よお前なぜ来ないのだ」作業メモ ……大橋喜一……42
「村山知義先生追悼」―3ケ月たって― …関口 潤……47
私の報告＜考えさせられたこと＞ ……森 賢郎……49
■ 劇 評
「どん底」（劇団未来） ……藤沢 薫……53
観劇雑感 ……萩坂桃彦……56
ベルトルト・ブレヒト作 ……訳 野村 修
亡命者の対話 ……構成 宮城クメコ……59

36

1977年8月 ¥350

四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス
四季ファブリックハウス

広島は雨後晴

〈第八回西リ演ゼミナールの断片的報告〉

栗原　省
（劇団・いこら）

従来〝総会ゼミナール〟とひっつけてやってきたのを、今年から〝ゼミナールは六月〟〝総会は八月〟実施ということにした。

参加する側も運営する側も、経済的、肉体的、且つ精神的負担が重すぎるし、それだけ苦労してお祭り的集会をやることにどれだけの意義が見出せるか？　小規模でもいいからもっと実のあるものにした方が……というような事務局提案から今回の二本立て興業になった――と思う。

一、第一日目のこと・講演

真夏の炎天下乃至は台風情報におののきながらでないと、どうもゼミナールの気分が出ない。「総会・ゼミナールは八月」というのがどうやら生理感情になる迄に習慣づいてしまったようで、―やあ！やあ！」と顔を合せても「何しに来たの？何か広島に用事でも？」とおたがいの眼を覗き合い、そのあとで「あゝそうだった。自分は西リ演のゼミナールに参加するため広島へやってきたのであった。」と我が身に云いきかせて納得する始末で、どうもサマにならない。「人間とは何たる保守的慣性的存在であることよ！」とほと〳〵呆れながら、講演会場の薬業会館に着いた頃雨が降りだした。案の条、全体会の集りの悪いこと！そして劇団紹介のもう一つ冴えないこと！　広島の雨はしとしと。そのうちざあざあとなり、劇団紹介は皆「まあ、何とかやっています。ここで勉強して帰って何か……つぶさんように…ひとつ……」てな調子にきこえた。ただ、昨年、森本氏が「どん底か？　解散か？」と沈痛に報告した「劇団・未来」が、「どん底」を生きぬいて（森本演出で公演がおわったばかり！）どれもこれも自信に満ちみちた表情で参加していたのが目立った。力一杯仕事をした顔ってなんていい顔なんだろう！

つづいて森田先生の講演に入った。

講師紹介。森田俊男。大正十年大分県生れ。国民教育研究所所長。和光大学講師（沖縄史、地域教育論）昨年「森田俊男教育論集」全四巻をまとめられ民衆社より出版（一巻二〇〇〇円。為念）他に著書、編書多し。とに角大変えらい学者先生である。もっとも「学者」と聞くと内外の学術

東リ演第17回演劇ゼミナール

―モデル上演「旅立ち」を軸に学び合おう―

とき　8月20日（土）后6時半～21日（日）后3時半

ところ　静岡県舞阪町町民センター（開会・上演）
（東海道本線弁天島駅より10分）
第2会場・新居町清風荘（宿泊・交流・分科会）
（東海道本線新居町駅よりバス10分）

参加費　4,800円（1泊2食＋モデル上演協力費）

モデル上演　**劇団静芸**
小島真木作・西槇太演出〝旅立ち〟（演劇会議№35掲載）
分科会　① 演出　② 創作　③ 制作
④ 舞台美術　⑤ 私と舞台（6班編成）
― チユーターは東リ演の精鋭を網羅 ―

ゼミナール連絡先　実行委・劇団からっかぜ
浜松市曳馬町1409（0534―63―6011）

〔**東リ演第15回総会**　8月19日―20日　清風荘〕

西リ演第16回総会（ゼミを分離して充実をはかった）
8月20日～21日・和歌山県湯浅町　綜合センター
歓迎上演　**劇団いこら〝裸の王さま〟**　参加費　5,000
問合せ　神戸市灘区稗原町2―3―8　久語孝雄方

西リ演事務局

書に埋め尽された研究室にとじこもり、世間のことには一切無頓着……といったタイプを連想し勝ちだが、ところがこの先生。そう頑強でもない大きな図体（失礼）を引づって全国を西に東にかけまわり、地域や教育現場からつねにじかに日本の教育問題を捉えようとされておられる。故上原専禄先生（歴史学者、前国民教育研究所議長）の遺志を継がれ、自民党の地域破壊、国家主義的教育支配に反対し、一貫して地域、自治体の民主的変革と教育の自由、創造性の奪還――地域の統治力、教育力を取返えす国民的たたかいに学問理論面から寄与してこられた人である。先生は、今日〃地域をおのが手に〃という民衆のたたかいの中に「――ほかならぬ勤労人民が〃この地を創造の源泉としてとらえ直し〃〃この地に民衆が生み、伝えてきた文化を創造的に継承し、地域が一つの個性的な創造主体となる〃ということの追及」（教育論集第一巻28頁）の必要性を痛感し、そういう観点から「リアリズム演劇運動が一貫して地域にねざす演劇論を追及している。」（教育論集第二巻24頁）ことに以前から注目してこられたようである。

私も以前本誌26号（47年3月）に〃「地域に根ざした」ということ〃という雑文で先生の所論を紹介したことがあり、東西リ演と森田先生とのおつき合いは少くとも三年越しということになる。

そこで講演要旨――ということになるが、およそこの「要旨」って奴ほど面白くないものはない。同じ広島で御自身が関係しておられる「平和教育シンポジューム」が開催されており、その会議のあい間を縫って講演会場へ来られた先生は、予定の一時間半をはるかにオーバーしてもなお黒板をたたき、演壇の前をあるきまわり、汗をふきふき話して下さったものである。私は何回か先生と御一諸したことがあるが、いつも物静かで整然たる話し方をされる先生が、こんなにも熱っぽく、こんなにも噛んで含めるように講演されたのにはいささかびっくりした。芝居をやる連中はいずれ非論理的で理解力の弱い輩の集りであろうからという配慮もあり、日頃の聴衆と勝手が違うなあという途迷いもあったに違いない。がそれ以上に、先生のリアリズム演劇運動への期待の大きさが、御自身若き日演劇に浮き身をやつされた経験もある森田先生をしてかくも情熱的たらしめたのだろうか。

「要旨」などまとめるべくもないので、読者にははぜひ一寸高価だが「森田俊男教育論集」（民衆社）から「われ〳〵にとって地域とは何か」を直接お考え願うこととして、ここでは私がとくにつよく印象づけられた点をのべるに止めたい。

第一点は支配者の危機が深まる時その「地域」支配が狂暴化することの歴史的経験についてである。一九六〇年代以降の政府自民党の地域支配、地域の「地方化」政策を全く新しい独占資本主義の攻撃と受けとめていた私は、一九四〇年前後の日本軍国主義が軍需工場、飛行場、道路などをつくるため「地域開発」を強行したことと比較されての分析に大変眼を開かれるものがあった。「地域」破壊政策の本質は日本資本主義の構造的危機の深刻化にあるという捉え方をきっちり押える必要があると思った。

第二に自民党の「地域」破壊政策は地域住民を〃まる裸か〃にしてしまい、そのことがかえって住民の猛烈な要求を引出すことになり、「地域」に矛盾が集中するようになった

ことについてである。日本人は安保で主権と土地を奪われ、農基法農政で農地や仕事をうばわれ、地域開発によって海や山や食糧や健康さえ奪われた。そして「家庭」の機能も、子供のあそびや言葉も、「地域」の文化ぐるみ破壊された。現在最も丸裸かにされているのは中小零細企業層であり（ここでも昭和十六年以降中小零細企業が閉鎖されて、店主まで軍需工場にかりたてられた歴史的経験が想起される）独占の地域支配は住民をこうした〃丸裸か〃にすることによってすすめられたのである。

第三に、しかし、こうした〃丸裸か〃政策は支配権力内部にも矛盾を生みだして来ずにはおらない。こうした強行は、支配階級が〃かなり疲れている〃ことの裏がえしであり（戦争末期を想起せよ。）彼等はどうしても民衆、「地域」住民の自発性、積極性を引出すことなしには今日の資本主義が維持出来ないことを知るようになる。例えば「地域」支配は必然的に「地方公務員」の数を激増させる。（戦争末期、隣組まで組織し、食料配給、戦傷、戦死者の処理、結核の増加等々に対処させるようになる。民衆にそこまで仕事させなければ支配権力は維持出来なかった。そのため彼等は、在郷軍人や国防婦人会、隣組組長などを支配権力の末端組織にくみこみ、その自発性を引出すことに必死になった。）ところで今日では、天皇制役場と全く違った型の役場労働者をつくり出し、あるいは父母の要求と結びついた教育労働者を多産せざるを得なくなっている。これらの知的労働者は自ら〃丸裸か〃政策の産物として住民要求を担って支配権力に立向うのである。ここに支配権力自らの矛盾がある。三木前総理は「自治・分権」といい、福田総理は「協調・連帯」とか云い、「自治」とか「連帯」とか本来民衆の側の主張、倫理を人民支配のスローガンとして用いざるを得ないのである。

丁度教育器機の使用が教育の個別化をすすめながら実は教育の画一化を画しているように、今日「個別化」が「画一化」と同義に用いられ、地域住民がそれぞれバラバラに分断され、そうすることで地域の地方化、地域文化の画一化がすすめられている。しかし地域住民は、農民が農民として自立しようと決意した時に一揆に結集したように、地域の自らの財産、自らの生活を奪い返す要求を自覚した時、その要求で結集せざるを得ない。それは〃個性としての（個別化ではなく）地域〃の再発見であり〃地域をおのが手に〃というたたかい、しなやかでたしかな人間生活を創造しようとする生き生きした人間的いとなみである。

われ〳〵が大衆を捉えようとする場合、観客――一人一人の個別化された――としての大衆をどう捉えるかではなく、どういう要求をもっている大衆かを摑むことこそリアリズム演劇にとって決定的に大事であることが、そこから引出されるのである。

最後に「地域に根ざす」ということの把握の仕方についてわれ〳〵の中にある若干の混乱ないし曖昧さについてである。

その一つは、やっぱり「中央」という固定概念があって、そこから「地域」を考えるという考え方があるのではないか？　東北を「みちのく（未知の奥）」とみるのは京の天皇政権を中央とする発想であり、東北の民衆からみれば京や九州こそむしろ未知の彼方の国ということになろう。東北地域とは、東北の民衆がそこで自立しそこできりひらいてきた人間的いとなみのすべての源泉であり、人間として自己認識に他ならない。

その第二は「地域」は階層をなしているということについて。例えば幼稚園通園圏とし

ての地域があり、小学校通学圏、中学校通学圏としての地域があり、その中に川が流れておりその川から田圃に水をひけば、水利権の共有としての地域がある。むらという地域（昔、惣と呼び、それはソヴィエトつまり懇談会を意味した。）があり、市・町という地域があり、県や都や府という地域がある。四国、中国、九州、近畿という西日本が全体として〝おのれが手に〟すべき瀬戸内海沿岸地域がある。支配権力はすでに瀬戸内海を総合的に利用するプランをもって着々研究をすすめているが、人民の側には、まさにここを自分たちの海として捉えようとする運動は現在成立っていない。

つまり「地域」を固定した広さ狭さの問題と考え、ヤクザの縄張りのように、ここまでが「おれの地域」隣は「よその地域」と考えるのは、そこをおのれのものとして、そこに生れ育った人々の共同の財産、価値として把握することが出来ないからではないか。それは〝まる裸か〟同志が共同して全体として取り返えさなければならない価値である。

その三は西リ演で「地域を描くのか人間を描くのか」「地域に根ざすのか人間に根ざすのか」というような論議があったがそのことについて。

よく「大衆化」ということがいわれ、それは屢々「下ってゆく」「低いところへおりてゆく」という意味に考えられがちだ。

今日大衆は自分の表現の力、自分のことばや自分の身振りすら奪われている。例えば大学生（森田先生の講義をうけている学生）に何か、生産労働の過程を図示せよとか地域の伝承文化や伝承遊びを表現せよと課しても途方に暮れるだけだ。自分の表現力を型（パターン）として身につけ（取り戻し）ていないのである。

しかし問題は地域大衆の生活こそが形象化されることを待っている、それは土台であり、われわれが何を持っていっても大衆はそれをうけとめる土台や力量を持っているのだということに確信を持ち得るかどうかである。

「生活する」ということはたたかうということでもあるが、又耐えるということでもあり、むしろ耐える時間の方がどれだけ長いことか！　大衆が耐えきれなくなり失いかけているものを繋ぎとめてゆく仕事、大衆の中にある創造の主体を見出し、型として提示し得たなら、大衆は必らずうけとめられる。必らずそれを美とし自らの財産としてうけとめるのである。

地域における民衆の労働と生活とたたかいが演劇を求めておるのであって、そこに創造の源泉があるのだ——

とまあ、ほとんど森田先生の講演にそって印象にのこった言葉の端々を綴ってみたが、果して「要旨」になったろうか？　とにかく大変原則的で重要な内容だったことだけはわかったが、われながら覚つかないことである。

二、その夜・交流会

丸山定夫が眠る「桜隊」の碑のすぐ近くにゼミナール会場「新田観光ホテル」があった。

月曜会「ジョー・ヒル」観劇のあと、私達は雨の中を会場へ結集した。すでに九時半はすぎていた　名簿でみると参加者八十二名。その他に「ジョーヒル」関係の皆さん。つまり脚色者のアンサンブルの広渡常敏さんと同じく入江洋佑さん。作曲の池辺晋一郎さん。ジャズプレイヤーで舞台で素晴しい芸術を演じてくれた井上敬三さん。それに京芸の藤沢

薫さん（客演）「ひろしまの冬」の作者上田修さん（客演）同じく出演して下さった地元合唱団の皆さん。そして土屋さん、岩井さん、高尾さん（ジョー・ヒル役）はじめ月曜会の皆さん。東リ演の小林ひろしさん。——百名を超える人々が狭い会場に埋まり、広渡さんなど端の演芸場の隅に押し込められ　それは雑然、騒然とした中で、いま観てきた「ジョーヒル」を語る交流会が開かれたのだ。観た連中も皆昂奮していたが、それ以上にこの大作にとりくみ、とうとう仕上げ、三ステージをうーんと唸るような舞台でみせてくれた月曜会をはじめ五十名近い皆さんは大変だった。本来なら道具を片付けたあと、スタッフとキャストと親身に公演成功のためとりくんでくれた支持者が身内だけで一堂に集まり、充血した眼を黙って見交し、「おつかれさん」と静かに乾杯し、黙って別れて、とにかく少しでも眠りたいところだったろうに、そこへ西リ演ゼミを持ち込まれ、それにつき合わされ、批評（？）をきかなければならない——作品が作品だけに一口にどうのこうのと云えるものでもないところを、西リ演加盟劇団がそれぞれの停滞（大変大ざっぱな云い方で叱られそうだが…）を抱えているだけに少々しんどい交流会だった。ただ井上敬三さんが、あの暖かい眼をにっこりさせ、「では今日のジョー・ヒルの印象を」とやおらサキソフォンをとりだして即興で演奏しはじめた。するとざわめいていた連中が忽ち井上さんの音に引っぱられ、昂奮し、泣きたい程感動し、演奏がおわってもしばし動けなかった。

私には音楽はさっぱりわからないのに、皮膚の全体から音がつきささりどうにも不思議な感情だった。井上さんの即興演奏は広島ゼミ交流会の最大の収穫だったろう。——「未来」の方々と「さあねようか？」と立上った時には広島の空は明るくなっていた。時計の針は五時をさしていた。

雨はすっかり上がって、昨日と打って変ったように晴れた空だった。

三、第二日目・分科会

一夜（？）あけての「分科会」。今年の「メインテーマ」は〝演劇する私達、生きている私たち〟。何だかわかったような、わからないようなこの言葉が気に入ったので……と参加を申込んでくれた劇団員もいた。同様に分科会のテーマも

第一分科会〈現代演劇を通してどう労働者のお祭りは再現されるのか！〉

第二分科会〈演劇運動の歴史のなかで演技者が果してきた役割りはなにか、又これからはどうあるべきか？〉

第三分科会〈職場の民主化に努力する私達にとって、演劇の世界はどう作用するのか？〉

第四分科会〈私が、僕がとびこんだ演劇の世界は、もっとこのようであってほしい。〉

の四テーマだったが、やはり大変文学的であり魅力的な表現で立てられていた。

例えば第一分科会は事務局が地域の働く人々にとって私達の公演は待ちのぞまれる形であったわけですが、それが今どうしてなくなったのか？」「働く人々自体が変ったのか？…私達の演劇そのものの中に、地域の働く人達から受け入れられない要因があるのか」というような問題提起をして、案内の文書にあらかじめ印刷していたにもかかわらず、〝おまつり〟という言葉の受けとり方のちがいもあり論議は噛み合わなかった。ただ昨夜土屋さんが「なぜ『ジョー・ヒル』をやったのか？」という問いかけに答えて、「別に大義名分はない。やりたいものをやるだけ……というも

の。今日の民主的文化状況の中で最後の抵抗としてとりくんだ。」と言っていたのがずっと気になったまま分科会が終ってしまった。

月曜会をはじめ広島の多くの文化団体が、おれこそ「ジョー・ヒル」を創るのだ……という気持でとりくみ、その上演が〝広島の労働者文化人の〝お祭り〟の復活に〟という呼びかけにこたえて成功させた。これまでも「まつなみ争議」や「八・六集会」で示してきた広島の労働者と文化人の結集の伝統を「ジョー・ヒル」で復活したい。と月曜会が考えた時、それが〝今日の民主的文化状況の中で最後の抵抗として〟といわしめる〝今日の民主的文化の状況〟とは何か？　恐らくその中には何よりも〝月曜会自らの状況〟が含まれており〝月曜会に参加している労働者を含む広島の労働者の文化状況〟という意味も込められていたことだろう。

「君たちの演劇に今日の労働者の状況をつきやぶる力があるか？」と問われたら「ある」と答えられる勇気はないかもしれない。しかしそんな力があろうがなかろうが、やらなければ身が「持たない」ではないか。これが最後とばかり一生一度のおもいでやりたいものをぶっつける以外ないではないか。そんな捨身の気迫を感じさせるものがあった。そういえば森本景文氏をはじめ未来の皆さんの「どん底」にもそういうものが感じられた。

それにしても広渡常敏さんは昨夜プレヒトの言葉を引用して「皆さんの場合労働者というのには少し俳優すぎるし、俳優としては少し労働者的すぎる」と皮肉った。私にとっては、それは全く厳しすぎる意見だった。われ〳〵の演劇はもはやわれわれの労働者にとって無縁な存在なのか？　労働者の関心、労働者の趣向、労働者の必要、生活のよろこびや悲しみにとって全く無用な演劇になり果てたのか？　そんな筈はない！もしそうだとしたら、われわれは一体何をしているというのだ？　そんな焦燥にさいなまれている私にとっては、それは大変過酷にきこえた。しかし、考えてみれば「演劇」ないし「俳優」であること、真に「演劇」であり真に「俳優」であることによってのみそれは労働者にうけいれられ、労働者のまねごとでない、俳優として労働者そのものが演じられることもたしかだろう。われ〳〵の演劇にとってその厳しさを追及することが弱いこと。創造に対する甘さ、なれあいこそが自ら危機をまねいているのではないかと再び広渡さんのいったことを反芻したのだった。

〝最後の抵抗〟ということとそれが真に〝演劇〟であらねばならぬこと――この二つが私が広島から持ち帰った身に余る課題であった。

（結局ここで予定の紙数が尽きてしまった。しかしかりに紙数があったとしても、ゼミナールの各分科会の特徴や討議内容を読者に伝えることは不可能だしそんな能力がある筈はない。だから最初からあきらめてたまたま出席した第一分科会のことを書いたのだが、それもそこで論議されたことに全くといっていいくらい触れられなかった。第一、記録に基いて書いたら余計わからなくなってしまうこと必定だ！　発言者司会者の皆さん。どうか御勘弁！　御容赦！）

西リ演ゼミナールは6月11日（土）午後2時より翌12日（日）午後4時まで広島で行われました。費用は一人5800円でした。

× ×

西リ演ゼミナール

●●● 気魄にみちた壮大な挑戦 ●●●

モデル上演月曜会の〈ジョー・ヒル〉を観て

猿渡公一
（福岡現代劇場）

舞台下手に組まれたパイプの台の上で救世軍の女たちが歌っている。それを聞いている街の人々。そこへIWWの宣伝隊が来て演説を始める。たちまち警官が現われその演説者を連行する。

警官　（ジョーに）きさま、この箱をかたづけて消え失せろ！

ジョー　だが、あっちの連中だって話しているじゃないか。なぜおれたちには同じ権利を認めないんだ。

警官　それはだな、あっちのは歌だからな

ジョーが救世軍の歌にあわせて、箱の上で歌う。

「牧師と奴隷」である。そのコミカルな歌いぶりに救世軍の歌を聞いていた街の人々が集まってくる。その街の人々に対してジョーを先頭に労働者たちが歌いかける。街の人達がのってくる。労働者たちの合唱が始まる。街の人の中にクラリネットを首にぶら下げた一人の老人がいる。合唱に合せて楽しそうにクラリネットを吹き始める。労働者の合唱は美しく力強くなる。と突然クラリネットのインプロヴァイゼイションが始まる。合唱はますます美しく解放されていく――

私は嬉しくなり思わず手をたたいた。芝居の途中なのにである。そして隣に座っていた劇団〝いこら〟の栗原さんに「やった！」と声をかけた。

そのクラリネットの老人が井上敬三さんである。マックス・ローチが好きだという広島を代表するジャズマンの一人であり、十年前RCCの合理化で劇団・楽団の全員が解雇されたとき、RCC芸能員労組文工隊をつくり斗ったメンバーの一人である。井上さんはいかにもらくらくとそのクラリネットの老人を演じた。クラリネットを吹きながら街の人にふりかえる身振りなどに暖かい人間の情感をあふれさせ、しかも、この「団結は力だ」という合唱の思想をそのディテールに共鳴させながら演ずることが楽しくてたまらぬというふうに――。

そのことがこの場面全体をリラックスさせ労働者たちの合唱をみるみる力強く、美しくした。そして、見る側を楽しく、開かれた状態に導いてくれた。私は、これほど見るという行為のなかで解放され、豊かになり、生き生きしたことはなかった。いや、なかったというのは言いすぎだが、ほんとにまれにしか出会えぬ出来事に出会ったのである。

今度の月曜会の上演には、井上さんだけではない。多くの人々が参加していた。ギターをかかえてこの舞台の多くの場面に登場したフォークの吉沢さん、広島合唱団、劇団木々

の会、広島市民劇場、全映テレビタレントセンターの人たち、そして広島で長く俳優を続けている上田修、延藤伊千雄、中野玲子さん更に劇団京芸の藤沢薫さんなど、四十名近い人たちがこの上演に参加していた。文字どおり参加していたのだ。歌い、演じ、肉体と精神をぶっつけ合って何かを発見し生み出そうとしていた。

月曜会の「ジョー・ヒル」の上演は気魄に満ちた壮大な一つの挑戦であった。

昨年の西り演総会で土屋さんは、もう後にはひけない地点にわれわれは立っているのではないか、そこに踏み止まって戦いをいどむことが必要なのではないかという意味の発言をしたように記憶する。上演が終ったあとの報告で、土屋さんは、やりたいものをどうしてもやるという立場に立って、あらゆる方法をさがすという姿勢をつらぬいたと言っていた。劇団内部の問題や広島の現状に対する絶望に最後の抵抗をしてみようと考えたともいった。月曜会の公演のチラシにも次のように書かれている。

「今、私たちのまわりは、不安と焦燥が渦巻いている。孤独と狂気の夜が世界を支配しようとしているかにさえみえる。歌も演劇もその〝夜〟に迎合した技術に専念し、生れ出た意味を失いかけている。

〈ジョー・ヒル〉に託して、私たちはそんな現代に挑戦してみたいのである。」

また、公演が終った夜の交流会で、作者である東京演劇アンサンブルの広渡さんは、この作品について

「踊るアホーに見るアホー、同じアホなら踊らにゃそんそんと、見る人が見ていることはつまらないからやりたくなるような練習台本を書いてみたかった。歌うことや芝居することは、その専門家だけではなく誰でもやれるんだということを示したかったし、そういうもんだと思う。そして、ここに集まった諸君は、俳優というにはあまりに労働者であり、労働者というにはあまりに俳優的だ」と言ってゼミに集まったみんなを笑わした。

私たちはつい身のたけにあわせて芝居を考える。「ないものは出ない」と考えるからだ。だが、月曜会の上演はこれを否定したところから始まったのだ。ないものを掘り出そうとすること、ないものにむかって俳優が自己否定をくりかえし「既成」をこわしていくことをもくろんだのだと思う。それは、既知のことから否定を通して認識にいたる弁証法の発見であり、主体の変革が客体の変革活動をつらぬく、まさに主体的に生きようとする人間の生の活動のダイナミズムを演劇においてとりかえすことだったと考える。

それは偉大なる素人になることであった。

そこでは演ずる者は自分自身のために演じそこには、演技にしみついた垢をふるいおとした演ずることの楽しみがあり、プレヒトの〝新しい劇場はもっぱら自らを助けようとしはじめた人々の劇場である〟という言葉のとおりに劇場は、自らが主体者であり、参加者である観客との共同研究の場、共同の楽しみの場、すなわち〝祭りの場〟となるのだ。私は月曜会が、「ジョー・ヒル」の公演を「祭」と呼んだとき祭の意味をこのように理解した。「広場としての演劇」である。そして「祭」は成立した。

月曜会の舞台では、はじめて舞台で演じた人も、はじめて歌った人もしっかりと演じ、歌った。それは私たちを感動させた。だが、それだからこそ、私は次の点にふれたいと思う。

例えば合唱団の人たちにうまく演じようとする態度がなかっただろうか。更に月曜会の諸君に。ゼミナールに集まった連中を前にしてやりにくく難しいことだと思うが、もっと素直な開かれた態度が欲しかった。

偉大な素人は研究熱心だと思う。研究をしつくしていく態度がその中心の態度になっていれば、もっと開かれた態度で芝居をすることが可能だと信じるからだ。

例えば動きすぎではないのか。

舞台は開帳場舞台であった。開帳場舞台は俳優の位置関係を明確にしてくれる舞台だ。それだからこそ位置関係は研究しつくされなければならない。それが甘いのだ。私は形式美学的なことをいっているのではない。自分の位置を決定するとき研究する態度が不充分だと思う。更に、この研究する態度が特に重要なのはディテールの問題である。この点でいくつか例をあげて考えてみたい。

「ニューヨーク一九〇二年」

ジョー　アメリカだ。

ポール　自由の女神が見える。

ジョー　絵ハガキそっくりだ。

ポール　自由の天地だ。

ジョー　ぼくたちの夢だ。

ポール　ジョー、ここはもうスコーデンじゃない、アメリカだ。

ジョー　そう、ぼくたちはとうとうアメリカへやってきた。

ポール　ここには仕事の口がごろごろしている。アメリカは自由と平等の国だ。パンフレットにそう書いてある。

ごらん、女神の像がぼくたちに笑いかけているみたいだ。

ジョー　あの中にハシゴがあって、下から頭のてっぺんまで登れるんだ。

〈二人は、遙かな上の方を見あげる〉

ポール　それにしてもまずそうな女だな、ジョー

ジョー　あんな女につかまるなよ。

この冒頭の場面は、移民船でニューヨークに上陸した二人が自由の女神をみながら、自由の国アメリカについて夢みる場面だが、私がここで問題にしたいのは、ジョー（**高尾六平**）の「あの中にハシゴがあって……」という部分である。このときのジョーのイメージのなかには、自由の天地アメリカでは、そのシンボルである女神の像がハシゴで頭のてっぺんまで登れるように自由に向って登れるハシゴがはっきりと存在していたのだ。だが作者はそのすぐ後に、〝まずそうな女だな〟、〝あんな女につかまるなよ〟という不吉な予感を置くし、ハシゴという言葉はルチアが去ったとき、カルビン少年が泣きながら語る次のせりふ

カルビン　嬉しそうだったよルチア。貧乏人には、かけがえのないものがあるなんて、ウソだね、女は階段をのぼって金持のものになれるんだ（泣いている）魚のにおいだって、香水をふりかけりゃすぐ消えちまうんだ。

の階段と対応している。だからこのハシゴというせりふの持つ二重の意味は充分研究しつくしてしゃべられなければならない。ところが高尾さんは、このせりふをこの二重の意味を持たせ得ずにしゃべってしまった。そのときの身振りはアメリカについた浮き浮きした状態の表現ではあっても、この重要な課題に対応する身振りではなかったと思う。

同じような点でいえば、刑務所に入ったジョーにエリザベス・ガーリー・フリンが面会にくる場面である。その場面の最後のせりふは次のようになっている。

ジョー　フリン、ローレンスのストライキの浪たちによろしく。
　パンだけでなく、バラをか。
フリン　パンだけでなく、バラもよ。

この「バラを」と「バラも」の違いはたいせつにしなければならないのだが、フリンを演じた**山県圭子**さんは「……もよ」ということばをたいへん聞きとりにくく、あいまいにしゃべってしまった。

もう一つ例をあげると、仕事をさがして旅をつづけるジョーと百姓女キャシーの場面である。この場は辺境を求めるジョーと静かな暮しに生きようとするキャシーとの対話の場である。あくまで対話である。つまり論理と論理が対する場だと思う。ゆれ動きながらである。ジョーは旅につかれている。海は果てしなく遠いのだ。ジョーはゆるやかな愛に飢えている。しかし海を見なくて暮せるだろうか。ジョーはゆれている。キャシーは海を見なくても暮していけるという。大陸は果てしなく山や谷や砂漠が果てしなく続いているというのだ。

ジョーはなぜ見えるかも知れない海を求めて山から山へ旅をするのか、世界の中心に居すわるのでも向うのでなく、バガボンドたちの宿営地の場でブラッキーが語るように中心から外れたところを探して、つまり辺境を探してなぜ歩きつづけるのか、この場での研究課題はたくさんある。

俳優がこの場の人物たちの言葉によってその人物の想像力を自立させようとすれば俳優は今日を生きる自らの想像力と鋭く切りむすばざるを得なくなる。

高尾さんのジョーにこのゆれが弱かったと思う。否定をくりかえして決定にいたる過程、その否定が不充分なので、最後の「ぼくのシャツで充分だ！」というジョーの選択が断乎として演ぜられても充分な説得力を持たない。これには、キャシーの次のことば

キャシー　これはパパの古いシャツだけど
　あなたに似合うわ
　病気のパパはもう起きられないの古くて
　もあなたにピッタリよ

この言葉をしゃべる位置が離れすぎていることにも原因があると思う。キャシーはジョーをつかまえたいのだ。死が近い父にかわる男であり夫である労働力を求めて、古いパパのシャツが、似合い、ピッタリのジョーを求めたのだ。キャシーを演じた**渡辺民栄**さんに、ここの暮しに退屈しているというキャシーの論理が弱かったと思う。この場面は歌の場合だからこそ一層ディテールが選びぬかれる必要があると考えるのだが。

私がこれらの三つの場面を特にひっぱり出したのは、特に気になった場面だからというわけではない。強いていえば、気になり方が気になった場面とでも云おう。

私が言いたかったのは、俳優がディテールを研究的態度で演じなければ、そのディテールに観客は研究的態度を持たず、観客が参加者になる「祭り」が成立しなくなるのではないかということである。

これが私の課題だから。

付録的めもらんだむ

——ブロック会議その他の旅から——

黒沢参吉

五月末から六月はじめにかけて、札幌、青森、仙台でそれぞれブロック会議をひらいてもらい、そこへぼくとこばやし事務局長は出席した。

東リ演総会前の運営委員会を、こういうスタイルに改めたいという二—三年来の考えを、今年から実現にうつしたわけだが、この方法だと参加者も多く、時間もタップリあり、ナマの声がきかれ、問題を具体的にふかめあえてよかった。それに（これは当初あまり考えていなかったのだが）、会議以外の、いわば付録のごときことがらがそれぞれ有って、ことの有効性を増巾してくれた。

ブロック会議の内容はもちろん総会議案に直接反映するが、付録の方も時間がかなり多いうえ、ぼくらの行動空間も大きくひろがるので、面白かったし勉強になった。

こんな話を萩坂編集長にしたら、それを書けと注文されるハメになった。相手があって話すのは気楽だが、書くとなるとそうはいかない。しかし、ぼくらのために貴重な時間を割いて、付録部分の充実をはかってくれた各ブロック劇団の諸君への、ささやかなお礼も兼ねるつもりで書くとしよう。

劇団さっぽろの大きな役割

札幌へははじめ五月三一日着到の予定だった。それが一日早まったのは、学校上演の舞台を観てほしいと劇団さっぽろのもとめがあったためで、三〇日午後二時こばやしさんとぼくは羽田を発った。

前夜岐阜からの電話のこばやしさんは、体調よろしからずという声にいつものハリがないようで心配したが、落合ってみると案外元気で、煙草が心臓に負担をかけるので昨日来禁煙したら調子がいいと言い、それから一週間ほんとうに一本も吸わないで、意志薄弱なぼくを恐悦たらしめた。

羽田は低気圧圏内に入りつつあったが、北海道はさわやかな晴れ。劇団さっぽろの飯田、篠原両氏の出迎え、そこから車で支笏湖へ案内してもらう。蒼く澄んだカルデラ湖に、煙をなびかせた樽前山など火山脈が、投影する風景は雄大かつ華麗だ。あちこち旅する機会は多いが、およそ観光とは縁がないので、こういうもてなしはありがたい。もてなしと言えば、何回か北海道へ来ながら一度も馬鈴薯を食べたことがないと話したら、さっそくその夜札幌の酒亭で山ほどふかして出してくれた。ホクホクの熱い薯にバターをぬって、心ゆくまで食べた。

翌日朝からの学校上演は、しかたしん作「はやてに走れアマンジャク」で、全校生徒が百人ほどの小学校。最初に斎藤隆介のお話が一つあって、芝居に入る。

どうも、子どもたちを十分舞台にひきこめない感じで、もどかしい。脚本もよわい、主人公の少女役が新人で固い、ミザンスにも無理がある。客席へ舞台をひろげてもっと大き

な世界をつくったらどうか。衣裳、メークアップをもっと美しく。お話がおまけになってしまっている、独立した作品にしたい。終演後の話合いで、いろいろ意見をのべた。北海道の演劇分野で専門のつくり手として、また運動の先達として、劇団さっぽろがになっている役割の大きさは、ぼくらの想像をこえている。それだけに、舞台の質にかんしてはプロフェッショナルな苛責ない追求研磨が欠いてはならない条件になるだろう。

午後、札幌の二つの新しい施設をみせてもらう。中島公園の中にある人形劇場こぐま座と、教育文化会館小ホール。

子どもたちへの市長のプレゼントといわれるこぐま座のことは、川崎の人形劇団ひとみ座の須田氏から話にきき興味があったのだが、実際に見、加藤館長の話を伺って感心した。安全で環境のいい公園内に建設したこと、自らひよっこという人形劇団を主宰する加藤氏を館長にすえていること、利用料は入場料の一〇%、稽古利用は無料、夜間一〇時まで使わせ、それより遅くなる時は利用者が鍵と管理責任をあずかる等々、おもわずホントですかと訊きかえす話だった。舞台条件などに若干不足不備はあるが、昨年七月こけら落しに招かれた担当課長が見物の子どもが暑がっていると早速クーラーを取付けてくれた、というような姿勢が行政にあり、人形劇にうちこむ館長がいる以上、おいおい改善されることだろう。折柄舞台では、何人かのお母さんたちが手づくりらしい人形を操って、たのしげに稽古をすすめていた。

教育文化会館の小ホールへ楽屋口から入ったぼくらは、客席よりステージを先に見ることになったわけだが、その広さはおよそ小ホールなどというものではない。間口六間×奥行五間半の舞台が、シモ手にもう一つ、カミ手にもう半分。定員三六〇の客席より二まわり位ステージの方が広い。舞台機構、照明、音響等の装置は完璧をとおりこしてゼイタクにさえみえる。こばやしさんとぼくは何回顔を見合せて、羨望のため息をついたことか。この会館にはひきつづき、千人前後の中ホールも増設されるという。

但し、ここの利用料は高い。一〇〇〇円の入場料で観客一人あたりの純会場費が二八〇円、設備利用料を含めると五〇〇円をこえる。仕込にかけられるのはギリギリ一八万、これでは仕方がないから入場料を一五〇〇円にすると、とたんに利用料が三〇割増になる。ぼくらの隘路は、なかなかひらけない。

翌六月一日。小樽をへて岩内から積丹へ、小劇場会場下見の飯田、篠原に同行。

車の中で、石上慎氏の改稿「ある遅い出発」を読む。初演の本よりキメもこまかく脈絡もついているが、逆に角のとれた冗漫さを感じる。批判をうけいれての改稿の難しさをこばやしさんと話合う。

岩内で劇団波の村中氏とあい、会場の立派な体育館をみてから、町立郷土館に案内して

もらう。東山遺跡の出土品、鰊漁全盛期の漁具、生活具、アイヌの生活資料等とともに、画家木田金次郎の気魄にみちた数点の遺作があり、三年前のフェスティバルで観た「波濤」の舞台をおもいおこした。

ここから七キロばかりの雷電海岸（北海らしい雄渾な海景）へドライブのあと、今日交通が解禁したばかりという山ごえのコースで積丹にむかう。熊が出るという山は深く、頂上とおぼしい路肩には三〇センチほどの根雪が残っている。美国の中学校、余別の町役場のホール、（どこも小劇場の会場には恰好）をめぐって帰途につく。とにかく広い。その広大なここかしこで劇団さっぽろは待たれている。そんな実感だ。

札幌に戻ると、前の日も寄ったひさごという店へ入る。これこそ本場の札幌ラーメンと、にわか道産子の飯田氏が力むだけあって美味い。分量もこっちの二人前はある。

この夜、ぼくらの宿でブロック会議。さっぽろ、新劇場のなつかしい顔ぶれ十数人の参加で。

翌二日早朝、札幌発。ひるすぎ函館から連絡船で青森へ。車中船中、こばやしさんと話しあった印象的なことども。今がキラキラしい活動期でないのは、北海道も同様。創立メンバーと新人の組合せで、中堅が乏しい。創作劇を中心に地域で着実にすすめている活動に、健康さと展望が感じられる。北海道演劇集団（道演集）の学習—研究に重点をおく活動は、教訓的。とくにブロック活動の充実に学ぶところが多い。劇団さっぽろの役割の重要さ、特に創造めんで信頼にこたえることの。津軽海峡に、こまかい雨が降っていた。

奥羽—じょっぱりと層の厚み

午後四時すぎ、青森着。劇団支木の高木氏の出迎えうけ、同氏宅で小憩。

支木では目下建設中のビルの四階を稽古場に取得すべく、資金調達に奮斗中とか、ブロック会議会場の事務所へ行く途中、繁華な街なかのそのビルを見て通る。劇団さっぽろも天井の高い良い稽古場を建てたし、このあと訪れた仙台小劇場も使いよさそうな稽古場を確保しており、稽古場建設は花ざかりの観あり。

奥羽ブロック会議は、弘演から秋本さん他二人と雪国を退団された川村氏を迎え、支木のなかまが溢れるばかり加わって十余人でひらかれた。弘前勢は春、雪国と共に民話劇二本でやった小劇場の成功、秋の三好十郎の「浮標」への構えで活気があり、支木も稽古場づくりと青森市民小劇場建設と二つの課題を背負って、気魄がある。

その中で、教師として教育の仕事を割いてやる価値が、現在の雪国からは見出せなくなった、演劇とのかかわりようを本気で考える必要がある。という意味の川村氏の発言は、その誠実な演劇歴を知るぼくらには重くひびいた。

会議終了後、場をかえて懇親会となったが、そこへ「島」の高校巡演で、これから北海道へ渡るという新人会の八田満穂氏もみえたりして、座は賑わった。

翌三日、藤原氏の車でむつ市を訪れるというハプニングを生んだのは、アルコールに援けられたその賑わいにもよるもので、ぼくは支木が「ロンググッドバイ」などでなく、「吹雪のうた」の路線をさらに発展させるべきであり、創作劇にアタックしなければいかんと力説したあげく、最近岩波新書ででた中村亮嗣氏の「ぼくの町に原子力船がきた」を劇化せよ、とアジったのだが、実は支木でも内部から同様の提案がある、よし、それじゃとにかく現地へ行ってみようというわけで、

下北半島五〇キロの旅になった次第だ。

快晴の陸奥湾は美しく、やがて行手に釜伏山がみえる。むつ市役所の記者室できいて、松島歯科医院に技工士である中村氏を訪ねた。気さくな、しかしジョッパリらしい風貌のひとだ。近くの公民館へつれて行って、テレビで放映された「原子力船を追い出した男」のビデオを見せてくれる。藤原氏をおしだして、この人たちの劇団があなたの本を芝居にしたがっていますので、と言ったらホウーホウと人なつこそうな目を細めた。藤原氏は半分嬉しそうな半分困ったような顔つきだった。帰りみち、繋留されたむつ号をみた。原子力船は落魄した貴族の娘のようで、いささか哀れにみえる。

むつ誘致大賛成の議員が、拡大する漁民の反対運動と政府の無方針の中で翻弄される、それを喜劇で書いたらいい、とこばやしさんは言い、ぼくは中村氏に協力する青年とはじめ賛成派だった漁民の娘の恋物語にして、恋人たちが父親を反対派にひっぱりこんでメデタシというのを主張した。

さてこのあと、ぼくらは二手にわかれ、こばやしさんは弘前で弘演その他の人々との交流に、ぼくは八戸へ劇団東風を訪ねた。

東風は六才の誕生日を迎えたところ。弘演の作間氏が口癖にしていた東リ演加盟を最近実現し、七月中旬には恒例の奥羽Bゼミの八戸開催をホストする。駅には柾谷氏が迎えてくれ、いったん同氏宅へお邪魔してから稽古場へ案内してもらう。

二日後に上演する「奈落の家」の総稽古で、どらまぐるーぷ川の「南部牛追唄―篇」とともに、地元作家と地元劇団によるジョイント公演と銘うち、八戸公民館ホールの完成と八戸市民劇場一五周年として、同劇場（労演）の特別観劇会になっている。

東風の稽古場は相当のもので、雨が降ると演出席は傘をささなければならぬという、冬の長い地方だし大変だろうが、若い集団らしくカラカラ笑って屈託がない。それに稽古がはじまったら、昭和初年の貧農の生活を描いた芝居の雰囲気が、この崩壊寸前の建物とひどくマッチしてみえた。あとでみることになるホールでよりも、この稽古場の方が役者の創造をたすけたろうと思った。

稽古は熱がこもっていて、たのしかった。演出は、以前青年劇場にいた新堂耕二氏。いわゆる流れよりも、句読点を大切にしている感じ。少々古めかしく固いが、こういう折目正しさは好もしい。脇の人々がもう少し動けるようになると……と慾がでる。

作者の下斗米謹一氏は、ぼくより一まわりほどの年長だが、劇中使われるえんぶり―豊年祭―の唄を今日録音しなおしてきたとか、若い後輩への肩入れた力がこもっている。下斗米氏とか小寺隆留氏、そしてきしだみつお氏とか川村勝氏、こうした人々の協力を得られるところに奥羽ブロックの強味がある。

近くの茶館で、そんな話を夜ふけるまでか

わし、七月のBゼミでの再会を約し宿に入る。

四日朝、八戸市民劇場へたち寄る。「演劇会議」の活動通信欄に、地域の演劇状況をレポートしてくれる唯一の市民劇場だし、地域劇団との有機的な関係でも、青森、弘前とともに濃くつよい。ひとこと謝意をのべる。

そのあと、柾谷氏の紹介で市公会堂と公民館の両ホールを見せてもらう。公会堂の方は札幌教育文化会館小ホールと同規模のステージで、必要に応じて客席の二階部分をシャットすると一〇〇〇人程の中ホールになる。新機軸だが、音響などにマイナスは生じないものだろうか。

新機軸といえば公民館ホールはもっと徹底していて、六角型の三辺が客席、他の三辺が舞台を中心とした小劇場のつくりなのだが、これも必要によって一階の客席を収納庫におさめ、舞台の迫りを沈下させて円型劇場化できる、客席上部にもライトが吊れるといったしくみになっている。何でも日本で二番目の試みだそうだが、芝居によっては面白く生きることだろう。

あれは何年前か、弘演の「西津軽郡車力村」を観たのがこの八戸で、体育館のどうしょうもなくだだっ広く寒い中で、こんな処で芝居をやらせる文化政策の貧困を呪ったものだが、いれものに関していえばこんな具合に建ってしまうんだなあ、といった感慨を近代的な会館の前でぼくはもった。

ところで、青森での書き忘れをひとつ、仙台行の車中で補足しておこう。

青森市民小劇場建設促進運という組織が昨年一一月にうまれた。目的は「本市の地域文化活動を一層活発ならしめるため、練習場、小ホール等のある青森市民小劇場（仮称）の早期建設をうながすことにある」のだが、特徴的なのは市へ建ててくださいという陳情だけではなく、これを市民運動化し資金カンパをあつめ（目標＝四億円）その力で―という点である。今年五月一日の会員団体は、演劇、合唱、器楽、三曲、洋舞、日舞、郷土芸能その他あわせて一〇五団体。市側もこれに動かされ、平和公園そばに建設用地を確保したという。劇団支木も演劇部会長に藤原氏、市民組織委員長に高木氏をおくってがんばっているが、なりゆきが注目される。

泰然たり山形の風貌

仙台での東北ブロック会議は、その四日の夜仙台小劇場のぼくらには初めての稽古場で、劇団山形の松井、渋谷氏、劇団ふくしまの嘉藤氏と仙台小の二〇人ちかい参加でおこなわれた。

ふくしまの困難な状況は、昨年のゼミ以来好転していない。中堅どころのメンバーが結婚その他で集団をはなれ、散発的な協力者も定着せず手も足も出ない、いささか絶望的な報告だった。

仙台小は一定の活動をすすめてそれなりの成果をあげながら、集団の団結上のヒビ割れが表面化し、その苦悩が重くのしかかってせっかくの若い力を発揮しきれていない、これも胸のいたむ報告である。

ひとり意気さかんなのは山形で、昨秋「北方の記録」で一二〇〇余の観客をあつめ、現在「かげの砦」にとりくみ中。相沢嘉久治氏に新しい創作を依頼する等、報告に展望が感じられる。少々のことではガタガタしない逞ましさと、抜けてるともみえるヌーボーさに笑いを誘われながら、妙に教訓的だった。理屈っぽくいえば、集団と個々、リーダーと集団員のいわず語らずの信頼関係が、成立しているということだろうか。

こばやしさんとぼくの今回の巡歴には、焦点として仙台小劇場があった。この劇団は

（そんな言い方を許してもらえば）東北のプリンス的存在であり、東リ演の秘蔵っ子でもあったので、そのトラブルは遺憾というしかない。ぼくらは、火中の栗を拾うつもりだった。

ただ、そのいきさつについては、この付録的文章の権限をこえるおそれがあるので、触れない。おそらく仙台小じしんが、にがいたたかいの、しかし勝利の経過として必要な報告をおこなうだろう。ぼくらは誤ることなくすすみたいとおもいながら、それでも往々誤まる。誤まるのは、そう怖ろしいことではないが、誤まりをジャスティファイしたくなるのは怖ろしい。正当化された誤りは、挿木のように根づいて育つからだ。

五日午後、早川氏宅へ集まった劇団員の誰かれを思い浮かべ、雨降って地固まる、そんな祈るような期待を話し合いながら、上野への車中にぼくらはいた。

追補—新潟と栃木で

戻って間もない六月一六、一七日、社会教育関係の研究集会があって、新潟へ行った。ぼくの参加した青少年問題の分科会では、非行防止には教育勅語の復活が必要などとほざくお爺さんもいたが、誠実な実践に裏づけられた発言も各地から出され、ぼくは最近こういう場でアピールしつづけている自主的な文化活動の尊重、サークルづくりの条件整備について一席ぶった。文化だの芝居だの他に喋る人がいないから異色という感じで、夜の懇親会では多勢さんから名刺をもらった。

一七日午後おわってから、新潟演観協（労演）の雑賀氏を訪ね、地域の劇団を紹介してほしいと頼んだ。青いバラという、女性が主宰する若者のグループがあり、「ベルばら」なんかを楽しそうにやっているが、東リ演とはどうも……みたいな話のすえ、民医連系の病院のレントゲン技師で劇団をつくりたがっている青年がいるが逢いますか、勿論逢いたいですというわけで、雑賀氏に連れていっていただく。

山下真樹氏は東京の劇団の養成所で二年学んだとかで、二五才。青いバラにも誘われたが、自分としては芝居をもっとチャンとやりたい、つまり、ここ新潟に腰をすえいい舞台を創って市民に支持されるように……そこで、かれの勤務終了をまって、それから五時間ばかりぼくの方の発車時刻ギリギリまで話合う。東リ演の状況、かつての新潟麦の会のこと、ぼくのやっている演劇教室のこと、かれの希望と芝居以外の活動との諸問題。そして、これからの協力について。

花ざかりの東京からUターンしたかれが、ここで開拓者として種まきをはじめたら、ぼくは新潟行のチャスを与えてくれた川崎の教育委員会に感謝しなければならない。

新潟から栃木へまわって、劇研さっぱの「グッドラック」高校上演をみたのは一八日の朝だった。夜行の車中一睡もできず、かなり疲れていたけれどその疲労を一時凍結するほどの舞台は力をもっていた。ぼくにとっては二年前の「アリババと四〇人の盗賊」以来の出あいで、あのときは打撃的なことにならぬよう言葉を選んでものを言ったのだが、今度はそんな配慮が不要だった。おとなの仕事らしいたのもしさが響いてきた。

演出の鈴木解子さんからのいささか心細い便りが気がかりで寄ったのだが、それはもう一つ伸びる季節につきものの情緒不安定といっていいだろう。ぼくは今夜は帰れないと家へ電話して、打上げ会に腰をすえた。

紙数は尽きた。ひきつづいて総会議案を書かねばならないが、たぶん今年も温色調過多で批判をうけそうな、そんな予感がする。

〝大阪春の演劇まつり〟を終えて

対談　熊本一（劇団大阪）
林田時夫（劇団きづがわ）
司会仲武司

非職業劇団の集りである「大阪自立劇団連絡会議」が、五月十三日から六月四日の間の延十日間、「大阪春の演劇まつり」を競合公演の形態で、青少年会館小ホール（収容約二〇〇名）で催した。

参加九劇団。上演作品八編。うち一作品は京都自立演劇協議会合同による賛助出演であった。

東・西リ演を通じてこの数年、停滞ムードのただよう中で、一昨年は合同公演「ばんどり騒乱記」で見事なアンサンブルをつくり、三千数百名の観客を集め、なお収容し切れずお帰りを願ったという歴史をもつ大阪自演協の、「まつり」と銘うっての今回の催しを機に熊本一君（劇団大阪）・林田時夫君（劇団きづがわ）に対談してもらった。

—今回の「演劇まつり」の企画の意味は—

熊本　一昨年、西リ演の総会でも報告されたが「ばんどり騒乱記」での成功が大きなバネになった。もちろん動員も素晴しかったが、九劇団があつまって、互に劇団の垣根を越えた結集とその創造成果が、各劇団のその後の活動にハズミをつけたこと。

合同公演という形態が、従来、便宜的な発想や、単なる顔見せ興行的なものに落ち入りがちななかで、作品の上演意義に結集したという演劇の本来的な運動性が、公演の成功だけでなく、参加団体の演劇への姿勢に還元されたということであろう。——

大口をたたく様で恐縮ですが、各劇団は日常それぞれの活動をつづけているわけですが、やはり個の単位は小さい。だから時にはその個の力を結集して、自演協単位で、大阪の演劇状況を少しでも突き破れないか。

今回、「まつり」という形をとったのは、④ひろがりをもたせたい。行政機関（大阪青少年活動振興協会）との共催によりその一面を図った。⑤各集団のパライエティ（特色）を出したい。⑥創作劇への期待—これらが企画の基調になっている。特に、観客とのつながりについて考えれば、現在の大阪での劇団と観客との関係は新劇団協議会を中心とした、観客のタライまわしともいえる。一方労演はいわゆる新劇ファンづくりからはあまりでない。

私たちは「ばんどり」のあと（劇団きづがわ）にみられる地域公演での下駄ばきの観客運動。あるいは（劇団息吹）の試みた芝居小屋的公演形式をはじめ（劇団大阪）（わだら）（未来）など稽古場公演を含めて、いろいろなやり方で、いわば観客の底上げを願ってきた。これは、職業劇団やいわゆる新劇団といわれる諸劇団だけでは果せないことだと思う。

「まつり」への参加ということはこうした集約とも考えている。

—今回の観客数とまたその特色は—

林田　五ステージで千八百名です。特色といえば（ぐるうぷ麝夢）「名人伝」矢代静一作、菅縄小波演出。（どんちょうの会）「社会部記者」松本守正作・袋井龍成演出の二本立ての上演は沸いたね。劇団員の職場の人たちが客席の左側半分に陣取っていて、幕のあく前から期待するざわめきが感じられ、舞台でも何をしても喜ぶ。演劇以前といういい方もなりたつかも知れないが、劇団の体質そのものがそうしたなりたち方をしている。親近感がある。

熊本　根本的には、劇団が一人一人の観客をさそい、よく知っている。その反応がまた舞台へはねかえり、創造の密度をうめる、ということを改めて感じた。これは（劇団大阪）でも、劇団員と直結する個人の観客の反応のあり方の経験でもある。

「西リ演」の地域にねざす、つて問題の原点ではないのか。

稽古場公演の時、新人群と旧人（？）群とで一本づつ上演したが、新人が生々していた。観客とのかかわりで、舞台的な交流発見があった。

—それを創造問題としてどうつかむか—

熊本　新人は、稽古である意味では無から出発し、戯曲の中で発見し、その活力が生き生きしたものになり、その土台がさらに新しい発見をうながす。古い連中は、演じ方のコツの様なものをすでに自分の中に経験的に構築しており、その範囲でつくってしまう。だから反応がないと、あせり、しぼむ。それを演技の上の壁の様に思ってしまうが、新しい発見の土壌の問題だ。

—おち入りがちなことだが、それは新人、旧人の問題ではなく、むしろ演技論の問題だろうが——

熊本　演技を見せる、という発想と、作品の中身、課題をどう伝えるか、という関係の問題です。熱っぽく、それをどこまでやれるか。

—熱演と誤解されそうだが、いわゆる超課題への全員の追り方、姿勢への執拗なまでのアプローチ——

林田　そのことが観客へ切符を売る行為と運動している。一時「一生懸命の券」について、それが演劇に観客をあつめるきめ手になるのか、という問題が出されたことがあったが、私たちの中には、その懸命の切符は生きている。劇団の定期的な地域公演が定着する中で、観客は舞台の成長を感じてくれている様な意見をきくと、やはりそこに確信がもてる。

—我々の演劇の停滞が云々されると、あれこれの市広論がいわれ、様式や技術の模倣が先行しがちな中で、今回諸作品にふれて考えたい。（演劇集団わだち）（劇団十年実）の合同「拝啓村長さま」瀬戸洋作、又川邦義演出や（大阪府職演劇研）「選挙カー」北直樹作、田坪丈一演出など、少々の未消化や幼さは残るにしても、今日の社会状況に物おじしないで真正面に取りくんでいるが、非常に新鮮だった。その上で——

林田　「村長さま」では、最近の風潮である村へのUターン娘が、保守そのものの村の改革をめざし、「選挙カー」では、地方都市の選挙をめぐる人間模様と、いわば状況を切りひらくという視点をそらさない創作です。ただどこか保守対革新というパターン。（本

質的にはそうだが）その構図では今日を単純にとらえきれないのではないか。あるいは、若いから革新、という人物のすえ方にやはり不満が残る。

熊本　「村長さま」はUターン娘のモデルがあり、現地調査など、劇団員が肌でその世界にふれている新鮮さ、誠実さが伝わってくる。「選挙カー」では、どこか頭でおさめてしまう。

—風俗性と変革への願望。かつての職場演劇によくあった劇作のにおいがあり、そこをつきぬけるリアリズムの問題でもあろうか——だが、やはり新鮮におもえるのは今日、あまりにそうした問題意識の希薄さが、あるいは、さけて通ろうとしている潜在意識を鋭く突くためか——

林田　（劇団大阪）「巡礼殺人事件」杉本浩平作・堀江ひろゆき演出。も創作だが、舞台的テクニックと、遊びをまず感じた。

—巡礼が殺された事件を追う刑事が狂言廻しになり、ミュジカルあり、講談ありのあの手この手の盛りたくさんで、観客を退屈させずに、かつての兵役拒否者の逃亡の軌道を通じ今日もなお温存される権力の黒い手をあかしていく——

熊本　いいたいが、いえぬ状況へのせまり方の一つの方法だと思う。舞台からのお説経では行動にならない。観客に楽しんでもらいながら権力の構造にふれていく、そうした伝達ではないか。

—つか、こうへい、をまず感じたが、テーマは明らかに、状況の根っこを突くことの意識はわかるが——

熊本　劇団では初めての様式だから、照れもあり、また肉体的な訓練も不充分だ。

その上で、こうした作品が、劇団の体質に合うのか。観客に何かをとどける必死さと、それがとどけられたときの感動。あるいは新人たちの中にある新鮮な発見をどう劇団的な質に定着させるか。観客の要求の多様さ。こうしたものの混然となったものが、この作品への試みになっていると思う。

林田　あの上演の限りではわからない。だから、あの作品を通じて、どこまで本当にそれが果せるか、もう一度取組みなおし、洗いなおすべきだ。

熊本　本当だ！　いいことを聞かせてくれた。

このあと（劇団きづがわ）「愛」三部作、勝山俊介作、赤松比洋子演出、と（劇団息吹）「天満のとらやん」かたおか・しろう作が一応の話題にはなった。

「とらやん」は、息吹が次期公演「手」という大作を間近かにひかえての参加という割引きした観方をするにせよ、あまりに手なれた、おざなりな舞台に、少々不快。かつての素晴しい「とらやん」を知っているだけに。

「愛」三部作は、さすが（きづがわ）はいい観客にかこまれている、というのが実感。勝山作品三本は少々重苦しいにかかわらず、嫁にやった娘のそぶりを観る様な、観客のまなざしがうらやましい。

各作品にふれながら、両君の思いを語ってもらったが、その上で「まつり」は成立しえたのか——

熊本　「まつり」にはなりきれなかった。（わだち、十年実）の「村長さま」への集団のとりくみ。前売切符八〇〇枚にあらわれている様に、バスで現地（飛騨）へ行くほどの

熱っぽさや、（磨夢・どんちょうの会）の職場の観客動員など、「まつり」への盛りあげに果したものが、まだ全体的なものにはなりきれなかった。

―どこに問題があるのだろう―

林田　職場では切符が売れない。労務が目をひからせ圧力をかけてくる。必然的に地域化していく。

熊本　だが、やはりまづ職場だ。そして問題は、演劇の「まつり」性という発想にあるのではないか。観客と創造集団が互に楽しみ、伝達しあう。こうした関係の復活を、どこまで真剣にさぐるかにあると思う。

だから、個々の劇団の日常活動が、さらに結集して全大阪的な「まつり」になり、話題になる様な企画、スケールの考えてみたい。やれる可能性は全部試みていく。地域にねざすということは、そうした「まつり」の新しい発見をぬきには考えられないのでは。

――「まつり」ということでは、今年の西リ演「広島ゼミ」でも（月曜会）が、その意味を強く打ち出していた。――業余のみなさんから見た、特に商業ベースにひきこまれがちな職業劇団への問題について――

熊本　もちろん私たちのこうした思いは、今日の状況の厚い壁にはばまれていることはわかる。アンケートを読み、観客の分析もやるが、動員にむすびつかないもどかしさもある。三百名の観客は定着してもあとの千数百の人へは、やはり一生懸命の切符だ。だから、やはり「ねじこむ」様な目的意識的な企画、行動が必要です。そして創造内容が観客の背に重くのしかかるのではない、「開いたもの」「まつり的」なものとして残らないと。

不思議に思うことは、職業劇団は本来、その「まつり」的なものを日常化してこそなりたつはづなのに、私たちに対して「職場があるから切符が売れる」という発言を聞く。錯誤も甚だしい。

林田　関西芸術座でいえば、かつて「ひとりっ子」や「小麦色の仲間」で、大阪の方々で地域公演がもたれた。今、私たちはそれをやっている。ところが今は？

熊本　西リ演「大阪ブロック」などで、もう一度、大阪の観客について共同研究していく様な姿勢がないと。

両君の、職業劇団へのきびしい指摘でこの対談は終る。

「まつり」が出発点という、その復活への情熱が肌に伝わる。もちろん、個々の劇団がかかえている問題は多い。おそらくは、その問題点の現れ方に多少の相異はあっても、多くの集団と共通する質であろう。

最近、試行錯誤といういい方に、逃げを感じ、それ自体が目的化している時、この対談の底を流れる、観客との接点の場を、正視しつづける姿勢が、今、なによりも大事な時代に来ていることを改めて感じた。

（仲　武司）

関西における戦前プロレタリア演劇の研究〈二三〉

大岡欽治

大阪地方のプロレタリア演劇
日本プロレタリア演劇同盟
（プロット）大阪支部の活動

一九三二（昭和七年）㈥

プロットの教育活動

時局の急変による社会情勢と、コップ＝プロットの新活動方針に対処するためには、教育活動の強化が必要だった。その活動の状況を、戦旗座の教育部ニュースによって紹介しよう。このように各劇団でも、支部においても教育部が設置され、それぞれ独自に、或は合同で運動を展開したのも、この時点での一つの特徴であった。

戦旗座・教育部ニュース　No.・2

一九三二・三・五発行

『

教育部方針

我々はこれ迄教育活動の強化を力説しつつも日常活動に解消されてしまい、又之に対する積極性の欠如から実践的には僅かしか解決をも見る事が出来なかった。

戦旗座ニュースに教育部の教育活動の分類が発表され諸君の検討をうながしているが、我々は「何を」「何のために」「如何なる方法」で研究し発展させて行かなければならないか。我々の最も立ち遅れている点はどこかについては未だ充分に問題にされていない。

今、それ等を吟味して我々の研究の対象を充分理解する事が急務ではなかろうか。（勿論之等が唯物弁証法的に解決されて行って初めて全的なものになって行く事は言うまでもないが）要約して箇条書にすれば（註、解説は略す）

一、階級社会の現段階の正しき認識
二、反動文化の特質機能の正しき認識
三、プロレタリア文化運動の統一的知識の把握
四、技術の獲得―演劇の唯物弁証法的創作方法

以上四項目に上げられた事柄が統一的に行われて始めて演劇運動の全的強化がなされ、我々に課せられた任務が遂行出来るのだ。

今後、研究会其の他も、この根本的方向の線にそっておし進めて行くだろうし、諸君の研究対象も以上の事を土台としておし進めて行かなければならない。

（一九三二・三・三）

二月の成果

〈教育部〉

二・五　演劇運動の国際的革命競争に関する檄（プロット常・中・委）担当　九木

二・二〇　其後の組織上の諸問題（村山知義）＝プロット二月号　担当　大山

二・二二　ファシズムの抬頭と文化反動との斗争（寺島一夫）＝プロ文化二月号　担当　久保

〈戦旗座〉

二・一五　IATBデー記念座談会（公開）（戦旗五、構成六、一般六）

二・二五　戦旗座公演批判会（公開）（戦旗六　構成／一般／）

〈支部教育部〉

二・一一　建国祭を中心に　担当　吉田

二・二一　失業反対斗争デー、国際共産婦人デー　担当　九木、吉田

三月の研究会（予定）

一日　ファシズムの抬頭と文化反動との斗争（寺島一夫）＝プロ文化二月号

三日　『装甲列車』批判会（戦旗座・構成劇場）

四日　舞台照明研究会　担当　大山

六日　三月カンパニヤの意義について　担当　大岡

十日　演技研究会　担当　吉岡

十九日　演劇サークルと自立劇団の問題（「プロット」三月号）

廿二日　トラム運動の創造的発展＝ボドリスキイ（「プロット」三月号）

廿六日　日本資本主義の根本的矛盾の発展＝寺島一夫（「プロレタリア科学」三月号）

『

劇団経済の窮乏

だが一方において、劇団の経済的困難は更に進行する。プロットの劇団にしても、東京の劇団はとにかく、地方の劇団は専門劇団といっても、演劇活動によって生活を維持することが困難なことは、年間公演日数が十日前後であることを考えるならば、さらに、その公演の全部が赤字決算であることを考慮すれば想像を絶するであろう。戦旗座の場合でも、二月IATBデー公演の欠損は二百五十円に達している。そこで大衆に訴えるアピールが出される。以下は「演劇新聞」第十三号（一九三二年三月二十日発行）に掲載された一文である。

『

大阪戦旗座

壱千圓基金募集

おれ達の劇団はいつも借金で苦しんでいるが、大阪戦旗座も今繰返し〳〵の借金で二進も三進も行かない有様だ。

戦旗座は大阪地方に於ける無くてはならない重要な劇団であることは、諸君も知っていることと思う。

その重要性に置いても、今後益々活動しなければならないが、今の調子では動きもとれない。戦旗座はここに、一千圓基金募集を始めている。

全国の労働者、農民、勤労大衆諸君！

一銭二銭の基金の雨を降らしてくれ。

基金送り先は

大阪市北区中野町三ノ九三　戦旗座内

大阪戦旗座負債整理実行委員会

』

構成劇場「関西新興劇団競演会」に出演

前号で書いたように、構成劇場は、いよいよプロットに加盟、大阪地方支部の所属劇団となって、プロットの方針の下に活動を行うことになったのだが、プロットに参加する前

は、「関西新興劇団」の組織に入っていたので、それへの活動に加わることは出来なくなるのだが、プロット加盟前に決定していた宝塚図書館主催による「関西新興劇団、朗読競演会」には特に出演することが許された。

参加したのは三グループであり、朗読形式でもあり、場所も宝塚遊園地内の図書館の楼上の小劇場でもあったりしたので、問題なく許可することになった。

この時の記録は、次の一文がある。

『

関西新興劇団競演会

一九三二年三月十九日　宝塚図書館講堂

宝塚図書館主催で朗読会が催されたが、それに七月座、構成劇場、関西学院劇研究会が出演した。

「自由の重荷」トリスタン・ベルナアル作　七月座　出演

「金」マイケル・ゴールド作　関西学院劇研究会出演

「西部戦線異常なし」　レマルク原作　構成劇場　出演

講演　「ユウジン・オニイルの新戯曲について」　関西学院教授　志賀　勝

丁度「金」の朗読中から雷鳴が起って、この自然の効果のため、関学劇研究会の困ったのに反して、構成劇場「西部戦線」は意外の効果を上げた。

』

『関西学院劇研究会十年史』（昭和十年一月刊）

構成劇場　プロット加盟第一回公演

構成劇場は、プロット加盟以前は、主として大公演中心主義の新劇団であったが、プロットに加盟してからは、地域的公演を重視する方向をとり、演目も大衆的に親しめるもの（プロット系作家による戯曲）を上演する方向をとることになった。

そのプロット加盟第一回公演として、大阪港の中心労働者街鶴町にある映画館「港館」において、三好十郎のプロレタリア戯曲作家として第一歩を示した『戦旗』連載（新築地劇団初演）の「犬だらけのお秋」と小形式戯曲二本というプログラムで活動を開始した。

『

日本プロレタリア演劇同盟加盟

大阪　構成劇場　一九三二年度　第二回公演

三月廿六日夜七時・廿七日昼一時・夜七時

於港館（港区鶴町車庫前）

「フアッシヨ人形」　久保栄作　狭山　健一

「唸れ・ロボット」　三好十郎作　石田　数一

ツク太　宮川　章子

次郎（その弟）　新田　育男

大森（総連盟幹部）　狭山　健一

石黒（弁護士）　佐久間　憲

職長　浅香　龍

新聞記者　大地　正夫

職工　A　山上　三吉

同　B　桜谷　国一

園田　田淵　実

雨宮　森本　久

金井　多田　俊平

犬目　芝　迪子

おロク（職長の妾）

其他　職工多数

「万才　団結踊り」

多田俊平、甲府次郎、山本芳郎

「症だらけのお秋」　三好十郎作

お秋　近藤　泰子

患一（弟）　浅香　龍

秦（仲仕）　新田　育男
沢子　宮川　章子
女将　石井波津子
杉山　山上　三吉
阪井（仲仕）　田淵　貢
山崎（仲仕）　狭山　健一
仲士　一　森本　久
仲士　二　佐久間　憲
仲士　三　甲府　次郎
仲士　四　板谷　国一
町田　多田　俊平
初子　芝　迪子

演出　渡辺　三郎
舞台監督　小島　正一
装置　吉田　太郎
照明　小林　孝一
効果　外村　晋
小道具
衣裳　構成劇場美術班

』

このプログラムの裏面には、プロット発行の「演劇新聞」プロット機関誌「プロット」四月号の内容予告が出ており、別の頁には

『

主催　日本プロレタリア演劇同盟大阪地方支部

国際プロレタリア演劇資料展覧会

期日　三月二十七、八日（二日間）
場所　日本橋　天牛書店二階
日本橋倶楽部

構成劇場演技部員募集

男優　拾名
女優　五名

簡単な履歴書を持って
天王寺区上汐町一ノ二七　構成劇場事務所まで申込んでくれ。

移動演芸団

大阪メガホン隊を利用しろ！

諸君の職場の争議の時、日常の茶話会、ピクニックに、懇談会に、あらゆる集会に、モリモリ利用しろ！　諸君の為めになる芝居、落語、漫画を持つて直ぐ出動する。
申込みはその前日までに
大阪市北区中野町三ノ九三
プロット大阪地方支部宛

』

と、プロット大阪地方支部の活動の一環であることを明確にしている。

さてこの公演に対する労働者観客の批判がプロット大阪支部組織部発行の「**俺達と芝居**」（「演劇新聞」大阪版）第三号（一九三二年三月二八日発行）に載っている。

『

構成劇場公演
「疵だらけのお秋」を見て
押本　仙太郎

構成劇場、工場地帯公演、しかも鶴町・港館ときている。俺はどのくらい入場者があるかと期待しながら入った。二階も下も満員だ。館が小さい加減もあるが、まづこれだけの入場者なら百パーセントだと思う、最後まで力の入った芝居ばかりだったが「ファッショ人形」売のセリフは処々がかへって聞きにくい点が多かった。練習不足のためであると直感された。「恐れロボット」のヅク太（石　君）は上出来だ。次郎（宮川君）もよかった。大森（新田君）のダラ幹はダラ幹らしくなかった。もっとダラ幹振りを発揮してくれ。

「疵だらけのお秋」二幕目の出入口の戸が気になってしかたなかった。普通出てくる時

は元気だが、帰ってゆく様はいかにも安心してしまって間が抜けている様だ。「疵だらけのお秋」劇全体がエロ・ナンセンスが多過ぎて、主なことがわからなくなってしまった。幕の上げ下げがいつも気になった。舞台装置が不完全すぎる。三、四人の役者は手のやりばに困っている。殊に芝迪子さん（初子）はひどい。大衆浸透の立場から、中央公会堂と町はずれの港館やと云へども変りなきより以上の熱と練習と努力を希望してやまない。

プロ演劇工場進出万才！

』

国際プロレタリア演劇資料展覧会

プロットは国際革命演劇同盟（IRTB・モルト）の日本支部であり、この年から二月十五日の国際演劇デーに参加しているので、国際的にプロレタリア・労働者演劇の状況を、日本においても資料展覧会を開催して一般に鑑賞して貰うことになり、千田是也を中心として各国演劇の資料をパネルに張り、図表を附して解説を加えて作成、プロット全国各支部の主催によって巡回展覧をすることになった。

『

国際プロレタリア演劇資料展
三月二七・二八日
午前十時より午後十時
道頓堀　天牛書店　二階
入場料　一般—十セン
労働者—五セン

』

これは、プロット大阪地方支部主催の広告である。（プロット大阪地方支部組織部発行「俺達と芝居」第二号所載）

大阪に続いて、兵庫地方支部でも、神戸三宮にあるパーリスター三階において開催された。その時のビラは次の通りである。

（註・過日松本克平と、この資料展のことを話していたら、この資料は全国を廻り、最後は北海道・東北地方を経て東京に戻ってきたが、千田資料の外国の分はそのまま無事だったが、内地各地の劇団の資料は、ほとんど刷されていた、ということだった）

『

国際プロレタリア演劇資料展覧会に
押しかけろ!!
不景気や戦争で俺達の生活は苦しくなる一方だ。これでは全く餓死するより仕方がない。だから俺達は一つにガッチリと腕を組んでブル奴を相手に闘っているのだ。

日本プロレタリア演劇同盟も今迄沢山の芝居をやって来たが、今度は一つ世界中のプロレタリア演劇運動の様子を諸君に見て貰おうと思って展覧会をやることにした。

サヴエートの、ドイツの、フランスの、アメリカの、仲間達が、どんなにブルジョアの弾圧を蹴って、俺達の芝居を守り育てて来たか。諸君は電車賃を倹約して是非一度見に来てくれ！

日本プロレタリア演劇同盟（プロット）
兵庫地方支部
神戸前線座
於　神戸三宮　パーリスター三階

』

プロレタリア演劇巡回学校

プロットの新方針を発展させるためには、更に多角的活動を展開することが要求されてきた。

そこでプロット大阪地方支部の組織部では、演劇サークル組織を確立、拡大する方法として、次のような「プロレタリア演劇巡回

学校」という案を企画して、機関紙（ガリ版）「俺達と芝居」（第二号）の紙上に発表した。

『

労働者の鉄の腕で

プロレタリア文化を建設せよ！

プロレタリア演劇巡回学校

学生募集！

プロット第三回大会以来、㈠労働者階級並に勤労者階級の多数者獲得、㈡企業内同盟員の獲得というプロットの大きな任務となっている。

それはどういうことかと云うと、日本に何百万という労働者がいるが、労働者は殺したら、働かせることが出来んから、ウエ死せんハンイで養っといて、働かせて資本家のために、金を生む動物のように取扱れている。

（中略）

「キング」や「講談クラブ」が労働者相手に何百万部も発行され、シャラクサイ、タイコモチ映画や芝居や、万才の劇場が何万もあって、反動教育の太鼓をたたいている。

こんなものにダマされている兄弟を救い、労働者の福利を目的としたプロレタリア文化教育の影響下に正しくつれてくるというのが、㈠労働者階級並に一般勤労階級の多数者獲得といっている。そして我々の立場では、工場に演劇サークルを作ることだ。

反動文化クソクラへ！　俺らは労働者の文化を、俺らの鉄の腕でやってのけようってのが、労働者クラブを作らうじゃないか、といったり、また㈡プロレタリア文化運動の企業内参加のための斗争ってやつだ。

今度俺達は、その為にプロレタリア演劇巡回学校をつくった。資本家の芝居の化の皮をヒンめくって、へでとばそうてんだ。みんな参加して成功させてくれ。二人でも三人でも申込のある所へは出張して教授する。勿論タダだ。殊に素人劇団を作らうとするもの、サークルを指導しようとするもの、広く芝居の専門的な技術を知っておこうとするもの、プロットの同盟員になって戦旗座で芝居をやって見ようというもの、そういう方には至極便利だ。友達を誘ひ合せて申込んでくれ。プロットは労働者のものだ。エンリヨせんとプロットへ這入って来て労働者文化確立のためやかましく云っとくれ！

申込所は　北区中野町三丁目九三　戦旗座事務所内支部組織部迄

△反動文化を工場からたたき出せ！　△演劇サークルをつくれ！　労働者クラブをつくれ！　△文化運動の企業内よりの参加万才！　△プロレタリア演劇巡回学校に這入れ！

』

これを読むと、プロットの活動を工場なり農村なりに演劇サークルを組織していく方法としてとらえられ、新しく活動部署としての組織部の責任によって発想されたものと思われる。

一方、大阪の場合には、この三月から宣伝煽動の専門移動劇団として大阪メガホン隊があり（前号参照）するので、実際の反響は、ほとんどなかったと想像される。私自身メガホン隊にいたのだが、その実際活動を見たことも、聞いたこともなしに終ってしまっている。

七月座の上演戯曲問題

三月に、構成劇場が、プロットに加盟して旗幟を鮮明にしたことで、大阪の新劇界は、新劇かプロレタリア演劇かの二つのジャンルに別れ、その中間が、新興演劇、或は同伴者演劇というふうに区別されることになった。

新劇団としての七月座は、豊岡佐一郎（明

治三十年、大阪生、早稲田大学英文科卒、坪内士行らの舞台協会に参加、雑誌「劇」「新興演劇」「新興舞台」「P・C」の同人。関西大学文学部講師。昭和二年より劇団「七月座」主宰、昭和十年大阪の新劇団の大同団結により結成した「大阪協同劇団」に参加、同十二年五月死去）を指導者としていたが、豊岡の立場は、早稲田系の大衆的新劇の方向にあり、時代によって、当時の影響を受けてきた。この当時は、前記の如く、大阪の新劇は変化してきたのだが、その影響は七月座にも現れ、ドイツの戯曲家エルンスト・トルレル作「解放されたウオタン」を上演しようとした。ところが、この作品は東京左翼劇場の文芸部久保栄の翻訳であった。

プロットで調べてみると、劇団は久保の承諾を得ていなかった。そこでプロットは、七月座に対して、プロットの作家の作品（この場合は翻訳であるが）の上演権の問題として提起して、上演拒否の通告を行った。勿論、七月座は狼狽して不注意を陳謝してきたので上演は許可された。

この時、プロット大阪地方支部では委員会を開き、交渉委員を決定して処理した。

このような事は、今迄は大阪においてはほとんど見られなかった事件であるが、プロットの権威が、新劇界に認められた結果であろう。

なお、七月座には、志村喬が劇団創立から参加していた。やがて東上して映画界に入っていった。

七月座　第十五回公演

一九三二年四月十六日　朝日会館

喜劇『解放されたウオタン』

エルンスト・トルレル作

久保栄訳　豊岡佐一郎演出

大阪の新劇の歴史の上で、七月座は昭和二年から七年まで続いた劇団であるが、その劇団並びに主宰者の性格は、京都のエランヴィタール小劇場と野淵昶の関係に多くの相似点があったといえよう。

ここでは、七月座の、このトルレルの作品上演の時点における劇団の意向を知る記録として、プログラムに載せられた一文と、劇団のレパートリーとしている作品名をあげて、その状況を見て頂くこととする。

『

故小山内先生の「築地小劇場」が先生の歿後あへなくも分裂瓦解して以来、お膝元の東京に於ててさえ、数々の新劇団が現れては崩れ、崩れては現われていまだに混沌として、その見透しさえもつかない有様です。

しかるに、関西においては豊岡佐一郎氏主宰のわが七月座が、社会の風浪にもまれ乍らも、孜々としてその研究をおこたらず、やうやくその輝かしい成果に向って驀進しつつあるのは、賞すべき一事ではないでせうか。

いまここにかれらの苦難の途をたどって、そのレペルトワルを検するのも、あながち無用の業ではないかと思ひます。

』

七月座　レペルトワル

金子洋文「洗濯屋と詩人」

北村寿夫「四年間」「踊る人形」「霧のホテル」ショロム・アッシュ「復讐の神」

豊岡佐一郎「猿彦の戴いた月桂冠」

岸田国士「ぶらんこ」「可児君の面会日」「留守」

クウルトリース「バタン君」

廣津和郎「生きてゆく」

ジュール・ローマン「アメデと靴磨台上の諸君」

ヴエ・アルドフ「塵芥掃除組合」
マルセル・アシヤール「ワタクシと遊んでくれませんか」
前田河廣一郎「陸のつきる処」
高田保「震災七年」
山本有三「同志の人々」
ヴイルドラック「商船テナシテイ」
ハ・ワイルド「最初の弁護依頼者」「保険」「直操」
坪内士行「ラブレター」
谷口鳩児「踏絵」
ユージン・オニール「長い帰りの船路」
ニルンスト・トラア「解放されたウオタン」
ジユウル・ロマン作　岩田豊雄訳「ル・トルアデック氏の放蕩」
出演者・北原潤、海老江寛、島民江、葉山かつ子。
宮本鉱一郎演出
〈註〉宮本鉱一郎は「無名座」の創設者であるが、現在は「宇井無秋」というペンネームで芸能研究家となっている。この年から海老江寛が新劇界に参加してくる。関西大学の学生であった。

その他の新劇団について

七月座という新劇団にふれた機会に、当時の大阪の新劇界における他の新劇団にもふれておく。

無名座

この劇団については、既に書いたときもあったが、大阪においては比較的に息の長い存在であるが、この年三月に公演を持った。

無名座　公演
三月二十四日、大阪朝日会館

新響劇団

この劇団は、関西大学千里山劇研究会を主体とする新劇団として発足する。関大の講師である豊岡佐一郎を指導者として同人組織によって結成されている。

新響劇団　第一回公演
四月二十四日　大阪・日簡ビル・ホール
金子洋文作　「洗濯屋と詩人」
谷崎潤一郎作　「腕角力」
北村喜八作　「山の喜劇」
豊岡佐一郎指揮・田中友幸演出

同人連名の内で、現在活動している人たちをあげると、田中友幸（後に大瀬滝夫というステージネームを使い、演出を行い、大阪協同劇団にも参加・現東宝社長＝あとでもふれる）吉田美奈雄（吉田三七雄、朝日放送）藤木邦夫（現劇団やわらぎ主宰）などが参加している。

これらの新劇団が動き出してきたのは、プロット系の劇団の活動が大きく刺戟を与えていたことは、これからのプロット時代からプロット解体後の新劇復興の時代へと関連してくることになるが、それは次第に描いていくことにする。

（つづく）

劇団通信

アンケート依頼の要領

①近況
②さいきんの主な公演
③十月頃までの活動予定
④わが集団の問題点
その他
（通信はほぼこれに準じて答えてある）

劇団ふくしま

①黒沢議長が東北Bに来られた時、劇団の法則性なるものを述べたけど、そういうことは先刻知っての上。「楽しくすれば結果がよくなって若者のエネルギーが燃やされる」という程、生やさしいもんじゃない現状です。萩坂さんが、いつかのお便りで「一～二年遊んでみたら」というのは、感覚的にはよくわかりました。といって遊んでるわけじゃないのですが—

昨年秋に、鈴木、佐藤、奥野（妹）高倉、結婚。今年春に、奥野（姉）結婚。中堅五人が結婚したまま結集していません。現在、嘉藤、大阪、宮本の三名。金子は休団、その他福大生が二名、研究を兼ねて来ています。素夫妻は退団しました。

「とうすけどん」という民話を、脚色することを勉強のつもりでやっています。少人数ですが、はり切っています。近々、ゼミ前には、旧団員に再結集を呼びかけ、更に新しい仲間の拡大を呼びかけようとしています。

②けい古場が思うように行かないことと、団員不足が、悩みの種。

③秋には、第10回公演を是非、と確認し合っているところです。紙芝居なども作りつつあるところ、着実な活動をし、地域に広めることを、どうするか、お互の能力を発揮しながらすすみたいと思っています。

④機関誌、今号から五部にして下さい。おねがいします。いつもすみません。（嘉藤）

（福島市笹木野末梨下十四—三嘉藤方）

関西芸術座

①創立二十周年記念行事の第一弾、「二十周年誌」一一二頁が6月中発行のはこびとなりました。特に大阪の、戦後の諸劇団の系図は貴重な資料となりそうです。8月にはピアーホールを借切ってのレセプションを予定しています。また記念事業最大の企画である新稽古場建設は第一案の設計（三階・延一五〇坪）があがり、目下工費見積り、資金計画の段階をむかえています。何しろ五〇〇〇万円近い経費なので、カンパ、融資対策におおわらわです。いづれ、みなさんにも御協力をお願いすることになりますのでよろしく。

②「記念公演第2弾」。9月28・29日。「桂春団治」渋谷天外（舘直志）脚本・道井直次演出。毎日ホール。後援・毎日新聞社。第3弾、53年2月24・25日、「自殺ごっこ」—寛容な時代No.2—清水巌作・仲武司演出・郵便貯金ホール。

「おやこ劇場」及び「小学校」は「たちあがれピノッキオくん」作、演出・道井直次—はすでに来年三月までスケジュールはほぼ決定。「高校・中学校」移動は、「奇蹟の人」ギブスン作・富田悦史演出も来年三月までほぼ決定。

（大阪市阿倍野区文の里四—一八—六）

劇団十年実

〔近況の報告〕大阪はこの春から初夏にかけて、大阪自立演劇連絡会議と大阪府青少年振興協会と共催で、「大阪春の演劇まつり」を推進してきました。この「まつり」には、われわれの文化を大阪のすみずみにまで届けた

いという願いと、新しいグループの目ざめに期待し、さらには府立青少年会館の劇場を青少年が使いやすいように（演劇発表の劇場として）改造要求もかねて実施しました。

当劇団十年実は演劇集団わだちと合同で、創作劇「拝啓村長さま」（作・瀬戸洋、演出・又川邦義）を取り組みました。現在総括の整理中です。

◇この合同公演で身につけた「力」を秋に向けて発展させるために、若手が定着できる魅力的なプランを検討中です。従って、秋は力をつけることを目標の公演にしたい考えです

（大阪市平野区喜連東三―六番32―101）

演劇集団高津

旗上公演の折、御意見御感想文本当にありがとうございました。

①先の旗上公演の総括を5回に渡って行い、ようやく終了し、現在は次回公演「俺達のちっぽけな劇場」と題して小公演（児童への民話劇）を企画中です。

②集団が生れて一年、5月14・15日の両日、「車椅子の王女とその騎士」（大橋喜一・中村おがわ作・大石栄三演出）を上演。

③9月中旬、地域での初めて試みとして、「川崎の昔ばなし」を子供対象に上演の計画中

④問題というと数え切れない程有りますが、今一番困っている事に稽古場の問題があります。集団にはついて回ることですが、此の四月、頼りの市民館が大幅な使用料のアップで今迄週3回使用していた市民館も一寸財政的にも使用出来ない状態になっています。目下新しい場所を探している最中！

（川崎市高津区下作延七六五大石栄三）

演劇サークルやぎ

前略。毎度のことながら編集活動ご苦労様です。我が『やぎ』も、去る4月24日、第一回市民劇場と銘打って、伊丹市立中央公民館（キャパ二〇〇名）で、木下順二作「陽気な地獄破り」を上演しました。

二五〇名の観客動員を行い、まずまずの成果をおさめました。現在、9月、第七回自主公演をめざし「走れ俺たちの明日へ」（井上マスオ作）に取組んでいます。

夏に向けて、日々の創造活動に汗を流しましょう。他劇団のますますのご発展をお祈り致します。敬具。〈やぎ・哲〉

（伊丹市千僧字船原20―9坂上方）

劇団尼崎ファーベル

①近況。西リ演広島ゼミナールと尼崎演劇祭がかさなってゼミナールに一人しか行けなかったことを残念に思っております。広島から帰った団員からいろいろと西リ演の現状を聞き、私達も身が引締まる思いです。〝きぬという道連れ〟の観客創造は、二〇〇名。劇団員が減ったためとはいえ、舞台創造のむづかしさと平行して組織的に未だ未だと云えます。

②最近の主な公演。秋元松代作「きぬという道連れ」

③十月頃までの活動予定。〝きぬという道連れ〟のケイ古場公演。7月11（月）・12（火）16（土）17（日）18（月）22（金）23（土）24（日）平日、六・三〇～土・日曜マチネー有り、二・〇〇。九月も予定。

④わが集団の問題点

◇系統的な組織活動の不徹底。

◇五人にもかかわらず民主主義がゆき届いていないこと。

（尼崎市杭瀬北新町3―47尾尻コーポ4F）

名古屋演劇集団

①昨年来の問題だったけい古場移転先は、名古屋市西区庄内通四―一六―三にある土地つきの鉄骨二階建て倉庫を買うことにきまりました。現在三分の一程支払が済み、残金の調達に奮闘中です。カンパ、貸付金であと、一

六〇〇万円程集めねばなりませんが、「いよいよ永久的拠点が獲得出来る―」と燃えています。三間×八間ほどで一寸狭いけれど、新品同様の建物で駐車場もあり、天井高く、ガス、水道、水洗トイレ完備です。

②三月十一、十二日、名古屋市青少年のための芸術劇場、ギブスン作・広渡常敏脚本・丸子礼二演出「奇蹟の人」はどうやら目標の三千名動員を数百人突破することが出来ました。とくに十二日（土）の昼の部は超満員の客席にあまり経験のない苦労をしました。また三月二十二、三日、名演小劇場で「明日を紡ぐ娘たち」（若尾正也演出、研究所14期卒業公演）が若々しく感動的であったと好評。九名が入団し、目下新しいエネルギーで活躍しています。

③九月二十一、二日に寺島アキ子作・若尾正也演出「かあちゃん達の明日」を上演決定、けい古に入っています。一時疲れ気味であった若尾正也ですが、この頃大変元気になりハリ切っています。「年寄りには研究所をやらせるといいのかな」とカゲの声もあります。例によって学校公演は「夕鶴」「三家福」「アンネの日記」「奇蹟の人」と秋のラッシュが待っています。けい古場のためにもかせがなくては……。

④昨年のきびしい状況から問題が明確化したためか、かなり劇団歴の古い人達七人程が退団しました。その中には中心的に活動していた人達もあり、「演集」は新しい出発点に来ていることを感じさせます。（丸子礼二）

（名古屋市東区東桜二―八―一九）

劇団新芸

6月5日小樽市公会堂で、作間謙二郎作・宮津泰子演出「犬を喰ってはならない」を第3回小公演として打上げました。途中、重要なキャストに勤務上の事で非公然でなければ参加しがたい状況が生れ、集中時間のこともあり、キャストをおろし、それまでの演出者の磯野がキャストにならざるをえないハプニングがありました。

又、制作上も、場所柄と、やめてった団員や非公然の団員がつかまえていた観客にうまくつながらず、固定客の薄い状況のまま、観客層の新旧の激しい出入りに具体的な対策に結びつかないまま公演をむかえ、2ステージで一八〇名という観客数でした。（売上集計は未だ出ていません）

創造面では総体的には伸びたと評価されます。キャスト、スタッフ共に新人や一～二年団員の力がついてきたり、主役二人（鹿角、磯野）も確実に力をつけてうまくなってきています。反面、公演終了後、運営委員や中堅の中に退団を申出る者や、結集の著るしく悪くなる者などあり、運営委員会を持つことも出来ません。春の小公演を踏台に秋の十周年記念公演には〝アディオス号の歌〟でという案も出ていたのですが、今回の制作上のいちじるしい後退の中では、小さい規模からやり直していかねばならないかもしれません。例会週三日はくずさず、基礎訓練や本読み、道演集の演劇学校参加者をふやすような方向でやってゆく予定です。（宮津泰子）

（小樽市銭函2―47―16鹿角優一方）

劇団名芸

名古屋市長選では色々励ましをいただき、どうもありがとうございました。また、6月4・5日に行なった中部ブロックゼミナールでは「四日市市民劇場」の皆さんにすっかりお世話になりました。

名芸は現在、7月16・17日の「ロミオとジュリエット」（演出・池田博）を目指して追込みに入っております。この公演は、革新名古屋市政の市民会館自主企画でもあり、是非いい舞台を二三〇〇人のお客さんを集めたい

と思います。

終ると、すぐ7月23・24日に第9回みなみ子供劇場があり、名芸は「はだかの王様」をもって参加します。

夏のゼミナールにはできる限り多くでかけたいものです。秋は創作劇で、演出は谷辺と内定していますが、全ては「ロミオ……」が終ってからです。よろしく。（栗木）

（名古屋市南区汐田町三の四〇）

劇団さっぽろ

①現在、小学校公演班（12名）小劇場班（6名）本部班（6名）にわかれて公演活動中です。5月30・31日に東リ演議長の黒沢さんと事務局長のこばやしさんが来札されて、小劇場公演を観ていただき、演出、演技、劇団運営全般にわたって意見をいただいて活潑な交流をしました。劇団員には色々な意味で刺激になったようです。

②小学校公演「チポリーノの冒険」（ジャンニ・ロダーリ作）と③小劇場公演「はやてに走れアマンジャク」（しかたしん作）「乞食の歌」（津上忠作）を10月下旬まで全道各地で公演します。

④「働けど働けどわがくらし楽にならず」です。制作専門にやる人がいないのと経営制作部門と創造部門の遊離の傾向のあるのが感じられます。

（札幌市西区手稲宮の沢四八五―四一）

劇団若者座

①近況。22名の中近く結婚する組を含めて18名が世帯持。殆んどが夫婦団員で17名の劇団二世を抱えて四苦八苦。独身者はたったの4名。その世帯持の主婦団員の結集が弱いので一口千円の頼母子講を開座。全員一口以上加入、会場持廻りで舞踊や学習会をと話合われている。

四月二十九日の市長選で保革の一騎打。宇部で初の革新統一が実現し、史上最高の激烈な政治決戦となる。「民主市政をつくる会」の代表として浜田が陣頭指揮。メーデー前夜祭の為の「天満の寅やん」を中止して全員選挙戦に復帰。票読み、ビラ配布、演説会の司会にと大奮闘。あと一歩で惜敗したが、統一の偉大さに多くのことを学ぶ。

②最近の公演。6月12日、宇部市労働会館で「ちびっ子フェスティバル・77」を開催。七回続けてきた「若者座ちびっ子劇場」を発展的に解消して「明るく健康な舞台を通じて子ども達に夢と希望を…」と、他の文化団体に共催を提起。10回に及ぶねばり強い話合いを重ね実現にこぎつける。若者座「はやてに走れあまんじゃく」岡田和善演出。劇団の二世2名初出演。合唱団森の会、映画サークル「王様の耳はロバの耳」、宇部マンドリーノ、宇部奇術研究クラブのマジックショウ。午前午後、2回共超満員で札止めの盛況。それは「一人でも多くの子ども達に喜んでもらうために」入場無料。総額四〇万円を市の助成とカンパでまかなうと云う方針を貫いて成功させたもの。出演者五十数名が「文化戦線の統一」を喜び、乾盃を重ね乍ら「来年も是非」やろうと誓い合った。

③十月頃までの活動予定。来年十五周年を前にして、劇団の歴史編纂（さん）の作業が進行中。十月頃までには大要がまとまる予定。秋の本公演の戯曲を選考中。

④わが集団の問題点。新しい若い戦力をたくわえなければ「若者」座ではなくなるし、十五周年も燃えそうにない。（天羽）

（宇部市松山町4―10―24
東洋針灸科内　浜田義治）

劇団協同

前略。じめじめとうっとうしい日が続きます。いつもいつも大変ごくろうさまです。

①一～二月の「ある遅い出発」の移動公演のあと、移動公演No.2として「協同子どもの劇場」（彦市ばなし、ジャンボ紙芝居）の準備に入りました。団地の自治会、子供会や稽古場付近の子供会にオルグして廻り、初めての経験で団員一同とまどっております。又、六月より、第七期演劇教室を十一名で発足。

②移動公演日程。6月26日（立川羽衣児童館）7月3日（日野湯沢会館）8月13・14日（立川中央公民館）8月28日（府中住吉文化センター）七ステージ行います。

③11月26・27日、立川社会教育会館ホールにて第21回公演（作品未決定）を教育会館との共催事業として行う予定。

④団員が相変らず少ないこと。作品がなかなか選定出来ない―このことは私達の創造の課題（理念）が不明確なことに通じると思う。

（車田記）

（立川市曙町三―四八―七）

劇団潮流

前略。いつもお世話になりましてありがとうございます。下半期のスケジュールは

8月5・6日
ピランデルロ作「ヘンリイ四世」

9月30～10月2日
井上ひさし作「藪原検校」（予定）

1月6・7日
アンデルセン作「はだかの王様」

1月8日　松本清張作「左の腕」

その他に巡回公演は西日本を中心に、親子劇場、小学校対象「はだかの王さま」、一般中高校生対象「左の腕」で活動いたします。今後共よろしくお願いいたします。

（大阪市西成区松一―六―一七）

劇団群馬中芸

ごくろうさまです。

①創立十五周年記念に向けての準備

②八月まで中村欽一作〝タロ・ジロ・ゴンザと山賊の城〟小学校。木村次郎作〝絵姿女房〟中学校。

③九月より新作、木村次郎作〝わらしべ王子〟小学校公演。

④地域との結びつきをいかに高めるか

（担当・鈴木四郎）

（前橋市昭和町三―一五―二）

人間座

数年来の底無しの不況の中で、赤字に悩む自治体が多くなっていますが、その厳しい状況の下で、座は、どんなへき地へも文化をという運動を地域と一体になって推し進めるにはいまどうすればよいかを苦しみながら考えています。

昨年実験的にやってみた「朗読教室」の学校巡回を、今年はさらに充実させるべく、去る四月二十日に京都会館小ホールで試演会を済ませて、五月以降移動を始めました。

演目は、第一部として、生徒の作文の朗読指導と、その学校で使っている国語教材の中から適当なものを選んで朗読する。第二部は山村に生きる中学生の手記のかたちをかりて人間の発達志向のあるべき姿を模索した創作劇『カルメンになりたい』（一幕）で、中学生の進路や生活指導の問題を学校側といっしょに考えてゆこうというねらいです。

すでに北桑田地域、丹波・丹後地方の十余校をまわりましたが、例えば周山中学というところでは教師集団・父兄・生徒と三位一体のとりくみが成功しましたし、また丹波のへき地の雲原という全校でわずか四十名という学校でも作文朗読を通して『対話』をしてきました。生徒一人あたり一律二百円の観劇料ですので、ときにはガソリン代にも足りない公演もありますが、ともかくやれるところまでがんばってやってみるつもりです。

また本年は人間座創立の二十周年に当りますので、秋にはその記念公演を予定して居り

ます。

（京都市左京区下鴨東高木町十一）

劇団すがお

東リ演のみなさん、こんにちは。

やっと稽古場が建ちました！萩坂さんの弁を借りれば〝崩壊寸前の劇団〟の底力で長年の夢が実現し、自前の稽古場を竣功させる事ができました。

去る6月12日（日）梅雨の最中とは思われない程の青空、初夏の風が快よくほほにあいさつしてくれる。そんなめぐまれた日に、東リ演中部ブロックの仲間や劇団の協力者ら80名を越える多勢の方に祝っていただきました。

稽古場は30坪足らずの中二階建て、一階は5間×5間のフロアー・台所・トイレ・シャワー室、中二階はギャラリイと物置・事務ペース、小さいけれど手作りの味が生きていると自負しています。

さあ、器に負けない中味、いい芝居をと劇団員一同がんばっています！

尚、次回公演予定は

7月30・31日（土・日）

「はだかの王様」

於劇団すがお稽古場

◇今後劇団への郵便は左記へお願いします。

〒511　桑名市森忠士上野一〇五七

劇団すがお

TEL　〇五九四―三一―四二一〇

劇団からっかぜ

①3月初めから次回作品「じんばい」の公演体制がひかれています。演出は前回と同様、宮下公平に決定し、作品の舞台である東北は八戸市へゆき現地調査、また作者ともおあいし作品に対する理解のたちおくれをとりかえそうとはげしく活動し現在にいたっています。

②4月15・16日。「カルラールのおかみさんの銃」浜松児童会館ホールにて上演。観客動員数は目標より三〇〇名少ない五〇〇名。

③第5回からっかぜ小劇場

「じんばい」作・小寺陸留

8月4・5日（木・金）夜

浜松児童会館ホール

◇8月末、第14期生中間発表会

④ケイコ日への集中が悪い。ケイコ開始時間のおくれが目立つ。この出席率とケイコ時間の短縮は我々の芝居づくりにいい影響はあたえない。又公演一ヶ月前でないと熱が上らないのは困るのである。期生生活をへて劇団へ入団する人がいてもそれだけ劇団員の休・退団者があらわれ、毎年劇団員数はほとんど変らない。劇団員の増加と多数による、時間が充分あることでケイコがしたい。

（浜松市曳馬町一四〇九）

劇団月曜会

六月一〇日、一一日、劇団月曜会第一五回公演として「ジョー・ヒル」を上演しました。

この公演には、劇団木々の会、広島合唱団全映テレビタレントセンター、広島市民劇場、劇団京芸のほか、地元タレント、音楽家多数の協力出演をいただき総勢四五名の出演する舞台となりました。

次期上演作品は、土屋清の新作として、昭和四十年の広島を舞台に展開した、ある異色社会派推理小説の脚色を予定しています。

（広島市皆実町一―四―七岩井里子方）

岡崎演劇集団

①②去る六月十二日に第2回創作劇「いまだ僕らの旗手は」（夏目つとむ作・浅井克彦演出）を観客数400（1ステージ）で上演しました。観客の声として、もう少し盛り上りのあるものであったらとの感想もありました。今後もこの作品に手を加えて行くつもりです。（黒沢、萩坂両氏に御らんいただき、批評をいただけたら、と残念に思っております）

③◇七月二十八・二十九日、第九回夏期演劇講座（主に西三河の高校演劇部対象）

◇八月上旬子供劇場「三家福」（丘揚作）

◇十一月二十七日第十八回本公演「三角帽子」（アラルコン作・木下順二脚色）

④第一に女性劇団員の不足。第二にけい古への出席率が悪く、それに伴いけい古の集中度が悪い。以上2点が大きな問題点です。

六月二十五日　柴田・記

（岡崎市元欠町三丁目十の三）

劇団京芸

昨年秋にはじめた「狐とぶどう」（ギリエルメ・フィゲレード）の近畿中・高校移動公演を続けています。むこう一年間、この一本にしぼって徹底的に掘り下げるつもりで稽古を重ねていますが、日々の発見がエネルギーとなります。

少人数ながら、今年も俳優教室をはじめました。先ず力の充実をはからねばなりません。

（京都市伏見区納所北城堀31―18）

劇団つくし

◇五月一日―二十五周年にむけての試演会。構成劇「まつり、まつり、まつり」と「小さなおしろ」（マルシャーク作）を上演。

◇五月五、八、二十二日―第九回富士宮市子供祭り、4会場5ステージによる、学校巡回公演、構成昔話「きつねにばかされたお侍のお話」「小さなお城」人形劇、クイズ…他小さなものをもってまわった。

◇五月一日の試演会の構成劇「まつり、まつり、まつり」は、私達の町の、キコリの唄、糸つむぎの唄、鎮守のまつり、浅間神社のタイコ、などを構成して、七月二十九日の二十五周年にむけて試演してみました。生活に密着した意見と反省が各所から出され、劇団員大いに張り切るしだいです。

（富士宮市西町20―2野沢方）

劇団造形劇場

三十五号の通信を怠けました。三月末までに果樹園に各種苗木の移植を終りました。四月六日は町主催の第二回「吉四六祭り」。今年は吉四六仮装行列を中心にして町民多数が参加、劇団では五十人分の衣裳を揃えて、化粧の扮装等、異方を担当。町長の吉四六、議長の庄屋、商工会長の代官など、沿道の観衆の大喝采を浴びました。四月九、十日、有名な宇佐八幡宮能楽堂に於て第一回大分県神楽大会が催され、県下より四十四座の神楽が競演、劇団が最も親しく交流をもつ、御嶽流緒方神楽が優勝、二日間の全曲を録音しました。

五月二十八日、日本社会党参議院選勝利決起集会に於て、神楽囃子に乗って「吉四六天のぼり」を上演、三千人の大観衆を涙と笑いの渦に巻き込み大成功、これは臼杵市の綜合サークル「おいで」の二十人を十二日間で指導上演したもので、吉四六神楽としては勿論初演です。

三月三十日地元より増各静夫（19才）が入団し、山羊、チャボの世話、百姓仕事に張り切っています。六月二十日、田植を終りました。山羊二頭、チャボ十五羽と徐々に増えています。近くには飼料となる草がふんだんにあるので牛も五頭ノ十頭飼う計画です。おかげ様で今年は野菜が沢山とれています。

六月二十三日　野呂祐吉

（大分県大野郡野津町板屋）

劇団湖

皆さん今日は！お元気ですか？当三笠市も北炭幌内砿の重大災害のあと市民一丸となって頑張って参りましたが、事故から一年半、やっと遺体もあがりはじめ今秋から再開の見通しが出来ました。新生三笠をめざし文化活動も盛り上る気配を感じさせております。

②四月に試演会を行い、観客の組織化のため足固めとして「結婚の申込み」上演。六月五

た。なお今度の公演では劇団「下町」の仲間「人、演劇集団「未踏」の研究生の方二人に、協力出演していただいております。

「日本の幽霊」の公演が終ると、秋には埼芸第3回こども劇場公演の準備、それと併行して第二十八回公演のけいこが待っています。

第二十八回公演の作品は「三吋下水管」（作・矢野喬、演出・川村武夫）「橋のある風景」（作・芳地隆介、演出・渋沢洋俊）ときまっています。

なお、今年五月に第四期研究生を募集したところ、男2、女4が応募、現在開講二ヶ月目です。

（川口市領家五―一―六九）

劇団息吹

①息吹、かみがたが正式に合流し劇団息吹となり、その第一回公演成功のために全団員が創造的にも組織的にもよく団結して頑張っています。又若い人の入団があいつぎ、嬉しさの中にも、今後の団の発展方向にもかかわる新入団員教育の大切さともあらためて必要になってきたと、古い団員達は身はひきしまる思いでいます。

②六月四日五日八尾市民ホール（三回）、六月十八日柏原市民会館（一回）七月七日大阪郵便貯金ホール（一回）。東川宗彦作・喜劇「牛」演出・大坊晴彦、木田昌秀。

③引続き「牛」の公演を続けたいと思っています。ただし手打公演とはならないでしょう併せて次回予定の「大和川」の準備にとりかかりたい。

④久し振りに多幕を上演し、出演者が二十五名ともなると、裏方に専念出来るものがほとんど残らないという状況で引続き団員拡大が必要。地域公演を主としてやった結果、観客層がひろがり、その多様な（こんな作品が見たいという）要求を、どう作品選定に反映出来るだろうか、又自分達の要求とどう一致させてゆけば良いだろうか。次回公演に向けて一番大切な問題となっています。

（八尾市堤町一―四〇）

劇団轍（わだち）

皆さんこんにちは、初めて通信差し上げます。青年活動の活発な土地柄、その中から小さな町に浮き沈みの四つの演劇グループが各々活動を続けています。しかし最近停滞気味でこの秋はどうかな？。

昨年、創立公演「海の沈黙」を発表し、続いてアトリエ公演「交換分合」「煙草の害について」公演、今度は7月22日に「車椅子の王女とその騎士」を上演します。団員十名程の少人数なので2役3役で張り切っています。今後よろしくね。

（道上）

（武生市広瀬町一〇九道上春夫）

劇団きづがわ

月曜会の「ジョー・ヒル」を観劇しての西り演ゼミナール、参加者こそ多くはありませんが、充実していてよかったと思います。

初めて月曜会の舞台に接し、是非「河」をみておきたかったなアーとの思いに駆られ、悔やまれてなりません。

月曜会並びに事務局のみなさん、本当にお疲れ様でした。またたく間に和歌山での総会がやってきますが、よろしく。

◇上半期の主な活動のひとつは、うたごえの仲間や、地域の婦人、学童保育、労組、PTAなどと一緒に取り組んだ〝ちびっこ広場〟が二ヶ所（住之江2／13・港4／29）。私たちは野外舞台の設営などと共に、〝はだかの王様〟とベニヤ板で作った大きな紙芝居を上演。

当日は、いづれも、どこから集まったのかと思う程の多勢のちびっこたちとお母さん方で、溢れんばかりの大盛況。生き生きとはしゃぎまわるちびっこと、喜ぶお母さん達の姿が、印象深い取り組めとなりました。

◇それと、もうひとつは、大阪自立演劇連絡会議が、青少年活動振興協会とタイアップしての、「大阪春の演劇まつり」。自演連加盟の九集団が参加し、五公演、10日間、12ステージをもたれ、その中で創作劇が三本生れ、延べ観客数は一八五〇名でした。私たちは、5月25・26日『〝愛〟三部作』（作・勝山俊介演出・赤松比洋子）を上演。

劇団道化

①広島ゼミ、おつかれさまでした。月曜会の「ジョー・ヒル」久しぶりに見ごたえのある素適なしばいでした。

②我劇団では、久々の福岡子ども劇場高学年例会、「奇蹟の人」（6月18・19日4回）が終り、ほっとする間もなく、中高校公演「奇蹟の人」（ギブソン作・内山昇演出）小学校演劇教室「廻れクランビン」（しかたしん作・森実重雄演出）に突入しています。

③7月中旬より、小学校演劇教室用作品「一銭ほり」の仕込み、けい古に入ります。

④毎年、一学期・学校公演が少なく、劇団員に給料が支給できず、別の形態（青年団、保育所等）模索中です。待ちに待った新人が増え、教育・研修体制の確立。

「奇蹟の人」につづく中高校公演の作品がまだまだ難行中です。

（福岡市中央区春吉一―七―八）

劇団いこら

コレラで大変御心配をおかけしました。遂にコレラ菌の発生感染径路は全く明らかにされぬままに「汚染地域解除宣言」が出されました。

「いこら」は八月「ともだち劇場」公演、そして西り演総会。そして秋の公演へのとりくみです。

総会には何のおかまいも出来ませんが、ぜひたくさんおいで下さい。

（和歌山県有田郡湯浅町一二五九―一　栗原　省

TEL〇七三七六―三―〇三二三）

岡山職場演劇集団

①②六月十一日十二日全国鉄演サ協主催演技ゼミ岡山で開催の為、その準備と、課題戯曲「日本繁栄学入門」より「地下試射場」上演のケイコ及び上演。

③全国鉄演サ関西で協演観祭松山（十月中旬予定）の戯曲選定討議。

（岡山県総社市富原四八〇―三岩城薫）

劇団湘南アートシアター

①第一期研究生が新たに入団し、やっと二ケタを越す、十三名の劇団員の集団となる。

②3月27日、藤沢市労働会館にて、研究生卒業公演「象」（作・別役実、演出・真包巌）200名動員。5月27・28日、藤沢市民会館小ホールにて第十四回公演「橋」（作・マリオフラッテイ、演出・酒谷忠雄）「鳩」（作・勝山俊介、演出・真包巌）560名動員。

③7月22・23・24日、第一回夏休み親子劇場「牛鬼退治」（作・かたおかしろう、演出・真包巌）

④第十四回公演が我々としても最近の中でも一番悪い動員数560という数を出してしまった。再演のむづかしさを感じている。私たちは休むひまなく、夏休み親子劇場にとりくんでいるが、動員目標2400名はどうしてもやりぬかなければならないと思っている。

（藤沢市辻堂新町一―四―二五真包方）

劇団静芸

「旅立ち」を五月静岡、六月藤枝で上演。八月はいよいよゼミのモデル上演ということで、七月は定期総会や稽古、ゼミの受入準備など多忙をきわめるでしょう。バテないで頑張りたいとおもいます。

「旅立ち」は来年一月下旬、市内の定時高校の演劇教室に予定されており、一年がかりの仕事になりそうです。

来年は創立満30周年を迎えますが、余りきばらずに、実質的な活潑な創造活動をすすめようと話し合っています。

（静岡市昭府町二八九―二）

劇団大阪

西リ演ゼミも無事？終り、私達は次の作品にとりかかっています。幸いな事にちょうど今年前半期の総括をしたところでした。その中で特徴的な意見を報告します。

三月の新劇団協議会合同公演「四季の女たち」（作・かたおかしろう）には第三話の演出、役者、舞監と各々一名づつ送り、はじめて専門家との芝居創りになりましたが、高橋さん（獅子座）の、その年輪と芝居への変らぬ情熱に打たれ、芝居の間、テンポの大切さを痛感した役者が一番勉強になったようです。芝居全体としては良いものを創ろうという一体感に支えられた良い舞台になりました。が戦争が民話でしか語れないものか、という不満も残りました。

次に四月の前半と後半に二回のケイコ場公演を行いました。まず「夜の来訪者」（作・内村直也）はベテランの役者を中心としての公演でしたが、演出、役者双方共に問題を抱えながら、それが創造時にぶつかり合いが少く、取り組みとしても、内容的にも盛り上りに欠けた。中堅どころの役者がまともにしゃべれない「もの言い」の問題や、プチブルの家庭、人物の形象はむつかしい事がはっきりしましたし、一人一人の役者が勉強になった取り組みでした。

続いて、新人達を中心にした「五月」（作・宮本研）は新人ばかりという事で上演の間ぎわまで不安な状態で公演しましたが、フタをあけてみますと前半期で一番評判の良いという結果になりました。その新人達が語るには「役が好きになった」「役がわかった」「役になってた様な気がした」等何かをつかんだ事や観客と一体となった舞台創りになった事がその好評の要因でしょうが、なによりも古い作品であるが身近に感じられる作品を選んだ事が良かった。最後に創作劇「巡礼殺人事件」（作・杉本浩平）があります。この作品は作者が今の新劇にアンチテーゼをした形になり面白い芝居をという事で、役者がまずその戯曲形式に面くらった事や、ダンス、歌、舞踊を入れ、講談師が登場するというその作品内容について行けなかったりで、作品の意図を充分に演じ切れなかったようですが、役者はどんな作品の中でも具体的課題を持ち取り組めば成果があがる事もはっきりしました。

こんな事で半年がすぎ今は、十月五、六日に公演する「あゝ野麦峠」（作・大橋喜一）に取り組んでいます。以上。（A・T）

（大阪市南区谷町七の二の一　新谷町第二ビル一〇三号）

さいとう・さとし（徳島・未来）

先に報告いたしました新しい自主的演劇運動をめざす徳島演劇サークル活動がだんだんと軌道にのりつつあります。

高校演劇関係の方や、古い劇団水車時代の経験者や、劇団つくし、部落研の仲間に劇団未来が参加して、かつてない巾広い活動となりそうです。県内各所で、ばらばらだった芝居造りたちが始めて連らなったという形です。予定では9月10日、県郷土文化会館で、県民まつり演劇の日に田中千禾夫「笛」を上演することになり、現在テーブル稽古中。これを成功させた上で、劇団結びつけたいと頑張っています。旗上げ公演は早ければ十一月、おくれれば来春の予定です。

早々に地域の観客に責任のもてる自立劇団を徳島にも確立したいものと考えております。今後共よろしくご指導下さい。

（徳島市南佐古八番町五―一六　県南佐古職員住宅24号）

仙台小劇場

通信おそくなりまして申訳ございません。先月は、黒沢議長、小林事務局長さんに来仙していただき、東北ブロック会議を開く事が出来ました。夜おそくまで、どうも御苦労様でした。二回目のブロック会議を七月九日山形で行なう予定です。

八月三・四日小寺隆韶作「かげの砦」公演を控えて、劇団員一同必死に頑張っていますが、これからの稽古をより充実したものにしたいと思います。残り日数もわずかとなり、あせりが出てきてこの公演が終ると、夏の東リ演ゼミですね。

今から楽しみにしています。皆様もお元気で

（仙台市堰坊小路一―六八西ビル2F）

劇団どろ

報告します。（まだ間に合うでしょうか）

◇5月21日「若者たち」を上演しました。2ステージで450名でした。

◇最近の〝どろ〟の収穫を報告します。昨年の9月に小さな稽古場を持てるようになって児童劇に取り組めるようになり、それが定着しつつあるのです。児童劇としては、まだまだ未熟ですが、それでも2、3、4月と10ステージで800人を集めました。内容は、劇＋お話し＋紙しばいです。7、8月には移動公演として団地へ持っていく予定です。

◇それから稽古場を持つと同時に研究所を発足させ、6月末に卒業公演を行ないました。芝居＋映像＋ロックの新しい試みです。いろいろ問題も含んでいますが、劇団どろとしては非常に劇期的なことなのです。

（神戸市生田区海岸通3―33海岸モータープール内）

青年劇場

①劇団員現在84名、常時2班が地方巡演中でフル回転。それでも7月末、劇団の福利厚生部が家ぐるみの一泊の海水浴を計画。

②「多すぎた札束」5月、6月、各地で東西リ演の劇団にお世話になりました。6月28・29日都市センターで東京再演も補助席を出しての超満員。

「男一匹十七才」5月5日～7日東京公演。その後高校巡演中。

「かげの砦」ひき続き、青少年劇場として活躍中、親子劇場でも例会。

③「偽原始人」原作＝井上ひさし、脚本＝瓜生正美。9月8日～12日、労音会館ホールで上演。

（東京都渋谷区千駄谷五―三三―六）

おねがい

劇団通信は、面倒かもしれませんがすすんで送ってほしいと思います。たしかに効用もうすいので忘れられがちです。しかし実は、これは相互間で役に立つのです。

本号でも東西の有力劇団がいくつか欠信しました。これからは来なくても督促はしません。また、季節外れのように遅れてくるものは、載らぬことがあります。あしからず。（萩）

◇　◇

「燕よ　お前はなぜ来ないのだ……」

――作業メモ――

大橋喜一

はしがき

劇団民芸では、このたび「燕よ　お前はなぜ来ないのだ……」（韓国からの通信――劇化）を上演した。わたしはその作業メモを書く。「演劇会議」の萩坂さんのすすめもあり、それはわたしにとって意味があるだけでなく、また「演劇会議」の読者諸兄の参考にもなるだろうと考えるから。

突然の思いつきではないこと

この公演は突然に思いつかれたものではない。先行して金芝河の諸作品の台本づくりがあった。はじめは「銅の李舜臣」、そして「蛾語」。「蛾語」では叙事詩をそのまま劇化する試みがなされ、今度の仕事のヒントにもなっている。「チノギ」の場合も、詩や「苦行――一九七四」がアレンジされ、アイデアは演出者の米倉斉加年君からでている。これらの先行する協力関係なしには、このたびの「燕よ――」の企画も考えられなかったであろう。

金芝河の創作精神のうえに

企画は二三年前からあり、具体化したのは一九七六年の春。金芝河の作品上演をとおして生れた支援層もいて、その意見もきいた。当初のプランでは七六年中に本をあげる予定、本の内容はすべてわたしに一任された。金芝河の戯曲を上演する精神の延長にある創作劇、とするなら内容は日韓問題、政治的には朝鮮の平和的統一に役立つもの。容易ではあるまい。だが米倉君はじめ支援する人々の、わたしへの期待を考えると、是非ともなしとげなければならない。

台本を二つこしらえる方法

わたしと米倉君の間には、かねて考えられていた方法上のとりきめがあった。それは、けいこの過程に作家も参加し、そこで台本を完成させること。ということは、けいこの開始は〈基礎台本〉ではじめ、けいこの進行とともに台本の表現も発展し、舞台の仕上りが〈完成台本〉として記述されるということ。だから、〈基礎台本〉は、テーマや全体的構成はしっかり出来ていなければならないが、デテールの具体的表現――動きや舞台効果についての卜書きとか、ときにはせりふの定着など――が、必しも定着されている必要はない。こうして台本は二回書かれ作られる予定。

（費用の関係で、印刷されたのは〈基礎台本〉のみ）というプランであった。

むずかしい現実のバランス

ふり返ってみると、この仕事には現実的に微妙な三つのバランスがかかっていた。わたしたちの創作である限り、朝鮮問題を日本人

としていかに考えるかという主体的立場が問われるということ。同時に在日本にあっても分裂せしめられ対立状態におかれている朝鮮民族の立場を、対象となっている民主回復をたたかう韓国籍の人々、統一を求める人民共和国の立場の人々、そうした三つのバランスのどれをも失するものであってはならないということである。（この場合、朴政権支持の立場にある人々は論外と考えてよかろう）。台本は基本的に日本人対象の劇であるが、在日本の韓国籍の人々、人民共和国籍の人々、それぞれの立場を許容するものでなければならない。

これは台本に〈韓国〉あるいは〈朝鮮〉ということばの、どちらを使用するかでも、微妙にそのバランスに関わることである。劇の効果をきわめてアクチュアルなものに考えるだけにも、これはもっとも慎重に考慮されるべき課題であった。

資料はすべて「世界」による

わたしは日本人一般としては、朝鮮人を身近に感じているつもりだし、作品にも朝鮮人はしばしば顔を出す。しかし、在日朝鮮人ならばまだしも、韓国の社会問題を韓国を舞台にした戯曲に書けるなどとは、毛頭思っていない。劇の構成ははじめから、資料をもとにした報告劇、記録劇のスタイルでゆくよりないと考えていた。たまたま雑誌「世界」で、数年前から「韓国からの通信」を読みつづけていたし、「ドキュメント・金大中氏拉致事件」は大切な資料と考えていたので、それらを底本にしようと考えた。それ以外にここ数年間に「世界」にのった朝鮮関係の記事や論文は、わたしが表題を書き抜いただけでも百篇以上にのぼる。わたしは資料をすべて「世界」に限定して考えた。それ以上は個人の労働では不可能に思えたから。こうして七六年四月末よりわたしはこの仕事は集中した。

現実をつかむための作業

五月より八月にかけ執筆への準備。その間の仕事は二つに大別される。一つは韓国の状況を身につけるためのもの、他の一つは劇の発想をつかむためのもの。

前者の仕事を箇条書きでまとめてみよう。

1　まず資料索引をこさえる。目を通した数多くの資料が、どの本の何頁にあるか、すぐ引出せるように。以前はこれをこしらえなかったため、あとからずいぶん手間をかけた。

2　基礎的事項の確認とメモ。日本と朝鮮に関連する基礎的なもの。例・三・一独立運動とか、京城事変とか、東学党の乱とか、あるいは著名人物についてのメモ。これらは百科辞典の程度でいい。

3　一九四五年八月一五日以後の朝鮮現代史の年表づくり。これには雑誌「世界」がたいへんに役立った。

4　一九七三年八月、金大中氏拉致事件以後の、約三年間にわたる日韓の日誌の書きぬき。これも「世界」が編したものから行う。

5　それらに併行して「韓国からの通信」の要約メモをつくる。

以上の作業は、執筆時に使う便宜を考えて、なるべくていねいに記しておく。しかし、これらの仕事のもっとも主要な目的は、これによって〈作品の世界〉を頭のなかにこさえることにある。資料づくりはあくまで手段と考えるべきであろう。

6　その他専門的事柄についての参考。例・韓国のキリスト教・学生運動・日本の経済的進出・馬山輸出自由地域の状況など。これもほとんど「世界」によった。

これらの仕事のために必要なものはなによりも根気だ。焦ることは禁物。日々コツコツ積み上げてゆく。つねに坐右には四十冊以上の「世界」が置かれている。四ヶ月間集中することである程度の〈世界〉は頭のなかに形づくられてきた。しかし重点をどこにおくかはまだおぼろ気である。学生運動やキリスト教の活動、経済問題とか、大統領身辺の噂などが、あるなにかを形づくりそうではあるが、しかとした形は見えてこない。

発想をつかうための作業

同時に行ったのは発想に関する仕事だ。前の仕事が資料中心であるのに対し、こちらは想をねるのが主である。だから一日のうちもっとも頭の状態のいい時に行うが、自然と前者の仕事に疲れて気持の転換が必要な時に想いが浮ぶ。なによりテーマの視点の追求であって、それらのあれこれの考えをわたしはエッセイ風に記述する。こんどの場合は、原爆問題を考える場合のようには進捗しない。

発想への補助としてわたしは戯曲をよむ。それは自分が予想する劇形式にヒントを与えるような作品に限られる。いわゆる「戯曲研究」とは異って細かいメモはとらない。対象としての内容と、劇展開の形式の大ざっぱな関係をつかむためにする。今回の場合に例をあげると。

「ベトナム討論」（ペーター・ヴァイス）
「想い出のチェホフ」（エリ・マリスーギン）
「この白いアメリカ」（M・B・デューバン）
「世界を震憾させた十日間」（リュビーモフ）

その他、金芝河の戯曲、叙事詩など。

前者の仕事が規則正しく積上げるのに対して、こちらの仕事は自由気ままにしなければならない。雲を追いかけつかむようなものだ。そして「これならいける」と確信のもてる発想がつかまれると、以後はその発想の視点を中心にして掘下げ、思考が重ねられ、それらが構想になってゆく。つまり、劇のはじまりと、おしまいと、主要な経過、場面が形づくられてくる。

これら段階のことは、あとから記述することは困難である。ノートもあれこれのことが断片的に記されていて、とりとめがない。

発想はやはり直感でつかむもののようだ。

歴史の太い筋はみえたが

これらの頭のなかに〈世界〉をつくる仕事のなかから、見えてきた流れがあった。それは一九七二年一〇月の「十月維新」とよばれる非常戒厳令あたりを発端に、（あるいはその三ヶ月前の南北共同声明あたり）金大中氏拉致事件へとすすみ、それに対する学生やキリスト者の抵抗が、民青学連事件なるものを生み出してゆき、その頂点に人民革命党被告の処刑があり、それらが七六年三月の「民主救国宣言」に集約されるという流れであった。だがこれだけなら単なる歴史の記述であって劇にはならない。劇の形成にはそれらの歴史を体現するなんらかの登場人物が必要で、その登場人物たちの設定、状況がこしらえられなければならない。それらの点では八月になってもほぼ五里霧中という状態であった。

構想がまとまらない地獄

とはいっても発想がまったく立たなかったわけではない。いくつかの試みが思いつかれ、いく日か考えられ、文体をたしかめるために冒頭の十何枚か筆をとったこともあった。ソウルの裏町に教会を設定して、神父と修女を主人公にしてみたり、金芝河の登場人物たちに、生みの詩人の危機を訴えさせたり、あるいは、わたし――貧しい日本の詩人

が金芝河のおかれた状況を幻想したり……いずれも書きすすめるまでには至らなかった。こうした試みは数を重ねると次第に焦燥をよびおこして、精神衛生を悪化させる。いわゆる構想のまとまらない〈地獄〉をつくりだす。去年の八月がまさにそれであった。こうした場合、一時仕事を打切るのが良策なのだが、期日をきめた仕事ではそれができない。（じつを言うと、他の仕事のため、九月～一二月まで中断せざるを得なくなったのだが）こうしてやっと、一群の韓国人が韓国の状況を舞台から訴えるために来日した――という状況を設定して、「十月維新」だの、「金大中氏拉致事件」だの、「日本企業の韓国進出」などを、ストリーのゆるやかなヴァラエティ方式で、七〇枚ぐらいまで書いた。だがどこかに確信がもてない。意識のどこかで書いたものに「ノー」がささやかれている。わたしは混乱していることを覚って、それまで書いた分をはじめて演出者の米倉君に読んでもらった。（これまでわたしは、初稿が上るまでは他人に見せたことがなかった）

ダイアローグがこさえものに

彼は全体の構成については賛成してくれたが、文体の点といおうか……書かれてあることのすべてが事実に依拠しているにかかわらず、むしろそうであればこそ、事柄をダイアローグに移す（つまり会話化――人物の設定のところ）過程で、こさえものに見えてしまうと言ってくれた。きわめてアクチュアルな記録劇的な内容なればこそ、スタイルがこしらえごとにみえるのであろう。それならどうしたらいいのか？（この段階はすでに今年の一月であった）……わたしはまたあれこれ考え、ときには冷いものが胸のあたりにわだかまったりした。米倉君もいっしょに考えてくれた。あれこれとわたしは文体をいじってみたりしたが、解決はみえて来なかった。そうして一月の末のある日、突然彼から天来のようなヒントが飛んできた。

天来のヒント！

「大橋さん、劇につくることをやめて、『韓国からの通信』をむしろダイレクトに訴えたらどうですか？」

「ダイレクトに？」

「そうです。せりふにこさえようとするからこしらえごとになる、としたなら、せりふにしないでダイレクトに書いてみたら」

「そうすると、叙述のスタイルになるが…」

「叙述でいいんです。叙述だって芝居になりますよ」

わたしは、かつて『蜚語』を、金芝河の叙事詩を一字も崩さないで劇にしたことを思い出した。これか！

「基礎台本だから、叙述で充分です」

曙光が射した。もう何回もいじり廻して手垢のついた基礎材料「韓国からの通信」から、構想にしたがって抜粋を行い、組み合せを考え、朗読しやすい叙述体をこしらえた。それは、長篇叙述詩とも、アフォリズムの連なりともみえた。読みかえしてみると、それまで試みたどの文体よりも簡潔で、ダイレクトであるからこしらえごとの入り込むすき間もなく、緊迫感も強い。冒頭の三〇枚はまたたく間にまとまった。彼に読んでもらう。

「いいです。大丈夫いけます」

叙述ははかどった。なにを抜すいしてゆくかは、初期段階の日誌づくりやテーマ視点での思索の結果が役立った。ほとんど直感的に事柄は拾われ、二月一ぱいで作業を終った。「十月維新」にはじまり、七六年三月の「民主救国宣言」に集約されたのであった。

こうして基礎台本が

しかし、これは戯曲とはおろか台本ともよびがたいものだった。部分的にダイアローグや劇的なところはあっても、役名の頭書きも、ト書きもない、断片のならび。それらはこれからけいこ場で作られるとはいえ、このままでは読みづらいし見当がつかない。そこで仮の頭書きと、最小限の舞台イメージのための、ト書きをつけることにした。すべての叙述を五つに大別し、TK生を五人設定してそれにわりふった。その結果TK1は知識人、TK2は青年学生、TK3はキリスト者、TK4は庶民を代表し、そしてTK5を女性とした。その他のせりふ(訴えや宣言や叫びなど)は、それにふさわしい一般名をつけた。唯一の例外は〈金大中〉という個人名があることだけ。

脚本は、原典に準じて小見出しをつけ、その下に、典拠した本の号とページを入れ、いつでも原典をたどれるようにした。それでわたしたちはこの作品を〈戯曲〉とはよばないことにした。その作り方から考えて戯曲とよぶことは正しくない、脚本である。制作過程でいえば〈基礎台本〉である。わたしは〈ことば台本〉とよんだこともある。

本のあがりが三月上旬。すぐプリントに。米倉君は三月末にイタリアへゆく、グラフィク大賞受賞に。それまでに台本を仕上げてもってゆきたい。初日は六月九日ときまる。けいこ期間は約二ヶ月。

さて基礎台本をあげてからのわたしは、次は演出協力者として頭の切かえをしなければならない。例えわずかでも脚本のことを一切考えない空白期間が必要なのだ。第一の仕事は仕上り二二〇枚の台本の大巾なカットである。上演時間を考えると⅓は削らなければならない。とにかくいまは作品のことをまったく忘れて、頭を冷すしかない。

(未了)

米倉君の演出と、わたしの協力のやり方を書くつもりだったが、それには前段の脚本製作の段階をどうしても述べなければならない。そこで紙数がつきたので、けいこ場での仕事のことは、次の機会にまとめたい。現在は初日はあいたが、まだ〈完成台本〉づくりの仕事はこれからという次第。

(一九七七年六月一三日)

附記 「燕よ お前はなぜ来ないのだ……」の基礎台本は、プリント刷りを約二五%カットしたもの(作者による削除)を、「テアトロ、七月号」に発表しました。

初日の印象

六月九日。砂防ホール。席はやや後方。眼が悪いので、無理をして見ることを諦める。かえってそれが好結果になる。

カミ手に位置した5人のT・K生の報告がいい。その報告にあわせて舞台では小さな芝居やマイムやシュプレヒコールがある。人民革命党の被告の妻たちの訴えにはグッときた。

客席は水を打ったよう。これは一種のアジ・プロ劇でもあるのだから、今にも拍手が起きそうなのだが、それがない。どこかで抑えられている。抑えられ乍ら、怒りが累層してゆく。

筋や役者の見せ場のほかに、何かがぼくをとらえる。珍しい体験である。

(桃)

村山知義先生追悼

三ヶ月たって

関口 潤
(演出家・東京芸術座書記長)

トムさん(村山知義先生)がなくなられてから 三ヶ月になります。東京芸術座の代表というだけでなく、進歩的な新劇運動の指導者の一人として 53年間にわたるトムさんのお仕事は 演出作品 四一四、上演戯曲 一九四、舞台装置 一四三という数字をみれば、それだけで その旺盛な創造活動がしのばれます。

一九二四年 築地小劇場で ゲオルグ・カイゼルの「朝から夜中まで」の装置を担当したのが 演劇活動の第一歩ということになるのですが、その三階だての構成舞台は 今にいたるまで語りつがれています。翌年「心座」を結成し、同じゲオルグ・カイゼルの作品「ユアナ」を翻訳、演出、装置をうけもつのですが、この劇評で 小山内薫は、「村山君の〈ユアナ〉はいわゆる〈現代的演出〉でもなければ勿論、自然主義的演出でもない。大まかにいえば、表現主義的な演出であるが、あれはまだ世界のどこにも見られないといってよい独特な演出である」と評価しています。

演出作品 舞台装置の作品とも、トムさんの演劇活動の第一歩は このように構成派、表現派的なものから出発して行くのですが、東大マルクス主義芸術研究会の友人や「先駆座」「トランク劇場」との接触を通して 一九二六年に「前衛座」の結成に参加します。

日本の社会主義的演劇史の中で 最初の本格的な新劇運動といわれる「前衛座」の活動は、「左翼劇場」「新協劇団」と発展して行く中で、戦後にひきつがれ、トムさんの系譜としては戦後新協から東京芸術座の演劇理念として今日にいたります。

トムさんの筆になる東京芸術座の劇団規約には、「広く人々の魂に、真実への愛と勇気と熱情とを育てることのできるような演劇をつくり出し」「そういう芸術を創造するためには、社会主義リアリズムの創造方法に依らねばならず」「(そのためには)しっかりした劇団型態を取らねばならぬこと」と明記し、創造方法と劇団論の根幹を、その長い演劇活動を土台としての村山演劇論を要約する形になっています。

一九七〇年10月に直腸癌が発見され以後斗病生活がつづくのですが、昨年8月には 5日間にわたって史的唯物論、唯物弁証法に基づく認識論よりはじまる社会主義リアリズムによる演技論の講義を 全劇団員を招集して村山知義の遺言として聞くようにと、一語一語かみしめるように話されて行きました。

最後までトムさんは、社会主義リアリズム

による演劇活動の実践と実証とその発展の夢を私たちにたくされて行ったのです。現在も公演中の「蟹工船」の公演パンフレットに、トムさんのかかれた東京芸術座小史がのっています。

その中で『……私たちの劇団は　名前は変り、人は変ったが、そしてその時その社会状勢によって　当面の目標はいろいろと変ったが、終始「社会主義リアリズム」の創造方法を守って、四十九年間を通して来た。それは「社会主義的社会の建設にむかって進行して行く歴史の現実の中から、発展的な芽を摘みとって、それを芸術的に、リアリスティックに表現しよう」という創造方法である。その五十年間、われわれがやって来た何百という演目のリストを見るならば、われわれがやって来た仕事が何を目指していたかは一目瞭然となることだろう』（76年9月、東京公演パンフより。原文のまま）

このようにトムさんは、前衛座の活動から今日の東京芸術座までを、一つの動きとしてとらえ、一貫して社会主義リアリズムによる舞台創造の発展と深化をはかるための活動として総括されているわけです。これは単に一劇団の指導者としてのトムさんというだけでなく、現在のリアリズム演劇の創造と普及にたづさわる多くの人びとと共に、正しくうけつぎ、発展させて行かなければならない日本の民主的な新劇運動の基本的な課題の存在を明らかにしていると思うのです。

社会主義リアリズムを政治的演劇というようにせまくとらえている人があるようです。しかし、トムさんの実践して来られた社会主義リアリズムは、そんなせまいものでなく、社会発展の歴史的方向を科学的社会主義の理論で認識し、その上にたって、よりリアリスティックに、芸術表現をするということなのです。

芸術的な燃焼度の問題で、作品の優劣はきまります。しかし、その基本になる現実の認識の問題では、東西リ演に加盟する方たちと私たちでは誤差はないと考えています。トムさんがおられなくなって三ケ月、私たちはまづ、トムさんのリアリズムを、自分たちの体で舞台にのせて行くことになりました。

しかし、このことは　何度もくり返しますが、私たち東京芸術座の大きな課題ですが、私たちだけのものでなく、リアリズム演劇にたづさわる多くの人たちと一緒に追求して行く永遠の課題であると思うのです。今後新劇史の再評価、再点検をふくめて、舞台実践の相互交流と相互点検の中で深めて行きたいと思います。

もう一つは、この創造方法をつらぬくために、劇団という組織形体をとることの必要を、長い体験の中でトムさんは強調しています。創造論、劇団論、観客論と、トムさんの思いは、あらゆる機会に展開されています。

現在の私たちをとりかこむ、社会状勢、その中での演劇環境も複雑で多様的です。その中で私たちの舞台は　今日も上演をつづけているのですから、常に原則を確認しながら、劇団活動の毎日を大切にして行くことになります。劇団内外の諸課題を一つづつ、ていねいに解決しながら、私たちはトムさんの一生をつらぬかれたリアリズム演劇の道を歩みつづけて行きたいと決意しています。

◇　◇

私の報告

考えさせられたこと

森　賢　郎
（劇団四日市市民劇場）

劇団やまなみ（甲府）公演
東リ演中部ブロック交流会
劇団すがお　ケイ古場竣功祝

六月三日（金）夜、甲府県民会館小ホールで、劇団やまなみ第八十七回公演を観劇。

演劇会議三十五号の劇団通信には、〝また逢う日まで〟を、小谷道雄が手を加えている旨、報告されていましたが、タイトルを〝愛よいそげ〟と変更、全面的に改稿されて上演。併演は、〝鴆〟でした。

〝愛よいそげ〟は、前もって脚本を読んで出かけたのですが、再脚色のむつかしさを思いました。特に水木洋子脚色とくらべ、あまり遜色なく、まとまっていると思ったのですが、舞台に出て来た所では、脚本の舌足らずが目につきました。

まず、背景にある、きびしい戦争下の日本の状況が稀薄、結城真一と水沢理恵の、十代の若者の清純な愛、これが主題ですが、真一の兄、真介陸軍中尉が役柄をつかめ切れていない。当時の現役あがりの将校が、体でとらえられていない。現代の平凡な若者が、軍服に身を包んでいるという感じ。第一場で、この兄との対決があるだけに、当時の若者たちの置かれている立場を、明確にし得たなら、ドラマの進展に、もっと素直に、ついてゆけたと思いました。

効果が、かなり劇の雰囲気をこわしていた。警報のサイレンも、飛行機の音も、特にB二九の爆音は、劇の進行に、大きく影響するだけに、もっと慎重に流して欲しかった。これは修正できそうなので、翌四日の昼、夜公演では、手直しされただろうと思います。

理恵の母（未亡人）と、片手のない中年男との道ならぬ恋についての場面を挿入したのは、戦時下、壮年男は戦場へ、家庭の女性は工場へ、そうした中より、否応なく、こうしたみにくい愛が発生。それに対し、若い二人の純情な愛との対比を、現わそうとしたのだろうけど、舞台にのった所では、何故、この場面が必要だったのだろう？　劇の進展にマイナスとなっていました。

理恵を演じた乙黒早苗さんの、懸命な熱演は印象深く、この熱演も彼女ひとりの独演となって、キャスト間のかみ合わせがなく、残念でした。

映画（今井正監督）で有名になった、ガラス窓ごしのキスシーンも、その前に、舞台上で、烈しいラヴシーンを演じてしまったあとだけに、何とも、しらじらしいものに終って

いました。

トップの戦争下を示す状況スライドの写真内容も、白黒とカラーの混同で、余り意味のないものになっており、ラストの理恵の死を暗示する幕切れも、照明のみ無人の舞台を駆け、効果とのタイミングも合わず、背中を手でかくようなもどかしさを覚えました。

が、〝鳩〟については、同じ劇団で、どうして、こうもちがった舞台が、出来あがるのかと驚きました。

河野司君のナレーターが、客を自然に劇の中へ、ひきこんでくれる。高遠先生の梅津さんは、全くそつなく、男親の感情を流麗に表現してゆく、梅津さんは、根っから役者が好きな人だと、今更ながら見直しました。

そして、湯沢麻の山岸英子さんが、実に良い。〝河〟での春子役が、記憶に新しいが、格別の進歩がみられる。三年前、東リ演札幌ゼミナールの最中、夫君、笹本さんが、くも膜下出血で亡くなられた。一粒種が三才。劇団員の励ましの中で、すばらしいキャストに成長され、胸をつかれました。

さて、ここで考えさせられた事は、梅津さんが、演出兼主役でまとめた〝鳩〟、八十七回という公演数からみて、長い歴史のある劇団が、何故、梅津さんを役者なら、役者に限定できなかったのか？　一つの作品が、まとまり弱く、他が比較にならぬ創造充実で、アンバランスな舞台もって、本公演とは、どうも納得がゆきかねます。

〝愛よいそげ〟のケイ古過程と〝鳩〟とのケイ古関連が、どうあったか、二本立公演の場合、劇団全体の創造姿勢が、その二本に、むらなく結集できたのか、どうか。これが、問題じゃないのかなと思いました。

翌四日　早朝出発。四日市へ午後三時着。御在所岳を中心に、鈴鹿セブンマウンテンを構成しますが、その一つ、釈迦ケ岳の山麓、尾高高原キャンプ場内で、東リ演中部ブロック交流会が持たれました。

昨年は、岡崎演集の骨折りで、岡崎市内で持たれ、上野市民劇場のモデル上演〝吉四六さん〟が好評でした。今年は、その岡崎は、公演一週間前で欠席、名古屋のつむぎ座も欠席、岐阜のはぐるま、名古屋演集、劇団名古屋、名芸、劇団すがお、上野市民劇場と四日市の七劇団二予供合わせて六十名。モデル上演は四日市の〝人を食った話〟。

栗木英章さんの司会で合評会。若尾正也さんの評。「言葉の行動がつかまれていない。余りにも日常会話的で起伏がない言葉、もっと客にタッチもって聞かせるセリフにすべき、笑いの上に乗っかかる芝居にすべきだ」

この作品は、上演された所が多いだけに、あけすけな批評が出てくる。

「役者が、もっと、もっとやりまくる芝居にすべきで、遠慮した舞台になっている」はぐるまの山口さんの評。

「かねが、隅の方にいるけど、もっと正面に出てくる演技も必要、単調に流れすぎる」演集の丸子さん。

演出が私なので、どうも書き辛いが、検事役の桜井は、ケイ古中に一度も表現しないアクションをやった。それをやった理由は、余り笑ってくれないので、笑わせようと思ってやったという。そこで一同大笑い。

実は、この日、近くに住む人より「森さん、私も観に行ってよいかね」と問われ、ちょっと迷ったが、時間と場所は教えた。結局、余り来て欲しくないような私の姿勢を察して、その人は来なかったが、反省するに、やはり、一般の人にも来てもらった方が良かった。この種のモデル上演を、全くの親類筋ばかりの前で、あらかじめ、きびしく合評されるであろうことを予測して上演することは、何ともどうも。まあ、新しい仲間には、充分、勉強になるだろうけれど……。

合評会も、あとに控える楽しい交流会への気兼ねから、足らない部分は、そちらへもということで、九時四十五分から、午前一時三十分まで、四班に分けて、名物行事が始まりました。

四日市には、打ち上げに、歌い、踊るという、良い風習があります。十二時すぎてから、それが始まった。音頭とりが、検事の桜井、書記を演じた林とあって、そのハッスルぶりに、丸子さんは、あれが舞台に欲しかったと。

翌五日、朝十時より近くの小学校校庭での運動会も、この御両人が大奮斗。そして丸子さん。舞台よりも、この方が、はるかに素晴らしいと。私は、役者の個性を、どうひきずり出したらいいか。ひっぱり出すには、どういう演出手段が必要か。ケイ古過程では、役者の個性を殺していたのではないかと、しきりに考えました。

夏近しを思う本格的な暑気の中、前夜の疲れを見せる人なく、珍ゲームを楽しみました。

そして、一週間後の六月十二日（日）、桑名の劇団すがおの、ケイ古場完成を祝う、柿おとしが行なわれました。

敷地面積三七〇平方米、建築面積（一部、中二階）八十二平方米、総工費六四〇万円。

梅雨の最中と言うのに、終日、晴天と恵まれ、予定通り、一二〇名の来客を得て、午後一時開会。県外劇団では、演集の若尾さん、はぐるまの藤沢さん、三島さんの三人。

一応の式次第が終って、第二次会は、県内劇団の上野市民劇場、津演と四日市の仲間が、やっと自分の城を持った（三重県では始めて）劇団すがおの仲間たちを励ます形となり、年長の私が音頭とりで、大いに喜びをわかちあいました。

運営委員長の加藤武夫が二回泣き、私が一回、泣きました。それは、会の冒頭に、設計者、施工業者感謝状、記念品を手交し、そのあと、この十五年間、気持よく、ケイ古場に利用させて頂いた、市内の養泉寺の住職の奥さんへの感謝状を朗読中、加藤武夫は、何回となく、言葉をつまらせました。

次は、親類筋ばかりの中で、歌い踊った二次会のラストのあいさつで泣いたのです。

劇団の創設者であり、劇団の牽引者であり、劇作家としての素材も抜群の、後藤和義君が、ここ二年間余り、活動より遠のいており、永年、女房役であった加藤武夫が、やむなく牽引者をつとめ、若い仲間を励まし、この大偉業をやってのけた。立派になしとげたと申すべきでしょう。

後藤君からは、「器は出来た。これからは中味が問題だ」という意味の祝電が届いていました。

しかし、この晴れの日にも、出席しないということは、もう劇団を、完全に見捨てたと解すべきでしょうか？　誠に口惜しい、残念なことです。

劇団結成の時期は、四日市とともほぼ同じ、距離的にも、桑名、四日市は、電車で十分。これまで十五年間の相互交流は、とても緊密でした。特に、七〇年の安保廃棄演劇行動「ぜんそくの街から」に、県内五劇団が結集し得たのも、後藤君の馬力、それを支えた、劇団すがおの力量に負う所大でした。

ともあれ、その後藤君が、本来なら、今日一番の主役であったのに。今や、彼を知らない若い仲間が加わっています。

私はそれを思い、加藤武夫のなみなみたら

ぬ労苦を思うとき、終りのあいさつの中で、一しょに泣きました。

そして、この涙は、これから、より深く、強く結びついた仲間劇団として、連帯の実をあげようという決意に高まりました。

他の人たちの名前は、省きますが、ここ、数年来の特長として、劇団の創設者、功労者、指導層の古い仲間の脱落が、目立ちすぎます。

新しい仲間の定着を課題にした分科会は、何回となく持たれましたが、古い仲間が、劇団を離れてゆくことに対し、私たちは、どう対処してゆくべきでしょう。古い仲間が、胸はって、劇団に居場所を保つには、どうしたら良いかという、分科会が設けられても良いのじゃないだろうか。

上野の杉森正美君は、きびしい。「そんなことは、別に問題にする事じゃない。劇団を永年、支えて来た人は、問題意識が、何もかも判っているんだ。新しい仲間は、判らない事が多いから学び合うことが大切だ。古い仲間が、どう話し合っても戻って来ないのは、その仲間自身の問題で放っておけばいい」。

私も判らんでもないが、じゃ、やまなみの梅津さんは〝愛よ、いそげ〟の作者兼演出の小谷さんに遠慮していたのではないだろうか？　劇団としての創造レベルの向上統一は重要な問題であり、こういう姿勢が、もしあったなら、古い仲間に対して悪影響があるのじゃないだろうか？（これは、考えすぎかな……）

私自身のことですが、まずい脚本ながら、始めての創作劇「戦中派」公演で、十五周年を形づけました。そして、いま、やっと、四日市の若い仲間たちとの連帯の気持を、しみじみ、味わい得ました。この十五年間、これ程の想いをした事はありません。

しかし、若い仲間の成長は、急ピッチです。私自身、いつも生き生きと劇団にいられるためには、休みない勉強、努力が大切と思うようになりました。

「未踏」の機関紙に立川雄三さんと萩坂編集長の対談が載っていました。「劇団の指導部門の創造能力が枯渇した所は、みじめである……」旨のこと、深く心に残っています。

「我が私に、劇団旗を」ふと、口について出た言葉です。

○

○

つねに
働らく人たちとともに
歩んだ作者の，劇団の
苦節二十年をここに

こばやしひろし　作品集2

劇団はぐるま創立20周年記念出版

収録作品　「書けない黒板」「つくられた英雄」「櫨の木」「豚」「ひしめきあう不毛の季節から」

装幀／板坂晋治　頒価　1700円　　残部僅少

○発　行／演劇会議発行所
○申込先／演劇会議発行所　川崎市川崎区渡田4-11-3萩坂方　TEL（044）333-0775
劇団はぐるま　岐阜市西野1丁目　TEL（0582）65-1852振替名古屋4525

劇評

劇団未来十五周年の「どん底」

藤沢　薫
（劇団京芸）

劇団未来は十五周年を迎えた。創立の第一回公演に座付作者による和田澄子の「差別」を上演して以来、ずっと働く者の視点からまともに現実をとらえた作品を一貫して上演して来た。五周年は「金魚修羅記」（黒沢参吉作）、十周年は「明けない夜はない」（和田澄子作）であり、いづれも職場の原体験を基礎にした個性的濃度をもったいい舞台であった。特に最近の「コンベア野郎に夜はない」（大橋喜一作）と「謀殺―下山事件」（矢田喜美雄作）の出来ばえはすばらしく評価が高かった。

その「未来」が「どん底」を上演するという、これは本年上半期の関西劇界のニュースであった。開演前、演出の森本氏を訪ねて上演に至るいきさつを聞いて見た。「どうして〝どん底〟を」、この私の聞き方には「どうして創作劇をやり続けて来た劇団未来が、十五周年に、どん底をやるんですか、なにか特別の訳でもあるんですか」というニュアンスがこめられていた。森本氏からは、やや憮然として「やりたいからです」という至極当然の答えが返って来た。成程そう云われれば一言もない、十五年の歴史をもった劇団が、世界的名作である「どん底」をやることに、なんの不思議もない筈である。私は興味半分で聞いた自分を恥じた。その一言になにも特別に考えていない。今迄どうりのやり方でやるだけだという決然たる意志がこめられており、なんのてらいもびびりもなかったこれ以上聞く必要はないと思ったあとは舞台を観ればいい。

パンフには「今、老化現象や生活の重みの上にマンネリ化がしのびよっているという現象を演劇のもつ魅力について、もう一度考え直してみることで十五年目の危機を乗りきりたいと考えた」とある。

聞けば、今回の「どん底」上演には相当の準備がなされたようである。稽古にかかる一年半前から脚本の研究会をもち、昨年暮には「どん底」の状況と似かよったチェホフの「街道筋」の稽古場公演をやっている。はたして、ウオーミングアップともいえるこの稽古では、初めての洋ものという意識から脱し切れず大変苦労したが、「どん底」では殆んど抵抗はなかったということだから、このプランは有効であったようだ。

前置が長くなった、さて本番である。

教会の鐘を思わせるチェンバロの音の中で幕を開く――例の牢獄を思わせる木賃宿であるが、そこには、はげ落ちた壁も、ボロをつり下げた二段ベッドも、昨夜の飲楽の残骸もない、正面の黒っぽい地獄張の壁、その前に傾斜のある二重（寝床やバクチ場になる）、二重の上手端に、奥の高いところから客席に向って真すぐに下りて来る階段、下手に簡単

な暖炉があるだけの実に簡潔な舞台だ。（三幕の戸外もこれと殆んど変わらない）もっともこの種の舞台は一度俳優座でお目にかかっているが、実感とリアルが魅力である未来の演技陣がこの舞台をどう活用するかは大いに興味のあるところである。

芝居は一回の休憩をはさんで、終幕まで急テンポで進んだ。これは帝政末期のロシアではなく閉塞状態にある今日の日本の現実ですという演出の言葉を聞いたが、翻訳ものとか名作という装いはみじんも感じさせない素直な舞台であった。時としてサーチンやブーブノフやクレシチーが実に身近かな人物として実感される気安さをもっていた。終幕に至ってそれは更につのり、完全に観客と密着した状態をつくりだした。例の有名なサーチン（植田耕作）の長セリフ、「――にんげん……警きが堂々としてらあ――」という條りも、しばしば観客の笑いをさそい、無理なく胸におちて来た。男爵（平尾光秋）がナースチャにからかわれて追いまわすところも共感の笑いがあった。こんな経験ははじめてであり、その意味では、正に日本的現実を役が体現しているという点で、今までどこにも見られなかった舞台をつくりだすことに成功したと云えるだろう。

だが思い切って云うと、あの共感に甘さがなかったかという疑問が残る、さまざまな苛酷な人生体験を経て来てこの宿に流れついた住人たちが、逃げ場のない「どん底」の世界から必死に脱出口を見つけようとあがいた結果、かりそめの救いをふりまいたルカが去った時に見た認識であったのか、ということである。一幕から三幕への展開の中で、ルカ（波田久夫）が住人たちに救いの道をといてまわるところは、演技も直裁で説得力があり明確な線で貫ぬかれていた。そのルカの「嘘の安息」を、サーチンが「嘘――それは奴隷と支配者の宗教だ」と云って「真実」と対置する――この論理がまことに明快で、だからこそあれだけの共感を得たのだろう。だが逃げ場を求めてあがいた人物たちの印象がもう一つ薄いのだ、だから最後の役者の自殺が重い終止符となりにくい。

脱出への渇望が弱かったのか、そうではない、むしろ、それはびんびん客席に響いて来た。いかに情緒に流れない創りようがあったといえ、なぜに坦々とした印象があったのか、考えて見れば、脱出を願うあきらめの現実、やりきれない閉塞の状況、そのリアリティと論理がいま一つ希薄だったのではなかろうか。時々脱出する必要のない情熱をもった人間を見てしまうのだ。

苛酷な現実をさらけ出す、どきりとする場面は、いくつもあった。例えば二幕で、ワシリーサ（竹内順子）――彼女はよく役の真髄に迫ろうとしていた――が、ペーペル（斉藤周介）を誘惑する場では、中央二重上に横たわった死期も間近なアンナ（鍛節子）のすぐ傍に寝そべって、太股もあらわに挑発するところとか、三幕で、普通は建物の陰で殺させるコストイリョフ（野木栄）を舞台中央で殺ろし、ごろりと観客の前面にころがして、否応なくあの事件にお客を巻きこんだりした。それはあったのだが、アル中の役者（則清泰男）がルカに病気を治す町の話を聞くところ、またペーペルが神の存在を問いただすところなどが、ここから脱け出したいという事情がのみこめないから、どうしても上っすべりしてしまう。ナターシャ（綿野香菜子）も新人らしい素直な演技で好感はあったが、ペーペルが救い出すのが不自然に思える程健康な生気のある女なのだ。クレーシチ（野田和之）も体ごとぶつかる迫力はあったが、うっ屈したものが足りないから三幕の絶叫が利かない、アンナも苦しみを演じすぎて、ただ生きているだけの哀れさが見えない。小説の恋物語を信じこもうとするナースチャ（金沢百合子）も演技が見えてしまって、じかに彼女の切なる心がひびいてこない。

ワシリーサ（竹内順子）ペーペル（斎藤周介）
ナターシャ（綿野香菜子）

「コンベアー」なんかで、ひしひし伝わって来る現実感に接しているだけに、こんな不満を並べたくなってくる。

とにかく、十五周年にいよいよ未来も「どん底」か、というような変な興味を、見事にくつがえす真摯な舞台であった。職場の原体験をどう創造的にふくらませるかという新らたな課題への第一歩を踏みだした劇団未来に、芝居をやる仲間として心から拍手をおくりたい。

○　○

「どん底」劇評他誌散見

（テアトロ8月号　中西武夫）

こんどの「どん底」では重苦しさがない。ふしぎに解放感のある舞台だった。何よりも（にんげん）礼讃のうたが生きていたこと、完璧なタブロオを気にせず自由な生々とした森本演出を私は評価した。ただ帝政末期のロシアの雰囲気は感じることがすくなかった。ひたすら人間を追って描いた「どん底」だった。

〈抜萃〉

「創造」一一四〇号　編集部

〈要旨〉

大きな舞台的成果を生み、大阪新劇界にひとすじの展望をひらく。ロシアの「どん底」をやろうとしたのではなく新劇の伝統にたち、リアリズム演劇のなかの魅力・面白さへの確信にみちた演出者及び劇団の表現。

個々の演技では第四幕のサーチンの植田耕作が観客が魅了し、野田和之の錠前屋のユニークな面白さ。野木栄の木賃宿の主人、キャラクターをとらえて見事。竹内順子のワシリーサもよくそのイメージチェンジには目を見はる。金沢百合子のナースチャは安定感があり、西尾臣示の帽子屋ブーブノフは抑制の効いた演技がよく、ルカを演じた波田久夫の演技力はさすが全体の牽引者としての役割をしている。

（見出しは「身近さ、わかりやすさで魅力ある舞台に成功」とある。）

観劇雑感

――京浜・未来・埼芸――

萩坂桃彦

世仁下乃一座の「明治曙屋台囃子」（岡安伸治作）を見そこなった。本にはかなり適当なところがあるが、屋台囃子そのものには身を入れて見せるだろうことはまちがいないので、もし見ていれば、前作「賽の河原の舟遊び」についてまたひとつこの集団への認識をふかめるところであったが、惜しいことをした。作者の岡安伸治君はどこか忍者のポーズがあって一寸ぼくには正体捉えたいが、この二作で見る限り、そんなに判りにくくはない。ただ彼のしごとは全く本の上ではわからない。三味や太鼓、下座音楽などをとり入れて見せるなど中々意表をつくのでそれが楽しみな向きもあるようである。岡安君はどうやら彼なりの「民衆哀史」といったものを綴ろうとしているようだ。

劇団やまなみの「愛よいそげ」（小谷道雄作）はロマン・ロランの「ピエールとリュース」からの脚色、有名な「また逢う日まで」（水木洋子）の再脚色で、劇団の実情にそくした苦心なども見え、ひきしまった構成を得ているが、やはり、こういう戦争をまともに描いたものは、いまの若い人たちの舞台ではむつかしいことのように思った。今井正の傑作「また逢う日まで」の再現は到底無理であろう。その無理なところを見たいと思ったが、これも果せなかった。幸い、四日市の森賢郎氏が見てくれて本号にその感想が載り、一応の推測を得た。

近いのに湘南アートシアターも行けなかった。再演の「橋」「鳩」の練り上りには期待していたのだが逸した。未踏の「朴達の裁判」再演も一日きりのその日がどうにも都合つかず、これはいつまでも悔がのこった。

見た芝居を書かねばならない。

さいきん、稽古場公演スタジオ公演といったことが急速にふえてきた中で、その意味をたづねる上でも、こんどの**京浜**の「**カルラールのおかみさんの鉄**」は注目していいと思った。

この本は、かつて他の劇団で、テーマを「選択・意志決定」（土壇場でカルラールのおかみさんはなにをえらんだか）において、わざわざサラリーマンの日常生活の一場面を添えたりして、日本のいまの観客にどうかかわらせるかという苦心をした舞台を見たことがあるが、それはそれとして判るけれどやはり、京浜の正攻法がぴったり来た感じだった。これは当然ぼくの理解力と関係があるだろう。「夜うつ太鼓」の強烈なリアリズムの魅力から抜け切れぬまま、やっと「第三帝国の恐怖と貧困」に行きついた位のところが、ぼくのブレヒトの解り方だ。それ故、あれこれの解釈を越えて、戯曲そのものに肉迫した京浜の作業に共感したのである。

作品の持つ密度に助けられ、会場が小さいということもあって、もともと京浜の俳優に出がちだったセリフ云いのオーバーなトーンが影をひそめて、初めて中沢研郎（労働者ペードロ）室野定子（テレーサ・カルラール）

に年輪に相応しい、目のつんだしばいが出たという感じだった。

室野定子は「コーカサスの白墨の輪」のグルシェ以来、実にのびのびとして来ている。役を心でとらえ、それをセリフで奏でるというほどのものだが、こんどのテレーサ・カルラールも一気に仕終うせている。

山口あきお（神父）岡部豊（息子ホセ）などへの追い込みもきいており、会葬の女たちの処理もうまい。

もう一つ感心したのは、あの稽古場・容れ物の活用の上手さである。本来舞台となるべきところを客席にして、僅かに見下ろす感じになる。さすがにホリゾントは作れないので窓からのぞける夜景（海の漁火）とまではいかないが、室内はかなり手堅く組まれた。練ったパンが窯に入れられて焼けて出てくるというのなのども溶け込んでいて、とかく省略しがちな、最近の、むしろ装置なしの流行の中で、この姿もぼくにはうれしかった。

演出（細田寿郎）がこれをはげしい反ファッシズムの思想でとらえたのは、当然とはいえ正しかったようである。

ただそれを湿めらずに乾いた感じで出そうということでは別のむつかしさも出てくる。たのしさをどこで見つけるかなどもその一つだ。緊迫したセリフと動きの中での僅かな起伏、テレサ・カルラールが時に、ただのおかみさんに見えるということなどもあっていいし、神父なども観客から、微かな笑いの対象になっていいだろう。

そういうこともあるが稽古場公演を中心として地域の住民と結びつきたいとする場合のブレヒトのむつかしさ（むしろブレヒト活用のむつかしさと云うべきか）それがやりがいのある仕事として考えられたことにぼくは共感する。親しい近所の人々であるが故に最も良質なものを提供すべきだからである。民話劇やこども劇の場合とはちがった意味でこれを云いたいし、こんどの京浜の仕事には敬意を表すると当夜打ち上げ会でも、ぼくは云った。この上演が、さいきんのスペインの長い独裁政治の終焉のことなどとかからめて観客と語り合われたら成功と云えただろう。

大阪・劇団**未来**の「**どん底**」は、この名作を、生身につき刺さるものとしていかに、現代に息づかせるかに挑戦して、見事、壮絶な討死をとげた、という風にとらえるとおもしろい。その敗れ方もまた「未来」らしく、どこかさわやかである。

小山内、村山、岸田、モスクワ芸術座といろいろの「どん底」はあるけれど、基本的に装置だけは変らなかった。これは当然であって、ゴリキイの書きこんだ克明なトガキに従えば、ああならざるをえない。十九世紀、帝制ロシア下の下層民の生活、それも木賃宿の地下室は「どん底」のシンボルである。

俳優座の増見演出の示唆などもあったらしいが、未来の森本演出はこれをガラリと変えた。（古き「どん底」に別れをつげるにはこれしかないと森本氏は云った）

従来、シモテ暖炉の壁添いにきまっていた病人のアンナを中央に据え、ややカミ手よりに舞台を真ッ二つに切るようにして大きな白木造りの階段がせりだした。娼子屋が片隅に追いやられ、ベーベルが階段の下にもぐりこんだ。

たしかに「どん底」は生活写実劇というよりも遙かに哲学的であって、このような装置の変改も可能に見えぬことはない。

長い暗い印象の因襲をふりすてて、あからさまに一人一人の人物に照射をこころみたのが未来の舞台だった。

しかし人物のデッサンにとくに新手があっ

たわけではない。むしろ実に本格的であって、ただちがうのは未来の役者には既成のイメージがないために、いかにも素手で立向った鮮烈さが出たことである。（もっともこの云い方のなかにはルカーシ波田久夫を別にする必要があるが）。これは不思議な効用だった。決闘にも似た気概からは、緊張が生れ、一定のテンポが出る。俳優がセリフに必死に縋る凄まじさがいかにもおもしろいのだ。

コストイリヨフ（野木栄）ワシリーサ（竹内順子）役者（則清泰男）プーブノフ（西尾恒示）などにぼくは喜んだが、とくにワシリーサなどは表わすよりも押し出た感じで、そこに稽古の厚味が見えたからであった。

未来は「どん底」を現代劇として衝撃的たらしめうる以前に登場人物の奏でるシンフォニイの壮大さに気づいたはずである。そしてやはり、そこで力尽きたのだ。未来の舞台が消えて、ゴリキイの「どん底」が残ったとしても延しいことではない。

劇団**埼芸**の「**日本の幽霊**」が間に合った。公演№27で創立十周年記念・八田元夫先生追悼をかかげる。埼芸と八田さんとの関係は埼芸の前身の一つといえる国鉄大宮の〝くろがね〟に遡るから二十五年ほどにもなる。埼芸は創立十周年だけれど、たとえば劇団の代表的俳優小島康男の芸歴はその倍以上だろうから、無邪気にはうけとれぬ。

埼芸は十年前、埼玉県南で活動していた四つの劇団、国鉄くろがね、市民劇団あゆみ、劇団広場、川口市民劇場が統一して発足したのである。旗上公演は同じこの小山祐士作「日本の幽霊」であった。

美しい瀬戸内の島のひとつに東京造兵廠破浜兵器製作所が出現した。昭和2年。貧しい島々の漁民たちは当初は働き口の出来たことを喜こぶが、それが極秘理一毒ガス」を製造していると判り、恐怖におののく。事実被害も出る。太平洋戦争さ中には小学校を卒業したばかりのこどもたちまでが狩り出された。

この島の恐怖を呪うごとく象徴的に、知能おくれの高崎こずえが歌い遊ぶ。〈ゆうれいのうた〉。このこずえ（猪野真理子）が出色の出来である。幼女期から敗戦後のアメリカ兵相手の女への変貌など心憎いほどだ。

島の荒廃と島びとの不幸に心を痛め、静かな抵抗をつづける須波家老隠居あやめ（水村照江）も良い。聞いてみると、主要な役で十年前の初演と同じ役がこのあやめをふくめて四人いた。須波家の当主東一（小島康男）、東京から追われ（夫が思想犯）落ちのびてくる看護婦の井上兼子（永井洋子）、毒ガスのために波瀾の生涯をとじる漁師上りの運造（渋沢洋俊）。このことは埼芸の舞台に奥行のあることとつながるのである。

初演と同じと云えば演出（塚田恒夫）もそうであって、いまや或る種の風格を見せつつある。

芝居づくりの息の長さ、丁寧さ、毎回必ずと云っていいほどのびのびと好い役者を見せてくれるうま味。（こんどの春子の立花由紀などもいい例だ）これには感心するが、作品処理にはいささか強引さのあることも否み切れない。

小山祐士独得の世界、美しい会話、景ごとに登場人物の誰かが欠けてゆくあの冷徹なリアリズムと行情味をふくんだ岡田和夫の音楽がうまく合って演出を補強するのであるが、逆に演出が時々ハジくのである。たしかにこのへんはむつかしい問題だ。二回ほど使用した各幕切れのストップモーションなど、ぼくにはひっかかる。

（了）

ベルトルト・ブレヒト 作
野村 修 訳

亡命者の対話（抄）

構成 宮城クメコ

1（I）旅券について　秩序への愛について

戦争の女神がヨーロッパをなかば食いつくしていた。しかし彼女はまだ若くみずみずしくて、何とかもうひとときびしてアメリカへ跳び移れないものかと思案していた。その頃ヘルシングフォルスの駅のレストランで、二人の男が時々注意ぶかく周囲をうかがいながら政治について話しあっていた。ひとりは背が高く肉づきがよく、白い手をしていた。もう一人はずんぐりした体つきで金属労働者の手をしていた。大柄な男の方がジョッキを手にとり、高くさしあげて仔細にビールを眺めた。

大男　このビールは代用品だ。シガーも代用品だから釣合いはとれている。しかし旅券だけは本ものでないと入国が許可されないね。

小男　ひとりの人間の一ばん高貴な部分が旅券てわけだ。それに旅券をこさえるのは人間をこさえるのよりややこしい。人間はどんな所でもこさえられる。軽はずみにもこさえられるし、ろくな根拠がなくてもこさえられる。だが旅券はそうはゆかない。だから旅券はちゃんとしていれば認められるのに人間はちゃんとしていてもなかなか認めてもらえない。

大男　人間とは旅券をもって歩く機械だとも言えそうだね。人間は胸のポケットに旅券を入れているが、株券の束を入れた金庫のようなもので、それ自体に価値はないが価値有るものがしまってある。

小男　でも、ともかくある意味で人間は旅券にとって不可欠だ。むろん旅券こそ本体でこいつには脱帽せねばならないが、しかし旅券といえども人間が付属していなければ存

観劇雑感

――京浜・未来・埼芸――

萩坂桃彦

世仁下乃一座の「明治曙屋台囃子」（岡安伸治作）を見そこなった。本にはかなり適当なところがあるが、屋台囃子そのものには身を入れて見せるだろうことはまちがいないので、もし見ていれば、前作「賽の河原の舟遊び」についてまたひとつこの集団への認識をふかめるところであったが、惜しいことをした。作者の岡安伸治君はどこか忍者のポーズがあって一寸ぼくには正体捉えたいが、この二作で見る限り、そんなに判りにくくはない。ただ彼のしごとは全く本の上ではわからない。三味や太鼓、下座音楽などをとり入れて見せるなど中々意表をつくのでそれが楽しみな向きもあるようである。岡安君はどうやら彼なりの「民衆哀史」といったものを綴ろうとしているようだ。

劇団やまなみの「愛よいそげ」（小谷道雄作）はロマン・ロランの「ピエールとリュース」からの脚色、有名な「また逢う日まで」（水木洋子）の再脚色で、劇団の実情にそくした苦心なども見え、ひきしまった構成を得ているが、やはり、こういう戦争をまともに描いたものは、いまの若い人たちの舞台ではむつかしいことのように思った。今井正の傑作「また逢う日まで」の再現は到底無理であろう。その無理なところを見たいと思ったが、これも果せなかった。幸い、四日市の森賢郎氏が見てくれて本号にその感想が載り、一応の推測を得た。

近いのに湘南アートシアターも行けなかった。再演の「橋」「鳩」の練り上りには期待していたのだが逸した。未踏の「朴達の裁判」再演も一日きりのその日がどうにも都合つかず、これはいつまでも悔がのこった。

見た芝居を書かねばならない。

さいきん、稽古場公演スタジオ公演といったことが急速にふえてきた中で、その意味をたづねる上でも、こんどの**京浜**の「**カルラールのおかみさんの鉄**」は注目していいと思った。

この本は、かつて他の劇団で、テーマを「選択・意志決定」（土壇場でカルラールのおかみさんはなにをえらんだか）において、わざわざサラリーマンの日常生活の一場面を添えたりして、日本のいまの観客にどうかかわらせるかという苦心をした舞台を見たことがあるが、それはそれとして判るけれどやはり、京浜の正攻法がぴったり来た感じだった。これは当然ぼくの理解力と関係があるだろう。「夜うつ太鼓」の強烈なリアリズムの魅力から抜け切れぬまま、やっと「第三帝国の恐怖と貧困」に行きついた位のところが、ぼくのブレヒトの解り方だ。それ故、あれこれの解釈を越えて、戯曲そのものに肉迫した京浜の作業に共感したのである。

作品の持つ密度に助けられ、会場が小さいということもあって、もともと京浜の俳優に出がちだったセリフ云いのオーバーなトーンが影をひそめて、初めて中沢研郎（労働者ペードロ）室野定子（テレーサ・カルラール）

に年輪に相応しい、目のつんだしばいが出たという感じだった。

室野定子は「コーカサスの白墨の輪」のグルシエ以来、実にのびのびとして来ている。役を心でとらえ、それをセリフで奏でるというほどのものだが、こんどのテレーサ・カルラールも一気に仕終うせている。

山口あきお（神父）岡部豊（息子ホセ）などへの追い込みもきいており、会葬の女たちの処理もうまい。

もう一つ感心したのは、あの稽古場・容れ物の活用の上手さである。本来舞台となるべきところを客席にして、僅かに見下ろす感じになる。さすがにホリゾントは作れないので窓からのぞける夜景（海の漁火）とまではいかないが、室内はかなり手堅く組まれた。練ったパンが窯に入れられて焼けて出てくるというのなのども溶け込んでいて、とかく省略しがちな、最近の、むしろ装置なしの流行の中で、この姿もぼくにはうれしかった。

演出（細田寿郎）がこれをはげしい反ファッシズムの思想でとらえたのは、当然とはいえ正しかったようである。

ただそれを湿めらずに乾いた感じで出そうということでは別のむつかしさも出てくる。たのしさをどこで見つけるかなどもその一つだ。緊迫したセリフと動きの中での僅かな起伏、テレサ・カルラールが時に、ただのおかみさんに見えるということなどもあっていいし、神父なども観客から、微かな笑いの対象になっていいだろう。

そういうこともあるが稽古場公演を中心として地域の住民と結びつきたいとする場合のブレヒトのむつかしさ（むしろブレヒト活用のむつかしさと云うべきか）それがやりがいのある仕事として考えられたことにぼくは共感する。親しい近所の人々であるが故に最も良質なものを提供すべきだからである。民話劇やこども劇の場合とはちがった意味でこれを云いたいし、こんどの京浜の仕事には敬意を表すると当夜打ち上げ会でも、ぼくは云った。この上演が、さいきんのスペインの長い独裁政治の終焉のことなどとからめて観客と語り合われたら成功と云えただろう。

大阪・劇団**未来**の「**どん底**」は、この名作を、生身につき刺さるものとしていかに、現代に息づかせるかに挑戦して、見事、壮絶な討死をとげた、という風にとらえるとおもしろい。その敗れ方もまた「未来」らしく、どこかさわやかである。

小山内、村山、岸田、モスクワ芸術座といろいろの「どん底」はあるけれど、基本的に装置だけは変らなかった。これは当然であって、ゴリキイの書きこんだ克明なトガキに従えば、ああならざるをえない。十九世紀、帝制ロシア下の下層民の生活、それも木賃宿の地下室は「どん底」のシンボルである。

俳優座の増見演出の示唆などもあったらしいが、未来の森本演出はこれをガラリと変えた。（古き「どん底」に別れをつげるにはこれしかないと森本氏は云った）

従来、シモテ暖炉の壁添いにきまっていた病人のアンナを中央に据え、ややカミ手よりに舞台を真ッ二つに切るようにして大きな白木造りの階段がせりだした。帽子屋が片隅に追いやられ、ペーペルが階段の下にもぐりこんだ。

たしかに「どん底」は生活写実劇というよりも遙かに哲学的であって、このような装置の変改も可能に見えぬことはない。

長い暗い印象の因襲をふりすてて、あからさまに一人一人の人物に照射をこころみたのが未来の舞台だった。

しかし人物のデッサンにとくに新手があっ

在しえない。少くとも完全とはいえない。旅券はいわば外科医で患者がいなければまるっきり腕のみせようがない。現代国家にも同じような現象がある。つまり本体は指導者ないし独裁者なのだが、奴らにしろ指導すべき相手を必要とする。奴らは偉大だが奴らの偉大さを保証する誰かが必要で、それが無けりや何もはじまらない。ただ不思議なのは頭数をかぞえて記録することが、まさにいま、じつに重大視されていることだ。一人でも抜けおちやしないか、といった構えだね。他のことはさておいても誰かが誰かであってほかの誰かじゃないということは、正確に知っておかずにはいられない。誰を飢えさせるかについてあだやおろそかに考えていないようだね。

太った男は立ちあがり会釈して、僕は**ツィフェル**といい、物理学者だと言った。小男は同じく立ちあがるべきか迷っているふうに見えたが結局腰をおろしたまま「僕は**カレ**と呼んでもらえばいい」とぼそぼそ言った。太った男は腰をおろしてすぐ火が消えてしまうシガーをいらだたしげに一服してからまた話しだした。

ツィフェル　ここ数年、人間に対して実に深く顧慮が払われる。ことに新体制の国家ではね。昔と違って国家が顧慮を払う。ヨーロッパのいくつかの地点に出現した大人物ともは人間に対して大きな関心を払っている。いくら払っても払いきれないわけだ。人間を大量に必要とするんだから。戦争になってやっとその意味がはっきりした。消耗がはげしいから大群が必要なんだ。しかし、旅券があるのは主として秩序の維持のためだね。こういう時代には秩序は絶対に不可欠だものな。たとえば君なり僕なりが誰だという証明書を持たずに歩きまわってる、としてみたまえ。僕らを追放しようにも僕らの居どころが判るまい。それじゃ秩序もくそもない。

カ　レ　僕がこれまでに知った中で最も秩序だった人間はシーフィンガーという奴だ。ダハウ収容所にいたSSの隊員でね。噂によると奴は奴の恋人に土曜でなければ、土曜も晩でなければまちがっても尻を振ることを許さなかったそうだ。二人でバーへ行っても、恋人がソーダ水の瓶の底を拭かないでテーブルにのせようものなら我慢がならない。奴は僕たちを革の鞭でひっぱたくときも同じように良心的にふるまった。鞭の痕が一ミリの狂いもないみごとな模様をえがいていった。奴には秩序の感覚が身につきすぎていた。無秩序に鞭を振るうくらいなら振らないほうがましだと奴は思っていたかもしれない。

ツィフェル　それは実に重要な点だ。古来の常識だが秩序がいちばん大量に見られる場所は刑務所か軍隊だ。一八七〇年の戦争が始まった時、フランスの一将軍は、軍は最後のボタンに至るまで準備ができております、とナポレオン三世に報告したそうだが、実際そう準備できてたらなかなかたいしたものさ。つまり最後のボタンが肝心なんだ。ボタンは全部揃ってなくちゃいけない。最後のボタンまで揃っていれば戦争に勝つ。つまりそれが秩序であってそれがあれば勝てる。実業界でも苦しい秩序がなくては収益はあげられないが、それでも軍隊におろる程には秩序は大きな役割りを演じてはいない。それに戦争で生ずるのは収益どころか欠損だけだ。実業界は戦争がボタンを重視する以上に貨幣を重視すると言えるかもしれないな。

カ　レ　戦争はボタンそのものを重視するわけじゃない。戦争ほど資材を濫費するものはない。湯水の如しだ。節約をむねとする戦争なんてみたためしがあるかい？節約は秩序

に反する。

ツィフェル　無論反するね。秩序とは計画的な濫費だ。投げ棄てられ破壊されるもの一切合財ノートされ番号を打たれること、それが秩序だ。しかし秩序が大事にされる第一の理由は教育的なものだよ。凡そきちんとやらなければやりようのない仕事というものがある。つまり無意味な仕事さ。囚人に穴を掘らせ埋めさせまた掘り返させることをいいかげんだらしなくやらせてみたまえ、囚人は気が違うか暴動を起すだろう。これに反してシャベルはここをこう握れ、一糎でも下を握ってはいかんとか、穴がまっすぐに掘れるように紐を張りわたしておけとかと囚人が督励される場合には、仕事は万事淀みなく遂行されうる。とはいえ今の時勢では賄賂を通じないことには殆んど人間性は維持できない。これも一種の秩序だろうがね。

カ　レ　誰かが言っていたことだが、臭気ふんぷんたるものも単に場違いな場に置かれた物質にすぎない。くそにしても植木鉢の中にあればそれはもうくそとは言えないのだ。根本において僕は秩序の味方だ。しかし、いつだったかチャーリー・チャップリンの映画をみたらチャップリンが衣類やら何やらをトランクに詰めこむ場面があった。投げこんで蓋をしめるとたくさんはみだしている。彼にはそれがいかにも無秩序すぎると見えたらしく、袖とかズボンの端とかはみだしたものを鋏で無造作にちょん切ってしまう。見ていて僕はあっけにとられた。どうやら君も秩序への愛てなものは高く買わないようだね。

ツィフェル　というよりだらしなさの絶大な効用を認めているのさ。だらしなさは無数の人間の生命を救ってきた。戦争のときなんかほんの少し命令を回避するだけでいのちが助かることがよくある。

カ　レ　その通りだ。僕の叔父はアルゴヌにいた。塹壕にいると電話でただちに撤退しろという命令がきた。だが兵士たちは命令をきかずにじゃがいもを平らげることが先決だと料理にかかった。その結果捕虜になって助かったよ。

ツィフェル　こんな飛行士の例もある。彼は疲れていたんで計器の目盛りを読み違え、爆弾は目標のアパートからはずれて五〇人の人が助かった。僕の考えでは秩序への愛といった徳性を育てるには人間はまだ未熟だよ。知性の発育が足りない。計画するものがバカげているから、計画をだらしなく無秩序に遂行することだけが人間をより大きな害悪から救うことができる。

僕の所にツァイジヒ君という実験助手がいた。何もかもきちんと片づけておきたがる男だったがなかなか思うようにいかなくていつも整理ばかりしていた。机は毎朝、ピカピカだ。ちょっとメモをのせておいてもすぐ屑籠に捨てられてしまう。だが彼はそれで懸命なんだから文句もいえない。このツァイジヒ君にも実験室外のプライベートな生活があろうとは僕には想像できなかったが、彼にも彼なりの私生活があった。つまりヒトラーが権力を握ったときこの男が一貫してナチの闘士だったことが判明したのさ。ヒトラーが首相になった朝、こう言ったよ——博士、ついにドイツに秩序が生まれますな。彼の言った通りになったね。

とくに秩序の支配が強い国には僕は住みたくない。きゅうくつだ。むろん僕らの国でのように濫費が秩序と呼ばれるときもあるが、それは前にも言ったように戦争のときくらいだ。しかしさし当ってそれは論外としよう。

カ　レ　何も正しい場所にないなら無秩序だ。正しい場所に何もないなら秩序だ。そういっていいだろう。

ツィフェル　こんにちでは大抵、中はからっぽな所に秩序がある。秩序は欠乏のあらわれだ。

小男はうなづいた。しかし彼は相手の最後のことばにこめられた一抹の真剣さを――この点にかんしてはきわめて敏感な男だったので――感じた、ないし感じたように思った。相手は彼を突っぱなしたのだ。彼はゆっくりコーヒーを飲みほした。それからまもなく二人は別れ、それぞれの場所をさして帰っていった。

2（Ⅳ）大詩人キヴィの記念像　貧乏人は道徳的に教育される　好色文学

ある天気のよい日にツィフェルとカレは話しながら少しばかり散歩した。二人は駅前の広場を横切ってある大きな座像の前に立ちどまった。男の座像だった。

ツィフェル　キヴィだ。この男の本は必読書になっているらしい。

カ　レ　立派な詩人だったそうだね。しかし餓死した。詩を書くことがやせることになったんだな。

ツィフェル　聞くところによると水準以上の詩人は餓死するというのがこの国の伝統なんだ。だがこの伝統は完全には守られていない――というのはアルコールのせいでくたばる詩人もいるらしいからね。

カ　レ　それにしてもなぜこいつを駅前におったてたんだろう？

ツィフェル　これを見て身のいましめにしろってわけだろう。連中は威すのが好きだもの。この彫刻家はユーモリストだな、夢みるような表情をあたえているぜ。パトロンがいなくてもメシが食える夢をみてるらしい。

カ　レ　つまり公衆に自分の意見を伝えた人間もいささかはいたってわけだ。

ツィフェル　うん、だが大低は詩のかたちであるいは別な遠まわしの形で伝えていたね。遠まわしで思いだしたが僕はどこかでこんな話を読んだ憶えがある。「隣りの男」という話だ。ある女が心底では軽蔑しながらパトロンと関係をもっていた。そしてその噂を恋人にきかれてしまった。その男をXとしよう。女は勿論Xの方が大事だ。そこで一計を案じ、例によってパトロン――Yと呼ぼう――とベッドを共にしたときにわざとXを隣りの部屋にこさせておき、こちらの物音がすっかりXの耳にはいるようにしておいた。Xには何もかも聞かせるが見せはしない、というのが女の計画だ。一方パトロンYがいくらか冷くなってきたのでYを挑発する必要もあった。そこで女は彼の前で靴下とめの位置を直して、彼に、つまりYに何もかもよく見せてやる。同時に女はしかし何かすげないことをYに言う。これは隣室のXによく聞こえる。こんなふうにことが運ぶ。女は男に抱きつき甘くような声で「手を離してよ！」といい、くるりとまわって男に尻を向け、絶え入りそうな声で「手込めにしようったってだめ！」といい、うつ伏せになって「げす！」と叫ぶ。Yは見るだけ、Xは聞くだけ、かくして女の品位はまもられたってわけだ。

これによく似たケースでキャバレーに出演していた詩人の話がある。その詩人は舞台に立つまえには中庭を歩きまわって靴を泥まみれにしておくのが例だった。つまり聴衆に、詩人は聴衆のまえに出るからといって靴を磨いたりなんぞするもんかというところを見せるためなのさ。

カ　レ　僕は考えたんだが、ずっと貧乏な地域に育った僕たちは君たちよりずっと道徳的に教育されてきたな。七才のとき僕は朝早く学校へ行く前に新聞を配達しなきゃならなかった。勤勉のモラルだ。もうけた金はおとなしく両親に渡した。服従のモラル。おやじは酔っぱらって帰ってくると、週給の半分を飲んしまったのが自分でも面白くないから僕らをさんざんひっぱたいた。それで忍耐のモラルが学べた。食わされるのはジャガイモばかりでそれもちょっぴりだが、食ったら「ゴチソーサマ」と言わねばならない。これは感謝のモラルのためだったらしいね。

ツィフェル　かくて君らからは山なすモラルが生みだされた。貧乏人ほど搾取される人間はいない。モラルまでが貧乏人から搾取される。しかし僕は、にもかかわらず貧乏人たちがまだまだモラルの修得に不足していたと確信するね。僕の小さい頃うちにいた女中は、よく働くし綺麗好きだしおよそ欠点がなかった。ことによく働くことといったら朝は六時に起きるし、めったに外出もしない。だからボーイフレンドもできなくて彼女は幼い僕らを遊び相手にするほかなかった。彼女は僕らにいろんな遊びを教えてくれた。例えば消しゴムのような小さなものを休のどこかに隠して僕らに探させるんだ。靴下の一番上の辺とか、二つの乳房の間とか、二本の足の付け根のあたりとかに隠しておくわけだ。とても楽しい遊びだったがね。馬鹿だよ、弟が母にしゃべっちまった。母は面白いわねとは言わなかった。お前たちみたいな子供のする遊びじゃありません、マリーは思ったより道徳心がないのねと言った。確かにマリーは完全無欠じゃなかったさ。それを僕の父は彼女が貧乏人の生れであるせいにしたぜ。

カ　レ　おやじさんはそんな事を言うより彼女にもっと外出させてやればよかったんだ。むろんそうすれば家事の手を抜くことになったろうがね。やっぱり君らは彼女の道徳心を当てにしてたじゃないか。

ツィフェル　道徳心を当てにしていられるうちはいいよ。僕はのちになって道徳はそれを実行していくと欠陥を表わすもんだということを知って、実に嬉しかったのを憶えている。当時僕は十七才で、ガールフレンドがいた。その子は修道尼たちがやっているミッションスクールの生徒で十五才だったが、すっかり成熟していた。僕らは腕を組んでスケートをしていたがそのうちそれでは満足できなくなってきた。その子が僕に惚れているのは僕には判っていた――ある時、家に送る途中でキスをすると息をはずませるのさ。僕はある友人に事情を打ちあけて相談した。当然、あることをせねばならぬという点では意見が一致したが、友人の言によるとそのことはそう簡単ではなくて、予備知識がないと非常に苦痛な状態に落入りかねないというんだ。男と女が離れることもできなくなってしまった例さえある。それが犬にもよくあって水をバケツ一杯ぐらいぶっかけてやると離れるんだが、ある二人の場合は救急車のお世話になったというから、運ばれた二人がどれほど困ったか想像もつくってもんだ。そう笑うなよ。僕はこの問題を真剣に考えたんだぜ。そこで僕は娼婦のところへ行って必要な知識を仕入れてきた。

カ　レ　僕にいわせればそれが責任感というモラルだ。子供のときからそいつを養う機会にめぐまれたからこそ君には責任感があるのさ。

ツィフェル　今日は好色が話題になったわけだがね。ポルノグラフィーってやつが芸術的手法を用いるといかに道徳的なものになるか君は気づいているかい？写真的な手法を使

うとできあがるものはわいせつだ。君は教養ある人間としてそれを壁に貼ろうとは思うまい。多少こみいった形式をとろうと性行為そのものずばりではね。ところがレダと白鳥の図を考えてみたまえ、洗練された性愛の絵はそれ自体は人前に出せない習慣を画いているが、これが全体に芸術という刻印が押されると、子供にみられてもまあまあ構わないということになる。しかもセクシャルな効果は十倍だ、なぜならまさに芸術だからさ。それから例えばディドローのある作品にこんなところがある。例の行為のとき、女がいつもあたし耳がかゆいのと言うクセのあることを読者は知っている。である個所で女の「あたし―みみ―が……」という言葉があって、それに静寂がつづく。つまり女の耳のかゆみはなんらかの方法でとめられたわけだ。これを読んで僕は楽しかったね。まして当の女には楽しいことだったろう。こういったものは何度想像してみてもほんとに感動的だ。これが芸術というもので、肉感性をあてこんだありきたりのものよりも刺激的に作用する。

カ　レ　僕は前から古典作家はもっと読まれていいと思っていた。

ツィフェル　古典文学を絶対に備えなければいけないところは監獄の図書室だよ。僕なりのスローガンをこさえれば良書を監獄図書室に！だね。これが監獄改革者の畢生の事業となるべきだな。この事業が完成すれば忽ち監獄は当局にとっては索漠たるものになるだろう。奴らの「一袋のジャガイモを盗んだカドにより禁欲六ケ月」てな正義感が時代おくれになったことを奴らも認めずにはいられなくなるだろうしね。

カ　レ　じゃあ君は禁欲の徳も買わないんだね？

ツィフェル　ぼくは豚小屋のなかに作られる秩序を買わないさ。

カ　レ　僕は無神論者のグループにはいる以前は、裸体主義者の仲間だった。この連中はおよそ存在する限りでもっとも純潔な人間だ。彼らはなにものをもわいせつとは見ないし、およそ興奮することがない。彼らが誇りにするのは羞恥心を克服し去ったということと会費を支払えるということだ。僕はそこからまた非純潔の方へ戻ったわけだが、実の所しばらくは何の欲望も感じなかった。あんまり見すぎたんでね。それに工場やうっとうしい住宅にくらして食う心配にかかずらってる生活のなかでは、人間はとてもヴィーナスやアドニスのようには見えないよ。

ツィフェル　全くだ。僕としては純潔でないことがなんらかの意味をもつような国に住みたいね。

二人はもう一度駅前の大広場を横切って戻っていった。それから二人は別れ、それぞれの場所をさして帰っていった。

3（Ⅶ）ツィフェルの回想（その3）教養について

ほとんど毎日ツィフェルは駅のレストランに出かけた。というのはそこの大きなバーに小さなタバコ屋があって、不定期にひとりの少女がいくつかの紙函をかかえて現われて店をあけ、十分ばかりシガーやシガレットを売ったからである。ツィフェルはカレに何日か待ちぼうけをくわされたが、しかし十日めか十一日めかに再びカレが現われた。ヘルシングフォルスにはカレのほかにドイツ語を話す知人がいなかったのである。

カ　レ　君が国外へ脱出したについては何か特別なできごとがあったのかい？ただなんとなくいやになって出てきたみたいだ。

ツィフェル　その事情は誰にでも面白いというものじゃない。僕らの研究所の助手で、陽子と細胞核との区別もつかないような男がいたが、奴は自分の昇進がユダヤ化されたシステムのために阻まれていると信じこんでいてナチ党にはいった。僕は奴の論文を審査する立場にいたもんで僕が国民的高揚に同調せず、ナマエナドモンダイデナイヤツにくみする奴を憎み、排斥していることを奴が発見したってわけさ。ナマエナドモンダイデナイヤツが政権をとってからは、それが僕を国内に容易にとどまっていられなくした。それに僕は生まれつき偉大な感情の大波なるものに安心して身をまかせていられるたちじゃない。精力的指導なんてのもごめんだ。偉大な時代のなかでは僕のような存在は異物だな。僕のような存在を国民の怒りから保護するためにわざわざ収容所が作られたってことも聞いたが、それは僕には魅力がないのでね。

カ　レ　それで君は、この国でいろんな目に会うには修業が足りないと思ったんだね。

ツィフェル　ぜんぜん足りないよ。どうして僕があんなごみためのなかで人間らしく生きてゆけるものか！君は僕を弱いと言うかもしれないが、僕は非人間性の氾濫を目の前にして依然として人間であり得るほど人間的じゃないね。

カ　レ　僕の知り合いに毒ガスを製造している化学者がいた。彼はプライヴェートには反戦主義者で、平和をのぞむ青年たちを前にして戦争反対の講演をやるんだ。演説はすごくラジカルでね、表現が激しすぎるってしょっちゅう警告されていたっけ。

ツィフェル　なぜそんな男に講演させたんだ？

カ　レ　彼は彼の生産するものと関係がない、それは例えば自転車工場のあるひとりの労働者がその自転車と殆んど関係がないのと同じだと彼は言っていたが、これは正当な言分だからね。そして彼は僕たちと同様、生産者が生産物となんの関係もない現状に反対していた。僕たちははっきり知っていた――およそ労働する限り、僕たちは戦争のためにすることになるんだ。なぜならそれ自体は無害だが市場が占有されているために国境を越えられぬとなれば、自転車に代って戦車が、ある晴れた日に国境を越えてゆくのは明白だからな。貿易も経済も人間的で戦争だけが非人間的なんだって言う連中がいるが、貿易も経済も人間的じゃない、現状ではそいつが戦争を招き寄せている。なのに連中は戦争を人間的にやればいいなんて言い出すしまつだ。戦争が経済に由来するってのは野蛮が野蛮に由来するというだけのことさ。失礼、僕は話を政治的にしちまったな。

ツィフェル　文化は経済なんぞとは縁がないよ。

カ　レ　だから困るのさ。

ツィフェル　だから困るとはなぜだい？率直に言ってほしいな。僕は科学者だ。なぜ困るのか判らない。

カ　レ　僕は労働大学にかよったことがある。何を勉強しようか迷ったよ。ヴァルター・フォン・デァフォーゲルヴァイデか、化学か、古代生物学か？実用的見地からすればどれだって同じだ。僕には使いみちのないものばかりだから。君が物理学を勉強したときは君は就職の可能性を横目でにらんでおいて、さて売れ口のよさそうなものだけを仕入れればよかったろうが、僕らの場合たるや問題は教養にすぎない。どういう教養を仕込むかだけが問題だった。

ツィフェル　どういうのを仕込んだ？

カ　レ　フォーゲルヴァイデさ。しばらくになんとか勉強してた。だが失業しちまってからは晩にはくたくたただし、やめちまったよ。講義は只で一文にもならないが一文もかからない。ただしレクラム文庫一冊買ったからタバコ一箱分ぐらいかかった。多分僕が困難を克服してまで勉強しなかったのは、僕に素質がなかったせいもあるだろう。僕が下宿していた家の息子なんかいつのまにか植物の名前をぜんぶ暗記しちまったものな。こいつは意志強固で一晩といえど散歩したり映画にいったりしない。勉強ばかりしてたがとうとうそれで大損しちまった。めがねが要るようになって旋盤の作業に支障をきたした。もっともそれも結局はどうでもよくなったがね。つまり失業しちまったから。

ツィフェル　君の言うとおり問題は君が教養をのぞむか、のぞまないか君次第さ。君の下宿の息子にしたって勉強はしたに違いないが、しかし本を持たずに何度トイレに行ったか、読書の最中に何度顔をあげたか、一度が三秒としても合計したら二・三〇年のうちにはもしかすると一週間にもなる。植物界は広大だ、この広大な分野について十分な知識を得ようとすれば対象にむかう非人間的なまでの情熱がいる。まして他にも仕事を持ってる工員なんだからね。それから学問が収入のたねになるかなんて問題を持ちだすのはまるきり間違ってるぜ。学問のための学問をこころざさないような人間は学問から手を引いてもらいたいね。そんな人間は学問的精神を持ってないんだ。

カ　レ　そんな問題を持ちださなかったから労働大学あたりへ行ったのさ。

ツィフェル　なら君には素質があったんだ。のみならず倫理的観点からみればその場合講義をする紳士より君の方が一段高いところにいる。なんたって彼は学問をめしの種にしてるんだ。君が途中でやめてしまったのは惜しいよ。

カ　レ　続けてもどれだけ意味があるか僕には判らないね。なんのために僕がルーベンスの絵を見て美意識を養うのか。目に入る娘の顔色はみんな工場でもらってきたものなんだぜ？そして下宿のおかみさんの息子は植物学を勉強するが、彼女には一株のサラダ菜を買うカネもない。

ツィフェル　こう言えるかな――一般に教養への熱望が、目立つほどヒロイックで、自分を無にしてするという。た外観を呈し、それが高級なモラルとみなされるような国があるとき、その国の内容は疑うに足る、と。

それからまもなく二人は別れ、それぞれの場所をさして帰っていった。

4（Ⅷ）善の概念について　ドイツ的惨虐さ　孔子がプロレタリアを論ずる　まじめさについて

カ　レ　「善」ということばにはいやなニュアンスがあるね。

ツィフェル　アメリカには善人をピタリと言いあらわす言葉がある。sucker という言ことばでね。口の隅から吐き出すようにしてサッガーと発音するのがいちばんいい。人に一杯食わされる奴、かつがれる奴、ペテン師のカモになるようなお人好しをいうんだ。

カ　レ　「良い」という意味を考えるつもりなら「気の良いパン屋の小僧」と「人の良い金属労働者」とがスクラムを組んでいるところを想像するのがいちばん良い。そうするとパッと判ることがある。いい家の出身とはいえない人間だけがいい人間だ。紡績労働者は僕らに衣服を、水呑み百姓は僕らに食糧を、大工は僕らに住居を、印刷労働者は僕らに教養、つまり彼らはあらゆるものを雀の涙のような金とひきかえに僕らに与えてくれる。これほどの犠牲的精神は山上の垂訓にさえみられないな。

ツィフェル　彼らが善良だなんてとんでもないぜ。報酬がケチなものだとしても彼らがそのことに不満なら彼らは善良だということにはならない。そして彼らは同意も満足もしてないよ。

カ　レ　とぼけるなよ。ひとつだけ答えてもらおう。まじめな話、君は彼らにケチな報酬で満足していろと勧める気かい？

ツィフェル　いや。

カ　レ　じゃあ君は彼らが善良であることをのぞまないんだね？　貧乏人が善良であるっていうのは仕事以外のことで自分の損にならない場合だけに限るというわけだね。

ツィフェル　僕は、人間的に振るまうときには大いに用心しろとすすめたいのだ。第一次大戦後のドイツで「人間の性は善なり」というオーバーな題の本があらわれたとき、とたんに僕は不安になったが、ある批評家が「善は快楽なり」と書いたんでほっとしたよ。いつだったか僕は、高校で同級だったある劇作家が書いた詩を見たが、その詩はいい人間でいるためには別にたいした努力を必要としないといってるんだ。こんな詩さ。

ぼくは壁に日本の木彫の面をかけている
金のうるしを塗られたハンニャの面を
ひたいの膨れあがった静脈をみて　ぼくは共感する
悪人であるためには渾身の努力がいるんだ

ところで君に聞きたいんだが、君はドイツ的惨虐というものがあると思うかい？

カ　レ　思う。

ツィフェル　それが宣伝だとは思わないんだね？

カ　レ　連合国の？

ツィフェル　あるいはナチの。

カ　レ　ドイツ軍内部に惨忍さが強く支配していることは問題なしに事実だと思う。征服し掠奪しようとすれば殴る腕が痛くなるほどぶんなぐらねばならないさ。

ツィフェル　「ドイツ軍内部に惨忍さが強く支配している」という表現はあいまいだな。君はわざとそんな表現をしたんだろう。

カ　レ　「支配する」とはどういうことだと思う。人々はたいてい自分が支配されていることを夢にも知らないんだ。ほんとだよ。彼らは支配階級とか支配者とかが、いようがいまいが自分たちのやることは変らないと思っている。支配者なんぞくそくらえとさえ思ってるかもしれない。彼らは考える――ヒトラーが統治権を握っているからには奴が支配者だ、だが奴とは別の見解を持っている人間だってたくさんいる、唯、今のところは奴が支配者だから奴と別の意見は通らないだけだと。しかしそう思うやつは間違っている。無論ヒトラーと意見を異にする人間はいるだろうが、大事なのはそのうちに支配者はヒトラーだけではなくて、ヒトラーの意見も支配者になるということなんだ。奴の手中には人々の知性を征服するための手段だって収められている。たとえば現に起っていることについての情報を流すのは奴だ。この情報はうそっぱちだと判っても、正しい情報を把むことはできない。奴はそれどころか手軽に人々のなかにある美しく崇高なヒューマニズムまで利

用して、人々を不潔な掠奪行為のために駆りあつめることさえできる。

さて、ストックホルムに広まっている詩があるんだが悪くない詩だぜ。書き写しておいたんだ。

小男は目印や手垢のついた書類や切抜きがぎっしりつまっている紙入れのなかをひっかきまわし、鉛筆書きの一枚をひっぱりだした。朗読された詩は「シュテファンの蒐集した詩集」のなかの〝悪徳たちと美徳たちの訴え〟だった。

☆悪徳たちと美徳たちの訴え☆

さきごろ催された圧制の夜会の席上、ファンファーレがひびくなかで名士たちが続々と舞台に立ち権力者との連帯を表明した。

復讐心は、良心的な服装とヘアスタイルをととのえて登場し、彼女が自在に駆使する記憶力の一端を披露した。このせむしの小女はものすごい喝采を博した。

粗暴は、登場の際にきょろきょろしていてへまをやった。壇上ですべってころんだのである。しかし彼女が激しく床を踏み破ったことがさきの失敗を十分につぐなった。

次には学識憎悪が、口から泡を吹きながら無知なる者よ認識の重荷を棄てよと絶叫した「知ったか振りをする奴らをやっつけろ！」と彼がスローガンを高唱すると、無知な者たちが過労でやせた肩を組んで彼をかつぎまわった。

卑屈も顔を出し大飢餓術師としての本領を見せた。退場にあたって彼女は、彼女が以前に高い地位につけてやったデブの山師どもにまでおじぎをしていった。

意地悪は、場内にムードをもりあげた。彼女は喜劇の人気女優である。彼女は例によって一丁ぶんなぐられた——脱腸した男を笑いものにしたからである。

さて、お目見え公演第二部の男頭には名誉心が登場した。彼は偉大なスポーツマンであって、高跳びを見せたはずみにちっぽけな頭を天井の梁にぶっつけて怪我をしたが、その時も、また儀典長が彼の肉に直接長いピンをつきさして勲章を留めたときも、まつ毛一本動かさなかった。

舞台度胸がないのか、正義はややあおざめて舞台に立った。彼女は些細なことばでお茶をにごし、近い将来には大講演をしますと約束した。

知識欲は逞しい青年で、政府が彼の眼を開いてくれたこと、社会の難儀の責任はへそまがりどもにあることを報告した。

長身痩軀の犠牲的精神は、誠実なおもむきでふしくれ立った手にメッキの大皿を持って現われ、労働者たちから小銭を集め、低い疲れた声で「子供らのために！」と言った。

秩序も登壇した。小綺麗な頭布ではげ頭をかくした彼女は、嘘つきに博士免状を、殺し屋に外科医認可証を授与した。彼女の灰色の服にはちりひとつついてはいないが、実は前夜、裏庭からごみ箱を伝ってさんざん盗みをはたらいたのである。盗まれた連中が長蛇の列をなして彼女の机の前を過ぎてゆくと、彼女はそのひとりひとりに静脈瘤のできた手で受取証を書いて渡す。

彼女の妹の節約は、入院中の病人たちの口許からもぎとってきたパンの皮を入れた竈を提示してみせた。

首すじに答のあとがある勤勉は、死ぬほどこき使われている者のようにばくばく喰ぎながら、無料出演を買って出た。人が鼻をかむのに要するよりも短い時間で、榴弾をこさえてみせたのである。おまけに、人がアアというよりも早く、二千家族分の毒ガスを製造してみせた。

これらの名士たちはすべて、寒さと飢えの子孫たちであるが、今や平民に伍して登場してわきまえもなく、下僕として圧制にかしづくことを公言したのである。

ツィフェル　この十二人の使徒はヒトラーの親衛隊としてもよく似合う、と君は言うわけだね？

カ　レ　連中は利潤をあげるためにはどんな手段にだって訴えてゆかざるを得ないからな。

ツィフェル　なにもかも資本主義が悪い——陳腐なセリフだよ、そいつは。

カ　レ　残念ながら陳腐じゃない。

ツィフェル　資本主義の責任はもっと問われていい。それは認める。また、たとえ有益な真理だろうと陳腐であれば問題にしないという危険な傾向が僕にあることも、自認しておく。こんな傾向を放任していちゃ化学者としては失格だ。ところでね。君たちの孔子さまであるカール・マルクスはプロレタリアートの倫理的な質をじつに冷静に評価していたろう？　彼がプロレタリアートに敬意を払ったことはもちろんだが、しかしプロレタリアは人間以下だという言葉をゲッベルスが受け継いだのもマルクスその人からだ。ただしマルクスの場合は、プロレタリアは人間以下である現状にうんざりしている、という意見だったがね。

カ　レ　マルクスが労働者を罵倒してる、なんてどうして言えるんだい？根も葉もない珍説をでっちあげないでもらいたいな。

ツィフェル　珍説を吐かなきゃ話がダレてくるからね。それじゃ君もつまらないだろう？　むろん、マルクスは労働者を罵倒してはいない。彼は、労働者がブルジョアによって罵倒の種とされている事実を確認しているのだ。念のためにいっとくが、僕のマルクシズムの知識は不完全だからそのつもりで聞いてくれよ。僕の同僚が断言したところによると、こんにちでは、マルクシズムの初歩的な知識を仕入れるだけで二、三万マルクかかる。それだけのモトデを使えばまあまあというところだ。それ以下ではロクな知識は得られない。せいぜいヘーゲル抜きのマルクシズムとか、リカードー抜きのマルクシズムといった安物が手にはいるだけだろう。しかし、僕の同僚の算出したのは、本代とか授業とか実習の経費とかいったものだけなんだ。厄介なことが持ちあがって履歴にキズがついたり、時には逮捕されたりすることは計算にはいってない。マルクスを徹底的に読めば、ブルジョア的職業についている人の場合にはヤル気がなくなってくるが、このことも計算にはいってない。実際、専門分野のいかんによっては例えば——歴史学や哲学を専攻している人の場合には——マルクスの洗礼をうけることがいのち取りにもなりかねない。

カ　レ　で、労働者が人間以下だというのは結局どうなんだ？

ツィフェル　つまり、さっきも言ったように僕のいうことはあまりアテにならないが、こんな見解があるらしいんだよ——プロレタリアから人間性が、プロレタリア自身の人間性が奪われている結果として、プロレタリアは結局何ごとかをたくらむほかないというんだ。プロレタリアはこの世界のなかで非人間化されている。彼にとっては人間性の回復は死活の問題だ。ホモ・サピエンスは、絶対的な破滅を眼の前に見るときにのみ何ごとかをなすものだとマルクスは言う。人間がまっとうなことをするのは非常のときに限られている。だからプロレタリアが人間性を奪換するとすれば、それはほかにとるべき道がないからだ。この時はじめて彼らは人類をより高次

の段階に高めるという彼の使命に到達する。

カ レ 使命ってやつには僕はいつも反撥してきた。いわば本能的にだ。君には使命があるなんてのはお世辞だ。しかし、僕はお世辞をいうやつは信用しない。君だってそうだろう。使命って言葉の文字通りの意味はどういうことかな。

ツィフェル 使いとして与えられた命令だ。

カ レ そんなことだろうと思った。プロレタリアはまたしてもお使い番をさせられるのか。君ら（インテリ）が理想国を考案し、僕らがそれを製造させられる。僕らは人夫、君らは監督。人類を救え、と僕らは命じられる。しかし人類たぁいったい誰だい？人類とは君らだ。僕はストックホルムで、商工会議所顧問である銀行家のユダヤ人亡命者に逢ったが、こいつ大まじめで、僕に訓戒を垂れたぜ。僕らドイツの社会主義者が、革命をやるどころかヒトラーに権力を握らせたとは何ごとだとさ。どうやらこいつ、ソヴエト商工会議所てなものの到来でものぞんでいたんだろう。この連中は同じ見地からロシヤ人をも批判していた。ソ聯には真の共産主義はないてな記事をしょっちゅう新聞に載せて、こっぴどく論評していたよ。社会主義建設は興味ある実験である、とかなんとか、いわゆる客観的な論調を駆使しながらね。まるで連中は社会主義の建設が技術的に可能かどうかだけを問題にしてるみたいだ。だが多分フランスの貴族たちにしたってそんな調子でギロチン談義をしていたんだろうな。

ツィフェル 君は人類解放を拒否している、と理解していいのかい？

カ レ ともかく僕は「人類」にはコーヒーをおごらないな。――悪くとらないでほしいが、僕はときどき苛々しているんだ。こんな時代に僕がのうのうと駄酒落をとばしているなんてくそおもしろくもない。

ツィフェル それには、僕ならこう答えるね。第一に僕らは二人ともそれほどのうのうとはしていない。ドイツの機械化部隊が二個師団も迫っているのに、僕らにはビザがないといった状態では特にね。第二に目下のところまじめな生活態度というやつはいささかいかがわしいものになっている。なぜなら、かって存在した限りでいちばんまじめなやつが、ヒトラーとその一党だからさ。奴はまじめな殺し屋で、人殺しはひどくまじめな仕事なんだ。上っ面の仕事じゃない。そのことはポーランド人に訊いてみれば判る。奴がまじめなのと反対におしゃかさまはユーモリストだった。そして第三に僕らは殺し屋じゃないんだからまじめぶる必要はない。大事なことをおもしろく表現したっていっこう差しつかえはないんだ。

カ レ そういえば殺し屋どもの集りのとき、こういう演説をした奴がいるぜ――ブルジョアジーはカネの他には何ひとつ失うべきものを持たない。

それからまもなく二人は別れ、それぞれの場所をさして帰っていった。

5 (K) 自由への愛とチーズによって有名な国

ツィフェル スイスは、そこでは人々が自由でありうる国として有名だ。ただし人々といっても旅行者に限られるがね。

カ レ 僕も旅行したがあまり自由とも感じなかったぜ。

ツィフェル 君はホテルに泊らなかったんだろう。ホテルに泊らなきゃだめだ。ホテル

に泊まれば好きなところへ行ける。眺望のみことなでっかい山のまわりには柵なんぞありはしない。山に登れば他のどこへ行くよりも自由が満喫できる。

カ レ 噂によるとスイス人自体はガイドでなきゃぜんぜん山に登らないそうだ。ガイドじゃさほど自由じゃないな、旅行者を案内しなければならないし。

ツィフェル ガイドはほかのスイス人ほどに自由を渇望していないんだろう。スイスの自由への渇望は歴史的なものだが、これはスイスの不幸な位置に由来している。何か征服したくてうずうずしている強国ともにぐるりと囲まれているんだからな。だからスイス人は気の安まるひまがない。そんな事情がなかったらスイス人は自由などに用はなかったろう。エキスモーの自由への渇望なんて聞いたためしがないが、それはエキスモーのいる位置がいいからだよ。

カ レ スイス人にとっては怪しからぬたくらみを抱いた強国が同時にいくつも存在していたのは幸運だったな。どの国もほかの国がスイスをものにするのを邪魔する。もしこの幸運がなくなれば、つまり、強国のどれかが特に強くなればおしまいだ。

ツィフェル 僕に言わせれば、自由への烈しい渇望がみとめられる国からは逃げだした方がいい。いい位置にある国ならそんな無用な渇望はないよ。

カ レ 君の言うとおりだ。あんまり自由自由とわめきたてられているところはうさん臭い。よくあることだが、誰かが自由のなさをこぼすと、たちまちこだまのように「我が国には自由がある」てな答えが返ってくる。「わが国には思想の自由がある。誰でも好き勝手な信念を持つことができる」というんだ。それはそうだよ、どこだって思想は自由だ。ただ思想を口に出すことができないだけだ。口に出せば罰せられる。たとえばスイスでファシズムに反対してしゃべってみたまえ。ファシズムは嫌いだと言うだけなら可もなく不可もないが、それ以上のことを口に出せばたちまち「そういう思想を表明してはならない。もし表明すればわれわれの自由はおびやかされる。ドイツ軍が侵入してくるからだ」と言われるだろう。あるいは同じスイスで、共産主義に賛成するとしゃべってみたまえ。たちまち、そんなことを言う自由はない、理由は、共産主義は自由に反する、つまり共産主義のもとでは資本家が自由でない、てなわけだね、あるレストランで出逢った紳士は僕にこう言ったよ――「まあロシヤで事業の意欲をもやして工場を開設しようと試みてみたまえ。あなたは建物一棟だって買えやしない」そこで僕は答えた。「ここでならおれは買えるのか？」「好きな時に買える」と奴は言った。「あなたは小切手を書きさえすればいい」。僕としては銀行に口座を持ってないのがじつに残念だったね。持ってりゃ工場を開設できたわけだからな。

ツィフェル 自由といわれるものの意味は、君が私生活上の自由をいささか持っていてビールを飲みながら思想を公認の枠から多少逸脱させても、すぐには逮捕されないということだよ。

カ レ このあたりではビールを飲みながらでもおよそ意見など持つことは厳禁だ。それでさえ危険だという事実を、ドイツ人は、ドイツ人以前にもある国の人々は発見している。奴らはテーブルの下からも眼を光らせているよ。奴らはブチブルジョアの自由への渇望の息の根をとめてしまった。

ツィフェル 奴らは最大限の能力を発揮している。しかしまだまだ過渡期だよ。奴らは強制収容所というモデルを創造しているとは

いえ、ローマは一日にして成らずさ。人々はまだ山のような自由をあえて行使している。たとえばドイツでだって、ときどき町をぶらついて店のショーウィンドーを覗いてまわることはまだ自由にできる。もっとも、覗いても楽しくはあるまいね、そこには何もみあたるまいから。

カ レ そうだとも、何かが見あたらなきゃね。見あたるものには、弾があたる。

ツィフェル 奴らが強制収容所は教育施設だと称しているのを、意識的なペテンだと誰もかれも思いこんでいるが、そうとっては全く不当だな。あれはモデル教育施設だぜ。奴らは当分は試験的に敵を収容しているが、いずれはみんなを収容するつもりなんだ。むろん奴らの国家はまだ地歩を固めおえていないし、まだ弱体だ。たとえば労働者が終業後に家に帰るなんてことは、奴らの基本的見地からすれば、呆れるばかりに腐敗した状態にちがいない。奴らはまだ全員を掌握するには程遠いわけさ。

カ レ 奴らの国家の地歩を固めるのにいちばん重要な対策は、ハイティーンを含めての少年たちを、彼らが腐敗させられたり国家と疎遠にさせられたりする怖れのあるすべての場所から遠ざけておくことだろうな。ことに勤労生活からは遠ざけねばいけない。たとえ苦労して少年たちに、総統や未来への無条件の信頼をきびしく教えこんだとしても、少年たちがそのあと勤労生活にはいってゆくとしたら、教育をした甲斐がなくなっちまう。少年はいたるところで搾り取られ食いものにされて、不平不満を持ったり、疑問を感じたりするようになるからね。勤労生活というものを撤廃する必要がありそうだ。

ツィフェル 賛成だ。勤労生活の撤廃はじつに有効だろう。

カ レ 勤労生活がある限りはいつでも自由への渇望が湧く怖れがある。なぜって生活苦がひどすぎるものな。

ツィフェル 大多数の人間にとってはね。

カ レ アメリカ人を見たまえ、ありゃあ大国民だ。昔はインディアンの襲撃になやまされ、今は百万長者どもを背負いこまされている。次から次へと食品企業におそわれたり、石油トラストに絡まれたり、鉄道資本に徴税されたりしている。敵は巧妙で惨酷で、新聞はワナをかけるし、銀行はまっぴるまに追い剝ぎをやる。いつ発砲されるかもしれないのに、どころか現に発砲されているのに人々は自由を守って阿修羅のようにたたかっている。ところがその自由たるや、誰もが好き勝手なことができるという自由なんだ。その限りでは人々は百万長者どもの思うつぼにはまっている。

ツィフェル （熱をこめて） そう、彼らは阿修羅のように。馬車馬のようにがんばらざるをえない。さもないと潰されてしまう。多分彼らもたまには物思いにも耽りたいだろうし、生の倦怠てなものも少しは気ままに味わってみたいだろうが、そうはいかない。そんなことをしたらたちまち生存をおびやかされる。僕は実例をみた。アメリカに僕の叔父がいるんだが僕が子供の頃こちらへ来たことがある。その時のことは忘れられない。叔父は自動車を持ってきていたが、当時はまだ自動車は珍らしかった。いちどコールドベルクへドライヴした時、叔父は昔は足で山に這いのぼるしか手がなかったがね、とひとつ覚えのようにくり返していた。山道にさしかかったら自動車がエンコしちまって僕らは頂上まで足で登らなくちゃならなかった。それでも叔父ははぁはぁ喘ぎながら、自動車だってどんどん進歩してるんだぞと、断言せずにはおかなかったものだよ。

カ レ まさにアメリカにおいて自由の言説がことにさかんだ。まえにも言ったようにこれはうさん臭いな。靴が窮屈ででもなきゃ誰も自由について演説したりはしまい。いい靴はいて歩いてる男が、自分の靴がいかに軽いかとか、いかにぴったりしているかとか、いかに窮屈でないかとか、この足にマメができてもいなければできさせもしないとか、しゃべりずめにしゃべりつづけることはまずないだろう。ともかく話を聞いて僕は夢中になってね、アメリカ人になろう、なれなきゃせめていっちょう自由に浴しに出かけてみようと決心した。僕はあっちこっち駆けずりまわった。あっちの窓口は多忙、こっちの役人は顔を見せない。領事に会ったら建物のまわりを四つん這いで四回まわってタコがどこにもできてないことを医者に証明してもらってこい、と要求された。その上で僕に、僕はどんな意見も持たない、と宣誓して断言しろと言う。僕は漠然と奴の眼を覗きこみながらそのとおり断言したんだが、奴も僕の内心を見抜いて、これまで一度もおよそ意見てなものを持ったことがないと明白に証明してみせろとぬかした。そんな証明はできやしなかったさ。かくて自由の国への渡航はおじゃんだ。あの国へはいるには、自由へのぼくの愛が足りなかったのかもしれないな。

それからまもなく二人は別れ、それぞれの場所をさして帰っていった。

6（Ⅵ）デンマーク　あるいは　ユーモア

話題はデンマークに移った。ツィフェルもカレも、ここへの亡命の途上でデンマークに滞在したことがあったのだ。

ツィフェル あの国の人々はユーモアを持っているね、天下周知のことだが。

カ レ しかしエレヴェーターを持ってない。これは経験から知っているんだ。デンマークの人たちは親切で僕らを客人として扱ってくれた上、なんとか僕らの便宜を計ろうと脳みそをしぼってくれたが、僕らとしては、人任かせにしてのほほんともしてられなかった。都会のいいことに首都の集合住宅にエレベーターがないのでここに目を付けたんだ。誰にきいてもほどこしを受けるのは恥かしいことだと言うし、僕らは働いて報酬を得たかったからね。調べてみると最上階の人々もこみ屑の類いを下まで担いでおりなきゃならない。そこでその運搬を引き受けたんだが、これは恥しい仕事じゃなかった。

ツィフェル デンマーク人には実にウィットがある。彼らは今でもある大蔵大臣を好んで話の種にしてるが、この大臣は歴代の蔵相のうちで、彼らが給料を払っただけのことはあった唯一の男なんだ。つまり大抵の大臣からは給料を払っても何も得られないが、この男からは話の種が得られたのさ。ある委員会が帳簿を監査する為にそいつの許へ現われたとき、そいつは手の平て机をたたいて「諸君、君たちがどうしても監査するというのならおれはもう大蔵大臣じゃない」と言った。この権幕に気押されて委員会は逃げだしてしまい、半年たってまた顔を出したが、この時判明したことはこの蔵相発言が掛け値なしの真実だった、ということだった。人々は蔵相を監獄に入れ、そいつの思い出をなつかしんでいる。

カ レ 彼らのユーモアがとくに発達したのは第一次大戦の時だね。彼らは中立を保持しておおいに売りまくった。イギリスあたり

まで浮かんでいけるものはすべて船に仕立てて売りこんだ。厳密には船ではなくて船体と称していたんだが、たしかにその方が実状に合っていた。

ツィフェル　第二次大戦がはじまったとき彼らは繰返し、われわれは弱すぎて軍備など持てない、我々は豚肉を売らなけりゃならないのだと強調した。ある外国の大臣が彼らに勇気を吹きこもうとして、ステップ地帯に伝わる、鷲に襲われた兎の話を聞かせたとき、彼らはこう答えた――我々はドイツ人からは安全だ、なぜならドイツ人がデンマークを占領すれば、ロシアから豚の飼料が届かなくなるのは確実だし、ドイツ人はたちまち豚肉が買えなくなってしまうから、とね。

カレ　彼らはデモクラットだったな。人は誰でも当然ウィットを楽しむ権利がある、と考えてゆずらなかった。社会民主党政府を作ったときも、その首相を支持した理由はというと、奴のひげがてんでコミカルだということだけなのさ。

ツィフェル　彼らの確信によると彼らにはユーモアがありすぎるから、ファシズムは彼らの国では伸びない。彼らは多かれ少なかれ豚の販売で生活してるから、買手であるドイツ人とは折れ合ってゆかざるを得ないのだが、そこで彼らはうまいウィットを考案した。我々はカネやタイコは叩けない。さわぐと豚を台なしにする、というんだ。残念なことにファシズムの方はデンマークで冗談の種にされちまったことにつまづいたりはしなかった。それどころか、ある朝、一群の飛行機と共にやってきて一切合財を占領してしまったが、それでもまだデンマークはおあいにくさまだがユーモアは占領されないと断言している。ユーモアのない国に住むのは耐えがたいが、しかしユーモアなしで済まされない国に住むのはもっと耐えがたいな。

カレ　僕の母はバターも何もないときは僕らのパンにユーモアを塗ってくれた。ユーモアは味は悪くないが、腹ごたえがないよ。

ツィフェル　ユーモアというと僕は哲学者のヘーゲルを思い出す。僕はね、君に哲学的に太刀打ちできるようにと思って図書館からヘーゲルの本を少々借り出してきたんだ。

カレ　話して欲しいな。僕はガクがなくて自分じゃヘーゲルなんか読まないんでね。

ツィフェル　彼は哲学者たちのうちで最大のユーモリストたりうろ素質を持っていた。僕の見るところではちょうど舞踏病患者が手足の痙れんを抑えられないように、彼にはユーモアが備わっていたので、彼は例えば無秩序をぬきにして秩序を考えることがどうしてもできなかったのだ。最大の秩序のすぐ間近に最大の無秩序が存在する、ということは彼には自明の理だった。いや、間近に存在するどころか同一の場所に存在するとまで彼は言い切っている。国家は、彼の理解によると、階級間にもっとも尖鋭な対立があらわれるところに成立するもので、従って国家のハーモニーは階級間のディスハーモニーがなければ在りえない。彼は1は1に等しいという論に異をたてた。それは、存在する一切のものは不可抗的かつ不断に他のものに移行する、というより対立物に転化するからであり、およそなにものも自已自身と同一物ではないからである。というのだ。あらゆるユーモリストと同様に彼もまた事物の変化に特に関心を抱いた。ベルリン育ちが「君はしかし変ったねえエミール！」なんていうあれさ。大胆な男の小心や小心な男の大胆が、ことに飛躍が、つまり、なにもかも平穏にのんびりと流れていると見るまに、不意に恐慌が到来する、といったような飛躍が彼の関心の的だった。彼に在っては概念は絶えずイスの上で身をゆす

っている。ちょっと見は実にくつろいだ印象を与えるが、やがてそいつは仰むけにのけぞり椅子から落っこちてしまう。

彼の「大論理学」を僕はリウマチを患って動けずにいたときに読んだことがある。この本は世界文学のなかでも最高にユーモラスな傑作だ。この本は概念の生態を扱っている。概念という捉えようとすればするりとぬける、不安定で無責任な存在どもが、互いにのしりあいドスを振りかざして渡りあい、そのあとで何ごともなかったかのように仲よく夕食を食うありさまが描かれる。概念はいわばカップルで登場するのだ。どの概念もその反対概念と結婚していて業務を処理するときは二人がかりでやる。つまり二人で組んで契約書にサインし、二人で組んで訴訟をおこし、二人で組んで強盗や追いはぎをやり、二人で組んで証言を行う。しかも二人は同時に互いどうし徹底的にめちゃくちゃに争っていて、あらゆる点で意見は一致しない。秩序が何かを主張すれば、直ちに、できれば同時に、秩序とは切りはなせないパートナーである無秩序が異論をとなえる。両者はどちらも相手なしでは生きられないし、またどちらも、相手とともにも生きられない。

カレ　その本にはそういう、概念でやつだけが出てくるのかい。

ツィフェル　人間が作りあげる概念でものは大事なものだよ。それは人間があるものを把握してそれを動かすことができるための把手（グリーフ）なんだ。現に進行しているプロセスの因果関係の絡まりあいのなかへ、どうすれば人間が割りこんでいけるか、ということをその本は扱っている。現実のもつウィットをヘーゲルは弁証法とよんだ。あらゆる偉大なユーモリストと同じように、彼は何を言うときにもくそまじめな言葉を使うよ。ところで君はどこでヘーゲルの名にお目にかかった？

カレ　政治でさ。

ツィフェル　そこにも彼のウィットがあらわれているね。国家の最大の弁護人の弟子たちが、国家にたいする最大の叛逆者たちというわけた。ついでだが、彼にユーモアがあるのはいいことだな。ヘーゲルの弁証法を理解した男でユーモアのない男なんて、僕はまだ出会ったことがないよ、ほんとに。

カレ　僕らはヘーゲルには強い関心を持っていた。僕らは抜萃で読んだ。彼を読むには僕らは抜萃に頼らざるをえない。カニを食うようなもんでまるごとは消化できないんだ。彼に関心をもった理由は今君が話したようなウィットのある事柄を、僕らがやたらと見てきたことだね。たとえば僕らと同じ大衆から出て政府にはいった連中には、実におかしな変化が生じたぜ。連中は政府にはいると、とたんに大衆の出ではなくなりただ政府の一員になってしまう。あるいは、僕らが地方へオルグに行ったとき出会った農夫を考えてみてくれてもいい。その農夫は僕らに反対して僕ら労働者は農民を裸かにする気なんだ、といっていたがやがて彼を裸にしちまったのは銀行と大地主だった。銀行マンや地主こそいちばん悪質な共産主義者だなんて誰かが言ってたぜ。これこそウィットそのものさ。

ツィフェル　弁証法をいちばんよく教えてくれる学校は亡命だね。いちばん鋭い弁証家は亡命者だ。かれが亡命者になったのは変化の結果だし、かれがもっぱら研究するものは変化だ。極く小さな徴候から極大の事件を推論する――かれに理性が備わっていれば。かれの敵が勝利する場合には、敵がその勝利のために払わざるを得なかった犠牲の大きさをかれは算出する。ことに矛盾に関してはかれは繊細な観察眼の所有者なのだ。弁証法よ、楽

えあれ、だね。

もし二人が人目に立つのを怖れなくてもよいのだったら、二人は厳かに立ちあがってグラスを打ち合せたことだろう。ツィフェルもカレもここはなんとしても立ちあがりたいところだったが、事情が事情だから心の中だけで起立しておいた。それからまもなく二人は別れ、それぞれの場所をさして帰っていった。

7（XIII）ラップランド　なんきん虫

ツィフェルもカレもとっくりとこの国を見た。彼らにとって新たな亡命地にはこれまで以上のきびしい暮しが待っていたからだ。カレは事務用品のセールスマンになってあっちこっちに鼻を突っこんだし、ツィフェルは化学者としての働きぐちを探し歩いてあっちこっちで不愉快な目に逢わされたのである。ときどき二人は首都の駅のレストランで出会った。ここの客あしらいの悪さが二人にはすっかり気に入っていた。代用ビールや代用コーヒーを飲みながら語りあったそれぞれの経験によると、この国が禁欲主義者にとってはいわば天国であること、つまりデモクラシーのおかげで「」つきの言論の自由はあったが、バランスを保つために言論を使っての自由の濫用は禁止されている。もし、勇気を出して、あるいは自制心を失って禁を犯すことは死を意味するのだ。そのせいかこの国の民衆は大へんに寡黙であるという点で二人の意見は一致した。

別れる前にカレが仕事の上での提案をした。カレはさんざん歩きまわった結果この都市はある種の「なんきん虫」におおいに悩まされているということを発見したのだ。注目すべきことにはこの「なんきん虫」を駆除する団体がひとつもない。少々の資本があればそのたぐいの団体を創設することができる。ツィフェルは即答を避け、考えておこうと約束した。害虫を退治する企てにここの住民がたやすく気を引かれるものかとうかツィフェルは危んだのである。なにしろここの住民はおそろしく自制心があるではないか。そのまま話がつかずに二人は別れそれぞれの場所をさして帰っていった。

8（XIV）デモクラシーについて　国民というみようなことばについて　共産主義に自由がないことについて　革命と思考とにたいする恐怖について

二人が次に会ったときカレは河岸をかえようと提案した。十分と離れてないところにある自動販売式の食堂の方が、少しはましなコーヒーを飲ませるようだというのである。太った男はめんどくさいなといった顔をした。河岸を変えたってどうもなりゃしないさ。というわけで二人は動かなかった。

ツィフェル　一対一のデモクラシーは実にむづかしいな。体重にものを言わせようか。キロ数を票数に数えてもしなけりゃ僕が多数派になれる可能性はない。屁理窟をいえば僕

の尻は僕の考えの与党だから、僕が尻に賛成投票をさせたってよかろう。つまりはこれも僕の腹芸の成果だからな。

カレ　君はデモクラシーの塊にみえるぜ。太ってるからだな、たぶん。肥満それ自体が温厚にみえるんだ。デモクラシーという何か親しみやすい感じだが、中流以上の人間がもってるデモクラシーはまさにそれだよ。飢えに苦しんでる者のデモクラシーはもっと恥知らずだ。僕の知ってるある男はボーイだったが、製粉会社の社長をしているある金持をさんざん罵倒していた。この社長はまともにチップを払ったことがない。そして連れにむかってこうわめきやがるのさ。「わしはほんとうのデモクラットだからボーイを侮辱する気になれない。わしがボーイならチップを出されたら我慢がならん。わしが、ボーイもわしと同等の人間だと考えてはおかしいかね？」

ツィフェル　デモクラシーというものを誰かの財産みたいにいってはいけないんじゃないか。

カレ　いけないことはあるまい。早い話が犬にしてもいいものを食ってる犬は、食ってない犬より民主的な面をしているぜ。外見には必ず意味がある。これを見逃してはいけないと僕は思う。たとえばフィンランドを見たまえ、外見は民主的な国だ。君が外見を剝ぎとって外見なんぞ屁でもないとおっぽってしまったとするよ、さあ何が残る？断じてデモクラシーは残らないね。

ツィフェル　どうやら君の言うとおり自動販売機式コーヒーを飲みにいったほうが無難らしいな。

ツィフェルはため息まじりに立ちあがってコーヒーを手にとった。だがカレがそれを押しとどめた。

カレ　弱気を出すなよ。それがすべてのデモクラットの欠点だ。君も否定できまいがドイツはファシズムの外見を呈するようになるまではぜんぜん民主的な外見を持っていたね。社民党出身のエーベルトが首相で雇われマスターだった。奴は大衆が不穏な動きを見せたらすぐ電話をかけられるようにと、長い特設電話を参謀本部に直結させていたんだ。官僚や裁判官どもはまるで至極当然のことのように奴とよしみを通じていた。誰かがたまに自分の鼻をつまんでみせたとしても、それは誰もが好き勝手に行きたいところへ行けはしないこと、マスターのエーベルトのもとへ行かなければ地位も恩給もおじゃんだということの明白な証拠にすぎなかったんだ。奴らは目標を達成するために巧みな手術をほどこした。まずインフレーションをひきおこして中間層から金を捲きあげ、価格政策・税政策をつうじて農民層を破産させ、外国の銀行から資金を補給して工場を徹底的に合理化し、労働者の雇用を大巾に減らしてその大部分を乞食同然の状態に追いこんだ。そうしといてこれら破産した中間層・農民・労働者を材料にして奴らは国家社会主義（ナチズム）の国民運動をでっちあげたわけだ。奴らがそれと気安く共謀して新しい世界大戦のプランを練れるような運動をね。これらはすべて国内秩序を破壊することなく進行した。秩序を確保したのは給料制度による新しい軍部だった。

ツィフェル　それでも当時はデモクラシーだったよ。デモクラットたちは寛容でありすぎたがね。君にはデモクラシーってものが判ってないんじゃないか。文字どおりの意味でいって国民大衆の政治なんだよ、そいつは。

カレ　「国民大衆」ってのは妙なことばだぜ。ほんとはそんな言葉はないんだよ。外

向きの意味つまり他国民向けの意味では「国民」しか使われない。大実業家もユンカーも高官も将軍も司教も誰もかれももちろんドイツ国民だ。そして大衆も国民の中に入れてもらってる。しかし内向きの意味では、つまり問題が支配と被支配にかかわるときは、大衆は国民の中へ入れてもらえない。さっき挙げたようなご連中、つまり支配者どもの演説では被支配「大衆」ないしは下層階級も中に入れてますという意味で国民大衆がでてくるんだよ。だから大衆の方もだね、支配者を抜きにした意味で「国民大衆」って言葉を使った方がいいな、そうすれば「国民大衆の政治」という言葉も完全に理性的な意味をもつことになる。どうだい？

ツィフェル　だがそうなったらそれはもう民主的な民主政治じゃない。独裁的なものだ。

カ　レ　その通り、独裁的だ。千人のうちの一人に対する九九九人の独裁だもんな。

ツィフェル　そりゃ悪くないところか立派なものかもしれない。だけど共産主義の匂いがするぜ。共産主義が個人の自由をほろぼすことは君だって認めるだろう。

カ　レ　君は自分が格別自由だと実感しているのかい？

ツィフェル　格別とは言わないさ。そう開きなおるなよ。しかしなぜ僕が不自由な資本主義を不自由な共産主義にとりかえなきゃならないんだ？共産主義に自由がないのはともかく君も認めているようだしね。

カ　レ　認めるとも、つべこべいわない。自由だ自由だなんて絵空ごとはいわない。支配権力をもつものは何人も、たとえ人民が権力を持とうと絶対的な自由はありえない。資本家だって絶対的に自由じゃないんだぜ、しっかりしてくれよ。奴らは例えば共産主義者を大統領にえらべるほどには自由じゃない。

ツィフェル　ちょっと言っておきたいことがある。人民が権力を奪取するのはぎりぎりの窮乏に追いつめられた時だけだよ。そもそも人間というものはぎりぎりの窮地に追いつめられないと考えない、ということと関連がある。首すじまで水に漬かった時はじめて考える。無計画だから混乱が起る。人々はその混乱を、革命を恐怖する。

カ　レ　それを恐怖するばっかりにとどのつまりは地下壕の中に、頭の上に爆撃の音を聞き、背中に親衛隊員の拳銃を感じながらうずくまることになるんだ。

ツィフェル　そして腹の中はからっぽになり、子供の理葬に外へ出ることもできなくなるんだな。しかし秩序は厳然として支配していて、人々はほとんどものを考える必要がなくなるだろう。

ツィフェルは背をきちんと伸ばした。カレの政治論義の意気がいささか沮喪して、きたのにひきかえ、ツィフェルの舌鋒は生気を取り戻していた。

ツィフェル　君に誤解されないように付け加えると僕は人々を批判してはいない。それどころか逆だ。ぎりぎりの考えってものは苦しいもので、賢い人間はできるだけそれを避けようとするね。僕が知ってる国々のように異常なまでの思考が要求される国々ではほんとの話、僕はとても生きちゃいけないよ。

ツィフェルは変わしげに、グラスを傾けた。それからまもなく二人は別れ、それぞれの場所をさして帰っていった。

9（XV）享楽としての思考　享楽について　ブルジョアは歴史感覚を持たない

カ　レ　君は知識人のくせに物を考える必要ってやつに反感をもってるようだね。それでいて君は自分の職業に対しては反対どころか愛着をもっている。

ツィフェル　それが職業であることを除けばね。

カ　レ　近代的な現象だな。近代の発展過程で知識層というひとつのカーストが形成された。すなわち考えることを仕事とし、そのための特殊な訓練を受ける階層だ。彼らは頭脳を資本家に貸し出す、ちょうど僕らが手を貸し出すように。むろん君は人類一般のために考えている気でいるだろうが、つまりそれは僕らが人類一般のために自動車を製造している気になるようなもんだ。僕らはそんな気になりはしないがね。自動車を作るのは資本家のためと割切っている。人類一般なんてくそくらえだ。

ツィフェル　君の意見によると僕がものを考えるのは、考えることをどう売るかってときだけで、その他は自分のためにも世の中のためにも考えていないというわけか？

カ　レ　そうだ。

ツィフェル　どこかで読んだがアメリカではすでに思想一般が商品として認識されている。たとえば「大統領の第一の任務は、議会および国に戦争を売りこむことである」と指導的な新聞が書く。参戦の口実をみつけろってことさ。科学や芸術の問題を論ずるときも賛意を表したい時は「僕はそいつを買うね」と言う。説得するという言葉はてっとり早く、売り込むというもっと適切な言葉に置きかえられている。

カ　レ　こういう状況では考えることに反感を持つこともありうるね。

ツィフェル　ともかく享楽欲は最高の美徳のひとつだという点では僕らは同意見だね。お楽しみがひどく中傷されたり罪悪視されたりするところは、どこかがまともじゃないよ。

カ　レ　思考する楽しみはいたるところで破滅した。そもそも享楽そのものがみんなそうだ。第一高い。風景をちょいと眺めるにも金が要る。絶景は金の成る木だ。

ツィフェル　フランスの詩人ヴィヨンがこんな歌の歌を書いていた。俺は人並みに食うこともできない、食うことに財布をはたくと女を愛することができなくなる、っていうのさ。こうなるとものを食う楽しみも高嶺の花だね。

カ　レ　プレゼントをする楽しみも高くつくぜ、友達とのつきあいから子供にやるポケットナイフに至るまで。映画館に行ったってそこで君が楽しまされるのは、作った連中にとっちゃなんの楽しみでもなかったものだ。だが決定的なことはお楽しみってものが生活のほかの部分から完全に切りはなされてる事だ。お楽しみはいまや君が再び楽しくない生活に戻れるためのリクリエーションにすぎない。要するに君は君自身は楽しめないことにしか金を払ってもらえないんだ。ある娼婦がこぼしたことがある。彼女がある時うっかりして快楽のため息を洩らしてしまったら、客の男は一文も払おうとしなかったというんだ。彼女は、共産主義社会になったらこんな時どうなるのかしらってきいてたぜ。しかし僕は話を脇道にそらしたようだね。

ツィフェル　大いにそらしてくれ。僕たちは何かを生産するために雇われているわけじゃない。僕たちは考えたいことを、ないし考えうるものを考えていいんだ。僕らの思考はいわば只で飲めるビールだ。誤解されたくないから言っとくけど、僕は政府じゃないからそれで点を稼ごうなんて気はないよ、思考そのものに反対する発言をした覚えもない。僕

はゲッベルス博士が言う所のインテリ・バカってとこだが、ただ奴が理想とするような社会つまり思考を禁止することによって問題を完全に解消しちまうような社会に反対してるだけだ。

カレ　ヒトラーを簡単に低能呼ばわりする人がいるがそれはちょっと疑問だね。ヒトラーがものを考えるともうヒトラーじゃなくなるみたいだ。

ツィフェル　全くだ。三二年の、ライン地方の実業家たちを前にしてのヒトラーの演説を知的でないというようじゃ思考力が鈍いよ。この演説にくらべればありきたりの自由主義者の論説や講演なんかまごとさ。少くともヒトラーには戦争抜きで資本主義は手に入れられないということが判ってる。それが自由主義者には判っていない。

カレ　連中は未だに肉屋を抱えると同時に法によって屠殺を禁止できると信じてるんだからな。

ツィフェル　ユーモアを愛好する者には魅惑的なテーマだね。君は知ってるかい、「自由競争を維持しつつ、しかも無秩序をきたさないことはいかにして可能か」という不安な問題に対する最善の答がカルテルなんだぜ。もちろん国際的な秩序を生みだそうとするカルテル間の試みこそが、まさに国際的な戦争にみちびくものなんだから、戦争とは平和を維持する試みに他ならないのさ。

カレ　未だに第一次大戦を歴史的に捉えた本が一冊も出ていないな。

ツィフェル　ないね。スエーデンにいたころ僕はパラスの回想記を読んだ。彼はジャコバン党員でロベスピールの排除に力を貸したのちに執政内閣の一員になったことがあるんだが、彼の回想記はおどろくほど歴史的な文体で書かれている。ブルジョア階級は彼らの革命を取扱うときは正しい歴史的文体で書くんだな。しかしそれ以外の彼らの政治、つまり彼らの戦争を含めての政治を扱うときはそうはしない。彼らの政治はかれらの商売の、手段をかえての継続だし、その商売を公然と扱うのは嫌なんだな。だからブルジョアは政治が時として戦争に移行すると途方にくれてしまう。どの政府も戦争を始めるときには声明を出して、ちょうどへべれけの酔っぱらいがグラスを手にとるときみたいに「絶対にもうこれっきりだ」と言うよ。

カレ　実際そうだな。考えてみるとかなりの規模の戦争をやってのけた国々のなかでは近代諸国家がいちばん高潔で繊細だぜ。ともかく昔は欲得ずくでやられた戦争がいろいろとあったもんだが、それがピタッとなくなった。今日ではある国が他国の米倉を併合してしまいたいとするとまず正義感を発するんだ。我々は断じて行かねばならぬ、あの土地には不誠実な金持ちや大臣がいてパンやパンとくっついている。これは人類を冒瀆するものだ、とかなんとかね。要するにいかなる国家も戦争を起すのに自分自身の動機は認めない、どころか軽蔑していて別のもっとましな動機を探すんだ。唯一の不作法な国はソヴェト連邦だ。ソ連はナチに敗北したポーランドを占領したことについて世界中がそれを認めざるを得ないような、ちゃんとした立派な根拠は何ひとつ示さなかった。占領は単に軍事上の安全性という、つまり俗な利己的な根拠からなされたわけだ。

ツィフェル　ちょっと言わせてくれ。君はまさか第一次フィンランド戦争のときに、イギリスが介入の一歩手前までふみだしたのは、イギリス人の一部がフィンランドで所有していたニッケル鉱山の権益を守るためであって、小国民への愛情からではないという卑俗な見解にくみしちゃいまいね？

カレ　忠告してもらって助かった。粗していると口を滑らせるところだったよ。だがそれが卑俗な見解ならもちろん口は滑らすまい。思い切って汚い動機というのは犯罪の動機としちゃそれがいちばんいいんだな。そんな汚い動機は有りえないってんで、すぐみんなが寄ってたかって立派な動機をでっちあげてくれる。ハイーバーである強盗殺人犯が無罪になったことがあった。わけは、一人の女教師をバラバラに切り刻んでしまったのは、一マルク五〇ぽっちの飲み代を手に入れたいばっかりだったと奴が自白したからさ。陪審員たちは奴の言うことがあんまり惨忍すぎるってわけで、弁護人の勧告に従って奴の言分を信じないことにしたんだ。近代戦の高潔な動機が喜んで信じられるのも、万が一には現実に有り得ると想像できなくもない動機が、あんまり不潔すぎるのがまず第一の理由だろう。

ツィフェル　君、君は汗水たらしていわゆる唯物史観に奉仕しているがね、そんなに歴史を単純なものにしちゃ行きすぎだぜ。資本家は単純に強盗だとはいえない。第一に、まさに強盗は資本家じゃないからね。

カレ　それはそうだ。このような単純化が許されていい根拠があるとすれば強盗も資本家もふんだくるということ位かな。

ツィフェル　ふんだくると言っては不正確だ。資本家の場合は搾取するとはまあ言えるがね。搾取と略奪とはまるで別だよ。君はよく知ってるじゃないか。

カレ　唯おもしろくないことに「搾取」という言葉は宗教問答書にも出てこないし、どこでも「不道徳」とか「惨忍」とか言われることがないからね。

ツィフェル　厳しいね。もうおそくなるぜ。それから二人は立ちあがり、別れてそれぞれの場所をさして帰っていった。

10（XVI）支配者の種族について　世界制覇について

なんきん虫退治の会社の創立はガスが輸入に俟たねばならないこと、そして輸入しようにもライセンスがおりないことのために伸び伸びにならざるをえなかった。ツィフェルとカレは駅のレストランでの会合を続けた。話題はしばしばここ数週間というもの次弟に声高に全世界の支配権を要求していたドイツに及んだ。

カレ　奴らの課題はどうやって充分な数の支配者族を製造できるかということだ。強制収容所の所長の奴、僕らに中庭を三時間駆け足させ、次に二百回膝の屈伸をやらせてから二列に並ばせて訓辞をたれた。われらドイツ人は支配者たる民族である、とまずきいきい声でがなりたてた。俺はお前らが支配者種族の代表として、どこへ出しても恥かしくない人間になるまでお前らのだらけた土性骨を叩き直してやる。お前らのような腰抜けの平和主義者なんぞが世界を制覇できると思うか？平和主義なんぞ西方の退化した種族にまかしておけ。あんな屑どもに較べればドイツ人は誰でも樅の木がキノコより優秀なように、種族的に優秀だ。このことをお前らが腹に入れるまでここで俺がお前らのきんたまを鍛えてやる。やがてお前らはありがとうございましたと膝まづいて俺に礼をいうだろう。だとさ。

ツィフェル　けしからん言い草だな。君はどう反応した？

カレ　僕はいかれはしなかった。だが世

界制覇にあえて公然とたてつきもしなかった。僕はひどく搾られたが一度なんかそのあとで所長がじきじきに僕と面談したこともある。奴はくたびれた面をしてソファに寝そべってバーナード犬の毛並みを撫でながら、いいか、ともったいぶった調子で言った。考えてみろ俺を！俺は保険会社の支店に勤めてたが、重役のひとりにユダヤ人がいて俺が契約をとってこないとか、掛金を着服したとか口実をもうけて俺を街に拠りだした。失業した俺は当時国内制覇をめざしていたある党に入党した。もし俺の例で足りなければ総統自身のことを考えてみろ。権力奪取の直前には総統はまったくの破産状態だった。どこへもぐり込もうにもすべはなく、戸口が開いていたのは唯ひとつ独裁者業だけだった。そこで今度はドイツを考えてみろ。ドイツは破産状態だ。巨大な工業があって市場も原料もまるでない。残された最後のチャンスが世界制覇だ！この観点から事態をいっぺんとっくり考えてみろ！

ツィフェル　奴らが容赦のない厳格さでことに当らぬ限り、奴らの課題は遂行されえない。弱虫を怪物に仕立てるには厳格さが要る。原理的には世界最大の都市をめちゃくちゃに爆撃するのにも、小隊長の面をみても胸がドキドキするような兵員がいれば足りる。要は技術の問題だ。兵隊を機械にのせ、機械を敵にむけて発進させれば、そして機械から飛びおりるのが怖くなるほどのスピードを機械に出させればいい。残りの兵隊は輸送機に詰めこんで敵軍のまっただなかにおろしてやる。そうすれば連中は命が助かりたいから死にもの狂いで戦う。こんな生きた爆弾なら無尽蔵だ。人間はもっとも理性的な人間すら、何をするよりもたやすく英雄的行動をするように訓練され得る。彼はオートマチックに英雄になる。英雄的であるまいとすれば極度の意志力をふるい起さねばならない。想像力のあらん限りを働かすときにのみ、ようやく英雄的行動以外の何ものかを思いつくことができる。宣伝とおどしと見本とが殆んど全ての人間から意志を奪い去り彼を英雄にしてしまう。いわゆる偉大な時代が始まるとすぐ、地方新聞のスポーツ記者は文化の担い手に変ったし、タバコ屋は産業軍将校に変ったね。ある種の調味料はほんの少しで食物の味をすっかり新しい味に変えてしまうことがあるが、そんなふうにあらゆるものが全く新しい、のみならず脅迫的な性格を帯びてきた。初めはただ一部が一部を脅迫するにすぎなかったが、やがて一部が全部を脅迫するようになり、ついには全部が全部を脅迫するに至った。人々は晩にはその日に受けたいろんな脅迫を想い、明日はどんなふうに脅迫してやろうかと考えながら眠りについたものだ。

カレ　こんな話があるぜ。ある外国人が取引先の友人のドイツ人を訪ねて来た。彼は事務室に入ってくるなり「どうだね、君らの新政府は？」と声をかけた。ドイツ人は色を失って何かぼそぼそと咳きながら帽子をとり、外国人を外へひっぱり出す。外国人は歩きながら何か話がきけるものと期待するが、友人はびくびくと周囲をうかがってから横手へ折れ、彼をとあるレストランに連れこんで他の客たちから離れた片隅のテーブルに席をとる。コニャクの注文をすますと外国人はまたさっきの問いを繰返す。しかしドイツ人は横目で卓上灯をうさん臭げに睨んでいる。ブロンズのスタンドが、中に何か収まりそうなくらい太いのだ。支払いをすますとドイツ人は独り住いの家へ外国人を連れて行き、まっすぐ風呂場へ入って水栓をひねる。そのうるさい水音のなかでドイツ人は友人の耳許に口を寄せ、やっと聞きとれる程の声で言ったものだ――「僕らは満足しているよ」

ツィフェル　強力な警察の断えざる監視がなければある国民を英雄の種属に仕立上げることは不可能だね。さもないと忽ち元へ戻ってしまう。幸いなことに国家は国民にいささかの圧力をかけることができる。国家はたとえば人々に食べ物を無条件に供給しなければならぬということはない。時には一発くらわしてやればたくさんだ。つまり世界の征服は犠牲的精神の涵養をもってはじまる。成るも成らぬもそれ次第だ。

カレ　ドイツの不幸な歴史がドイツ人の無類の服従心を作りあげた。ドイツ人は命令する人間になれと命令されるときでも服従する。奴に教えこむ必要があったのは第一にドイツ人と非ドイツ人の違いで、血と土地がその教材だ。ドイツ人のみが総統に血を捧げる権利があるし、ドイツ人のみがドイツ人の土地をふんだくる権利がある、というわけだ。収容所の囚人と拷問者は血によってつながっているし同じ土地の出身だから同族だ、てなことになる。僕はいつでも血のキズナなんてものには反対の立場をとってきた。僕は僕を束縛してくるキズナにはすべて反対さ。僕は手を自由にしておきたい。たしかに、人が自由に父親を選ぶことができないからこそ、父親が笞を振りまわすなんてことが起り得るんだ。もし人に父を選ぶ権利があれば父親はあれほど食卓で舌づつみは打てまいね。

ツィフェル　家庭という神聖なキズナまでぶち破ろうというんじゃ白い目でみられても仕方がないぜ。

カレ　なんで僕がぶち破るのさ？家庭なんぞはもう資本家にぶち破られているよ。それと僕のキズナもナマエナドモンダイデナイヤツがぶち破ってしまった。僕は別だん他人よりも利己的なわけじゃないが、世界制覇の旗のもとに馳せ参ずるのはごめんだ。この点では僕は頑固だ。僕の無際限の犠牲的精神は僕は別のところで役だてる。

それから二人はなんきん虫駆除に話を戻してなおしばらく話し合ってから別れてそれぞれの場所をさして帰っていった。

11 (XVII) ツィフェルがあらゆる徳性に対する憤懣を表明する

秋が雨と寒さをともなって訪れた。愛すべきフランスは地に倒れ、諸国の人民は地下に息をひそめていた。ツィフェルはヘルシングフォルスの駅のレストランに腰をおろして、パン配給切符の綴りから一枚の切符を切りとっていた。

ツィフェル　カレ、カレ、僕たち哀れな人間はどうしたらいいんだ？至る所で超人的なものが要求されているとき僕らに行先があるんだろうか？「偉大な時代」を経験させられるのは一国民や二国民じゃ済まない、この偉大な時代って奴はとめどない勢いであらゆる国民を捲きこんでがんじがらめにしていくんだ。なかには自分たちは偉大な時代を経験しなくてすむし、経験するのは他の国の連中ばかりだというので、のんきに構えている連中もいるかもしれないがそんな態度じゃとうてい駄目だ。彼らはそんな気持をふり棄てる必要がある。大陸の全土にわたって英雄的行動がまん延しているし、庶民の仕事もたいへんなものになってきた。毎日のように新たなモラルが発明される。一袋のメリケン粉を手に入れるには昔なら一地方全体の土地を開墾て

きたほどのエネルギーが必要だ。今日にも逃げださなくちゃならないかそれとも明日でも間に合うかを知るには、ひと昔前なら不滅の作品を創造しえたほどの知性が必要だ。街を歩くにはホメロスぐらいの勇気が要るし、ただ生きてくってだけでも仏様ぐらい悟らなければならない。世界が英雄どもの棲家になるとき、僕らはどこへいったらいいんだ？

ほんの暫くの間だったが世界が人間にとって住み心地のいいものになりそうに見えたことがあって、人々はほっと安堵の息をついたものだ。生活は楽になってきていた。紡績機械・蒸気機関・自動車・飛行機・外科医学・電気・ラジオ・解熱剤などがぞくぞくと出現し、人間はより怠惰、より臆病、より感傷的、より享楽的、要するにより幸せであることができた。あらゆるメカニズムがすべての人が何でもやれる未来のために奉仕していた。人々はごく普通の平凡な人間であればよかった。こんなに希望にみちた発展はどうなってしまったんだろう？世界はまたしても気違いじみた命令や過大な要求でいっぱいだ。僕たちが求めているのは最小限の知力・勇気・愛国心・名誉心・正義感などがあればやっていけるような世界だのに現にあるのはなんだろう？　僕はうんざりする。何もかもうまくいかないからモラルが持てたり、しょっちゅう欠乏状態にさらされているから諦めを悟ったり、組織が欠けているから蜜蜂のように勤勉だったり、政府が戦争に捲きこむから勇敢だったりすることに僕は飽き飽きした。カレ、ねえ君、モラルというのはどれもこれももうたくさんだよ。僕は英雄になることはきっぱり拒絶する。

ウェイトレスがパンの配給切符を受けとった。レイノヤツはギリシャを襲い、ルーズヴェルトは選挙の遊説に出かけ、チャーチルと魚たちは敵の上陸を待ち、ナマエナドモンダイデナイヤツはルーマニヤに兵を送り、そして依然としてソヴィエト連邦は沈黙していた。

12（XVIII）カレの結語　曖昧な手つき

カレ　先達ての君の感動的な呼びかけを、英雄ばやりの時代に関する君の憤懣を、僕は一晩ぐっすり寝たあとよく考えてみた。僕は君と契約しようと思う。僕はなんきん虫駆除の有限会社を設立する。資金を提供してくれる男をみつけたんだ。

ツィフェル　その契約を受け入れよう、躊躇の気持はあるがね。

カレ　君のものの考え方のことだがね。君の話からこういうことが判ったよ。君は愛国心とか自由への渇望とか善意とか自己犠牲とかいった厄介なモラルも、また故郷なんぞくそくらえなんて気持とか奴隷根性とか粗暴とかエゴイズムとかいったものも、どちらも必要としない状況が支配している国を求めているんだろう。そういう状況が社会主義なんだよ。

ツィフェル　待ってくれ。そういわれるのは思いがけないな。

カレは立上り、コーヒーカップを高くもち上げた。

カレ　君が立ちあがって社会主義のために僕と乾杯してくれることを僕はのぞむよ。——ただしこんな場所だから人目につかないようなかたちでね。それからいいおとすわけにはいかないことだが、目標を達成するためにはありとあらゆるものが必要になるだろう。つまり極度の勇敢さや、自由への強烈な渇望や、最大の自己犠牲や最大のエゴイズムが、ね。

ツィフェル　そうだろうと思っていたよ。

そういって彼はカップを手にして立ちあがり、曖昧な手つきを見せた。それがカップを打ち合せる身ぶりだとは、誰にもかんたんには見破れないような手つきだった。

（了）

◇　◇

「亡命者の対話」について

一九三〇年代の末から四〇年にかけての時期、ナチスがヨーロッパ諸国の殆んどを掌中にしたころ、〝ヨーロッパの左翼にかなりの混迷と動揺がもたらされていたろうことは推測にかたくない。人々はしばしば西ヨーロッパ労働運動のむざんな挫折に根ざしたペシミズムと、人々自身の行動が築くべき未来へのオプティミズムとのあいだの綱れを克服することができなかった。たとえばこういう声があった。……ぼくらの運動は窮地におちいり、闇が深まっている……ぼくらは誤謬を犯した、それはもはや否定しえない。ぼくらの数は減り、ぼくらのスローガンは混乱している……ぼくらは生きた流れから抛りだされた残り滓にすぎないのか？誰をも理解せず、誰にも理解されぬでくのぼうでしかないのか？

この声に答えてブレヒトは書いた、きみ自身の答えのほかに答えがあると期待するな、と。ではブレヒト自身は、彼自身はどのような答えを見いだしていたろうか。その答えのひとつのかたちをぼくらはこの「亡命者の対話」に読むことができる。〟（野村修訳、現代思潮社「亡命者の対話」訳者のあとがきより）

ブレヒトのスヴェンボルの詩の一篇〝動揺する者に〟の引用によるこのあとがきは、この作品の全容をひとことで表わしたよき解説となっていて、付け加えることは何もないと思います。

「亡命者の対話」は一九四〇年から四一年にかけてヘルシンキで執筆され、十八章と付録の断片（訳出されていない）から成り、ブレヒトの死後、一九六一年にフランクフルトで出版されました。ここに載せたものは野村氏の訳文で正味一三〇頁ほどの前記単行本から抜萃、構成したもので、一時間ぐらいで上演できることを目途とし、比較的に耳できいて判り易い内容選んでまとめました。

ブレヒトはディスカッションを好み、というよりむしろそれを空気のように必要としたといわれています。四〇年近くも昔に書かれた、この、ブレヒトの方法と意見で素朴なくらい徹底的にとき明かされた原則が、ほんとうに今日にも有効なのかどうか、有効であるとしたらどこで誰にどういうふうにか、つまり今日でもなおなぜ社会主義か、について改

めて深く大いにディスカッションする必要があるのではないか、そしてその時に始めて、誰にでなく自分に有効になるのではないか、としきりに考えるのです。

七五年春の西ベルリンでの舞台は、中幕前の狭いスペースに、二人が卓に向い合って坐ったまま、地の文章を交替に読み、会話に入るというやり方で、装置もいわゆる動きもなく、完全に対話に集中した演出でした。どこでも誰にでもやれる形としてひとつの手がかりになると思います。

（野村氏の訳を多少変えた部分については岩淵達治先生に教えていただきました。省略した章とタイトルは以下の通りです。Ⅰビールとシガーのつりあいについて　Ⅱ低級なマテリアリズムについて／無神論者について／ツィフェルが回想録を書く／重要人物たちがはびこることについて　Ⅲひとでなしどもについて／学校の微々たる挑発／ヘルンライター　Ⅳツィフェルの回想録その2／大人物どもにも難儀がある／ナマエナドモンダイデナイヤツは有産者かⅥ偉大な理想のあわれな運命／民間人問題という難問　Ⅹフランス　あるいは愛国心について／根をおろすことについて　ⅩⅡスエーデン　あるいは隣人愛について／喘息の一症例　ⅩⅤことばを批評する

ナマエナドモンダイデナイヤツはヒトラーを、レイノヤツはムソリーニを指します。）

宮城クメコ
（俳優座演出部）

季刊　**新劇界**　No.2　400円

思出の人たちと文学座　杉村春子・大岡欽治
「オットーと呼ばれる日本人」論　阿部好一
G・A・トストノーゴフ氏との対話　桜井郁子
演劇記者の手記（2）　大川達雄
嫌われた社会主義演劇史　松本克平
関西新劇運動史（2）　大岡欽治
発行所　大阪市西成区松一ノ六ノ七　劇団潮流気付

誌代のことなど

◇通巻36号よく続けてこれたとおもう。これもひとえに東西り演のなかまの結束のおかげであるが、こばやしさんのセリフではないが、依然ドンドン行である。きよう（7月20日）現在4月1日発行の35号の未納誌代一〇万七千円もあるとは信じがたいかもしれぬ。これは全誌代の15%にあたる。

◇川崎信用金庫小田支店133527への振込利用が多くなった。ところがこの銀行、これ以外には利用していないので目立たず、時々不連絡ミスがある。必ず受取の返事は出すようにしているので、余りおそい時には申し出てもらわねばならぬ。

◇可成個人で誌代を立替えていられる向きもあるようだがこれはつらいことだ。こういう仲だ。増減いっこうにかまわない。実情に応じて「読んだ」誌代を送ってほしい。

◇少くとも一年〜一年半と全く無視されているような場合は打ち切ることにしよう。悪意はないが、コツコツと荷造りし乍らそれが一銭にもならぬ仕事はつらいことだ。

◇バックNo.の読者還元を考えている。2kg（15冊位）送料300円切手で進呈する。但し、25号位まで撰択はまかせてほしい。

古書籍全般

川崎駅東口・駅前大通り
ぶらぶら歩いて3分
工都の老舗・商品豊富

近代書房

〒210 川崎市川崎区砂子2—8—17
TEL 044（222）3482

■あとがき■

◇八月。恒例のゼミナール。但し西は総会のみ、和歌山湯浅の町。「いこら」を識るには絶好のチャンス。東は劇団静芸のモデル上演「旅立ち」が目玉商品。浜名湖畔で泳ぎもできるという。この身一つ、さてどうする。

◇ブレヒト「亡命者の対話」。原稿で2回、校正で3回読み、やっと納得ゆく。それもまだぼんやりとだ。むつかしい。しかしたまには良かろうとひらき直る。それにしても宮城さん、こんな労作よく下さった。

◇村山知義氏（3月22日）藤森成吉氏（5月26日・事故死）下村正夫氏（7月11日）と、このところ貴重な諸先輩を相次いで喪った。東京芸術座からは多忙な中、関口潤氏が追悼文を書いて下さった。しかし、これで済むものでもない。いちように課された仕事、ともに頑張らなくてはと念う。謹しんで諸先生の冥福を祈る。（もも）

演劇会議　三六号　一九七七年八月一日発行
定価　三五〇円（送料一二〇円）

編集委員　黒沢参吉・こばやしひろし
若尾正也・仲　武司・土屋　清
岸本敏朗・萩坂桃彦

発行所　演劇会議発行所
川崎市川崎区渡田四—一一—三
萩坂方
電話　〇四四（333）〇七七五

誌代銀行振込は川崎信用金庫小田支店一三三五二七へ